
魔法少女リリカルなのはstrikers～蒼眼の死神～

闇帝

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのはstrikers 蒼眼の死神

【Nコード】

N6702H

【作者名】

闇帝

【あらすじ】

伽藍の堂にて平穏な日々をおくっていた直死の魔眼を持つ少女、両儀式。自分の夢や理想を目指す為、前に進んで行く事をためらわない機動六課のメンバー達。本来ならば関わる筈のない世界の住人達が一つの事件を起に交わる事になる。その出会いが生み出すのは希望の光りか破滅への闇なのか……。魔法少女リリカルなのはstrikers 蒼眼の死神、始まります。

プロローグ（前書き）

はい、どうも初めましてです。ここで新たに書かせて頂くことになった闇帝です。以後お見知り置きをm（＿）m。さて、今回ここに載せている小説は元々私が別のサイトにて掲載しているものを改修したりしたものです。なのでもしかしたら見覚えあるなあ、と言う方がいるかもしれませんがぜひ楽しんでください。

それで

は魔法少女リリカルなのはstriker's蒼眼の死神〜始まり
ます！

プロローグ

……何処だ…ここは…？

ゆっくりと目を開けると我は不可思議な液体の中に居た……。

全体的に緑がかっているが不快感は無い。
むしろ心地よいぐらいだ…。

酸素マスクらしき物は付けていないが普通に呼吸ができる。一体何なのだこれは……？

「おゝ、ようやく目が覚めたか」

その時目の前に一組の男と女が現われた。

一人は狡猾的な表情を浮かべている、白衣を来た男。
もう一人は何かの制服らしき物を着ているウェーブが、かかった薄紫色の長髪の女。

「誰だ……貴様らは…」

「おっと、そんなに警戒しないでくれたまえ。
一応これでも君の命の恩人なのだよ？」

その男は、常人が見たら確実に不気味と思うような笑顔を浮かべながらそう言った。

「命の恩人…だと…？」

「そうだ。」

私の娘が仕事の帰りに、傷だらけの君を発見してね。
そのままにして置くのも忍びないとゆうことで、ここに運ばせても
らったよ」

傷だらけの我を運んだだと……？

そんなことは有り得ん…。

我は「あいつ」との戦いに敗れ、この身諸共消えたはず……。

「ふむ……信じられないと言う顔をしているな。」

まあ、無理も無いだろうね。

君は左腕が無くなっているうえに、瀕死の重症をおっていたんだ。
普通は死んでもおかしくない。
それに……」

「ドクター、そろそろ……」

男の言葉を遮るように、さっきまで黙っていた女が口を開いた。

「おっともうそんな時間か…。」

すまないが私も仕事があるので、これでおいとまさせてもらおう。
取り敢えず君はゆっくりと休みたまえ。

何か必要であればそこにいるウーノに頼むといい」

白衣の男は、後ろにいた女を指差し、この部屋の出口と思われる所
へ向かった。

「そうそう、もし良ければ君の名前を覚えてくれないか？」

途中で振り返りながら男は私にそう問うた。

「我が名は……荒谷宗蓮」

第一話：始まりへの道（前書き）

人の人生には偶然はなく、全てが必然で成り立っていると言われている。ならば：これから始まる大きな出会いと事件もまた必然になるのだろうか？それは誰にも判らない：。ただ一つ言える事は：この切っ掛けが新たな物語の始まりであった事には間違いない。魔法少女リリカルなのは *strikers* 蒼眼の死神 へ 始まります。

第一話：始まりへの道

「式、先程緊急の依頼が私の下に届いた。

突然で悪いが直ぐに向かってもらえないだろうか？」

事務所で幹也の入れた茶を飲んでみると、橙子からいきなりそんな言葉が飛び出した。

此所は東京のとある某所にある廃墟。

その中にある魔術師「蒼崎橙子」の工房兼事務所である「伽藍の堂」

その一角にあるリビング……と言えるかどうか微妙な部屋の中に人が三人いた。

一人は蒼い着物の上に赤い革のジャンパー、傍らには日本刀を立て掛けている中性的な顔立ちが特長の美女「両儀式」

もう一人は優しげで大人しそうな感じの、前髪で左目を隠しているメガネをかけた青年「黒桐 幹也」

部屋の奥のデスクに座っている、赤い髪をポニーテールに纏め、鋭いまなざしが特長の女がこの工房の主「蒼崎 橙子」である。

「何だ橙子やぶからぼうに……そんなに大変な依頼なのか？」

私は幹也の入れた茶を啜りながら聞き返した。

「いや、この依頼の難易度自体はそれほど高く無いのだが……内容が些か面倒なのでな。」

断る事もできるが、私達も無関係ではないし無下にはできんのだよ。だから悪いが早急に行ってもらいたんだ」

コーヒーを飲みながら橙子はそう言った。

その顔には、いつものひょうひょうとした表情は無く、魔術師「蒼崎 橙子」としての顔がそこにはあった。

「そんな面倒な依頼ならオレじゃなくて自分で行けば良いだろう。その方が確実じゃないのか？」

私はそんな当たり前の疑問をぶつけてみたが、橙子は首を横に振った。

「私もそうしたいんだが、あいにくこっちも別の依頼で動かなければならないのでな。」

面倒くさいと思うが今回は有無を言わず折れもらうぞ？」

私が折れなきゃいけないのはいつもの事だと思っただけれど……。

「わかったよ……。」

それで……その依頼で人を殺しても良いのか？」

人を殺す……その言葉を聞いて幹也が眉を潜めるのが見えたが私は敢えて無視をした。

「ああ、逆にそうしてくれと助かる。

それとこれが依頼の内容と場所だ。

移動には私のバイクを使って構わない」

橙子から一つの封筒を受け取り、立て掛けてあった日本刀を手にする。

「式……きをつけてね。」

幹也がいつものように心配の言葉をかけてくる。

「ああ…それじゃあ行ってくる。」

私は橙子のバイクを使って、依頼の場所への移動を開始した。

私が橙子から渡された封筒に入っていた指示の紙に従って、依頼の場所に到着したのはもう深夜の時間帯だった。

今回の依頼の内容は、ここ最近になって多発している連続殺人事件の調査と解決。

私が今いる場所の近くに、その犯人と思われる奴のアジトがあると書いてあるけれど……。

改めて今いる場所を見渡してみる。

周りの街灯のお陰でうっすらとだが、全貌が見渡せた。

何かのビルを壊した後なのか周りはまっさら空き地だけが広がっている。

本当にここにアジトがあるのかどうか正直疑問に思う。

行く前に聞いた橙子の話によれば、今回の事件には魔術師らしき者が関わっている痕跡があったらしい。

もしそうだとすれば、後々面倒くさい事になる。

協会の奴等が動きだすかもしれないからだ。

橙子は奴等から封印指定と言う物を受けているらしい。

もし連中が今回の事件の魔術師を処分するためにこの辺り一帯を調べ始めたら、いくら橙子でも隠れきれないらしい。

もし見つかるなんて事になったら、それに関わっている、俺やコクトーやアザカにまでとばっちりがくる。

そうならないために橙子は今回の依頼を受けたらしい。わたしには殺し合いができればそれで良いのだけれど。

さてと……それじゃあアジトを探し始めるか……。

そう思って周りを搜索し始めようとした時、突然目の前の空間が歪み始めた……。

「なるほど……一応情報は間違っていないようだな……」

私は咄嗟に後ろに飛び、懷からナイフを取り出し構える。

「さて……はた迷惑な犯人の顔を拝むとするか……」

しかし、私の予想を裏切って目の前の歪みからは全く別の物が出て来た。

例えるなら薬のカプセルに触手が生えたような形をしている機械。

そんな物が歪みから計4体出て来た。

…生き物ならまだしも機械となると少し面倒か…。それに胴体の色が闇に同化していて見えにくい……。

「またいい……今はただ目の前のこいつらを『殺す』だけだ……」

私は一度目を閉じて自分流の切り替えをする。

そして再び目を開く。

そこには有機物や無機物に関わらず、この世に存在する全ての物が内包している「死」……「死の線」が現われた。

「お前らに見せてやるよ……生きているのなら神様だって殺してみせる力を……」

式の言葉が引き金になったのか、機械達は周りを囲もうと散開し始めた。

そのスピードはなかなかの物で、油断していれば命取りになりかねない。

相手の意図を察知したのか、式は近くの一機に素早く回り込み背後を陣取る。

機械もそれに気付き振り返ろうとするが、『線』をナイフで一閃され破壊された。

「なるほど……知能はそこそこ、スピードもなかなかあるようだな……」

一度止まったのを好機と見たのか、後ろに回り込んでいた一機が一斉に触手みたいな物を伸し式を捕獲しようとする。

だが、それに気付かない式ではなく即座にナイフを右手に持ち替え、触手を切り落とし接近。

触手を破壊され攻撃手段を失った機械は、式を迎撃できるはずもなく『線』を一閃され破壊………されなかった。

「何……!？」

機械は式がナイフを振る直前に障壁を張り防御したのだ。

その隙を見逃さずに後方に潜んでいた二機が一斉にレーザーを乱射してくる。

「チッ………!!」

咄嗟に障壁を張った機械の後ろに周り込む。

そいつ盾にしてレーザーを防御、その隙に『線』を一閃し二機目を破壊した。

「まさか障壁を張る力があったか……。」

だが……オレの『目』の前には全て無駄だ……。」

ナイフを改めて構え直す。

地面を蹴り、その爆発的なスピードでレーザーの包囲網を抜け、一瞬で機械との距離を縮めた。

二機は咄嗟に障壁を張るが、式の目には焦りの色が見られない。

それもその筈だ。

式の持っている『直死の魔眼』は、この世に存在するあらゆる物の『死』が見えるのだ。

それはバリアの類に入る障壁も例外では無い。

障壁の『線』を凝視しナイフで一閃し『殺された』障壁はその場で消滅。

その隙に胴体の『線』を一閃され破壊される。

残りの一機は式に向かって障壁を張りながらレーザーを乱射するが、今の式に当たるはずもない。

そのまま障壁ごと胴体の『線』を一閃され破壊された。

「これで終わりか……。」

先程からある歪みから増援がくる気配も無いため、式は刀とナイフを収めた。

「さてと……それじゃあこの歪みを調べるか……。」

しかしそれをする事はできなかった。

「な、何……!?!?」

さっき破壊された機械の残骸から突然眩い光が溢れ出したのだ。

そこには機械の残骸も、式の姿も無かった。

この時、この世界から両儀式は消滅した。

ミッドチルダ首都クラナガン

「ちっ……一体何だったんだ、今の光は……？」

さっきの眩い光が収まったのを感じ、私はゆっくりと目を開けた。

「……ここは何処だ？」

そこはさっきまで居たまっさらまっさらな空き地ではなく、何処かの路地裏と思われる場所だった。

おかしい……私は何でこんな所に居るんだ？

さっきまで、あの空き地で変な機械共と戦闘をしていて、全部破壊した後だった。

それはあの機械を切った感触がまだこの手に残っているのが何よりの証拠。

そしてあの歪みを調べようとしたら突然光が始めて……、いつの間にか此所にいた。

「くそっ！　いったい何がどうなってるんだ！」

状況がわからない事にイライラしたせいか、つい怒鳴り散らしてしまった。

落ち着け……。

今此所でイライラしても何の解決にもならない。とにかく今は、せめて何処にいるかぐらいは確認しないと……。

改めて周りを見渡してみると、前方に路地裏の出口らしき光が見えた。

そこから微かに人の声も聞こえる。

「しょうがない……罾かもしれないけど行くしかないか……」

ここで何もしないよりかは遥かにマシだし、私をこんな所に飛ばした奴をぶっ飛ばさないと気がおさまらない……。

私は取り敢えず今の自分の装備を確認した。

刀は腰の鞘に納めてあるし、ナイフはいつもの懐にちゃんとある。

これなら一応魔術士が出て来ても何とか対応できるだろう……。

敵が潜んでいる時の為に、ナイフを逆手に持ちながら出口に向かった。

相手の気配や殺気がないか、自分の神経を周りに集中させながら歩き……、出口の目の前にたどり着いた。

そして一度深呼吸をして、気持ちを落ち着かせる

「さて……鬼がでるか蛇がでるか……」

私は意を決して、ナイフを構え出口に向かって疾走した。

しかし予想とは裏腹に、私の目の前には敵などは一切いなかった。

その代わり……。

「……………」

そこには見た事の無い、やけに発展している都市の町並みが広がっていた。

第二話；機動六課出撃（前書き）

フォワードメンバーの皆の初出動から一週間が経ち、一時の平和に浸っていた私達。そんな時に関知された一つの転移反応。それに重なるかゝ。魔法少女リリカルなのはs t r i k e r s 蒼眼の死神く始まります。

第二話：機動六課出撃

時空管理局「機動六課」指令室

「ごめん、遅くなってもうたわ」

「ごめんなさいです〜」

慌ただしく指令室に入って来たのは、この「機動六課」の部隊長である八神はやたとユニゾンデバイスでもあるリインフォース？である。

「それでグリフィス君……さっき確認された次元転移反応があったのはどの辺りなんや？」

席に座りながら、自分の副官であるグリフィス・ロウランに今回の状況を尋ねた。

「はい。」

微弱な反応だったので細かい位置までは特定できなかったのですが、首都クラナガンの繁華街方面です」

前方のモニターにクラナガンの地図が表示され、大体の位置を表す円が現われた。

「どう思いますか部隊長？」

顎に手を添えながらはやとは考え始めた。

「そうやね……。

ガジェットが転移してくる反応にしては今回ののはあからさますぎるやし……」

そう、はやてはそこに疑問を持っていたのだ。

今まで自分達が相手にして来たガジェットは、大抵レリックがある目的地から遠く離れた場所に転移させ、そこから移動を開始するというのが常套手段だった。

しかし今回は首都クラナガン、それも街のど真ん中に転移反応があったのだ。

これはどう考えてもおかしいとしか言い様が無い。

それにレリックが護送されたり、このクラナガンにあるという情報は一切この機動六課には入っていない。

とするとガジェットの反応では無い……？

「次元漂流者が転移したとゆう事は考えられないですか？」

リンがもう一つの可能性について尋ねた。

「可能性としてはそっちの方が高いんやろうけど、それにしても転移反応が小さすぎるんや」

はやても一応その事は考えてはいた。

他の世界から何らかの戦闘や事故が原因で、人が次元転移してくるとゆうのはこのミッドチルダでは決して少ない話だ。

だとしたら不可解な点が一つあるのだ。

それは次元転移反応の小ささだ。

通常他の世界から別の世界へ移動すると言う事は、本来なら多大なエネルギーが必要となる。

それは今話した次元転移反応にも比例する物なのだ。

しかし今回のそれは余りにも小さすぎる。

だとすればいったい何が転移したと言うのだ……？

「取り敢えず状況確認だけでもしとこか。

何か起こった時には遅いやしね」

はやては通信席に座っているアルトに指示を出した。

「アルト、直ぐに訓練中のスターズ分隊に召集をかけてや。それとヴァイス君にもヘリの準備を行なうように……」

その時突然「機動六課」にサイレンが響き渡った。

「どないしたんや!？」

「首都クラナガン方面に向かうガジェット反応を確認! ? 型15機、? 型20機を確認しました!」

「向かっている場所は？」

「進行方向からして……先程転移反応があった場所の近くです!」

それじゃあさっきの反応は漂流者の方……?

いや、今はそんなことは後どうでもいい。

目の前にウィンドが開き、なのはとフェイトが映し出された。

「はやてちゃん状況を教えて!」

「今クラナガンに向かうガジェットを確認したんや。数は合計35機。?型15機に?型が20機や!」

「とゆうことはレリックの反応があったて事?」

フェイトが最もな疑問を問い掛けて来る。

「いや、それがまだそれらしい反応が見つかって無いんや。

多分レリックやのうてそれに近い物が近くにあるんやと思う。

取り敢えず直ぐに出撃してほしいんやけど行けるか?」

「スターズ何時で行けるよ!」

「ライトニングもOKだよ!」

「それと……さっきその近くで次元転移反応があったんや。

もしかしたら漂流者が近くにいるかもしれんから、見つけたら保護したってや」

「わかったはやてちゃん」

「部隊長、ヘリの用意が整いました！」

アルトが出撃準備完了を告げる。

「よし……機動六課出撃や！」

『了解!!』

首都クラナガン中央公園

「はぁ……疲れた」

1時間程、街の中を歩き回った私は偶然見つけた公園のベンチで一休みしていた。

一通り探索してみたがこれといった情報は手に入らなかった。
わかった事と言ったらこの街の名前がクラナガンということぐらいだ。

賑やかなショッピングモール

ゲーセン

アイスクリーム屋

レストランetc……

見た目は何処にでもある賑やかな街の中心部……と言った感じだ。

だけど……クラナガンなんて街、日本にあったか？

私の記憶が狂ってなければそんな名前の街はない……いや何処の国にも無かった筈。

それに、街の雰囲気や建物の外観、使われている文字は、外国のそれに酷似しているけど、話している言語は日本語に近い……。

いったい何なんだこのデタラメな街は……。

それに……私をこんな所に飛ばしたやつ の正体もまだ分かっていない……。

「ハア………」

私はため息をつきながら真っ青な空を見上げた。

コクトー達は今頃どうしてるかな……。

その時突然、街全体に何かの砲撃音が響き渡った。

「な、何だ……今の音は……？」

それに呼応するかのようにサイレンが鳴り響き、放送が流れ始めた。

『ただいま時空管理局より第一種警戒体制が発令されました。

付近の住民の方々は職員の指示に従い最寄りのシェルターに避難してください。

繰り返します……』

「時空管理局……それに第一種警戒体制だど？」

管理局と言う名前からして、多分この街の警察か何かだろう。

だが私が気になったのはそこではなく、今発令された第一種警戒体制の方だった。

「まさか……オレが闘ったあの機械供がこの街に？」

その考えに至ったのには一つの理由があった。

私がこの街に飛ばされたのは少なからず、あの機械供が関係しているのは違いない。

だとしたら、何らかの形でそいつらがこの街に仕掛けてくるのではないか……。

「そんな予測を立てていたけれど……まさかドンピシャだとはな……」

物音がした方向に目をやると、林から俺が空き地で破壊したのと同じタイプの機体が5体出て来た。

しかも形が微妙に異なっており、ミサイルポッドみたいなのを装備してる。

「良いぜ……相手をしてやるよ。」

お前らには無性に腹が立っていたしな……」

ナイフを右手に構え、魔眼のスイッチを入れる。

さあ……第2ラウンド開始というじゃないか……」

クラナガン上空、輸送ヘリ「ストームレイダー」内部

「それでは作戦を説明するです」

はやての代わりに現場の指揮を任されたリインが、モニターを背にしながらフォワードメンバーに説明を開始した。

「今回は前回の列車でのレリック保護の時と同じように、上空のガジェットはなのは隊長とフェイト隊長が相手をしますです。」

その隙にスターズは、公園の方で確認された方を、ライティングは中心部の方で確認されたガジエツトを破壊してください。

また、避難が遅れた市民がいた場合は最優先で保護してくださいです。

何か質問はありますか？」

フォワードメンバー全員首を横に振る。

「ああ、それともう一つ…」

なのはが重要な事を付け加えた。

「八神部隊長から聞かされたんだけど、さっきこの近くで次元転移反応があったんだって。」

それによると、もしかしたら次元漂流者が居るかもしれないから、見つけて保護して欲しいの」

「見つけるって……どうやってですか？」

幾ら他次元の人間って言っても、流石に見つけ出すのは不可能じゃ……?」

ティアナが扱く当然の質問をした。

「それなら問題ないよ。

実は皆のデバイスにちょっとした細工をしたんだ
シャーリー?」

『はいはい、それは私から説明させてもらいますね』

フォワードメンバーの目の前にシャーリーを映すモニターが現われた。

「えとですね、皆は知らないと思うんだけど次元漂流者はミッドチルダ……つまりこちらの世界に転移して来た時にある特殊な物質を体に付着させてる事が多いのよ。

その物質を私達管理局の人間は『次元質』と呼んでいるの。
それで皆のデバイスにはそれを測定する機能を付けさせてもらったから皆が『次元質』を持っている人に近付くと反応するようになったので大丈夫だよ」

メンバーは各々のデバイスを見ながら感嘆の声を漏らした。

「なのはさん、フェイトさん、もうすぐガジェットのいる空域に到着するので準備をお願いします!」

ストームレイダーのパイロットであるヴァイスからそんな声が飛んで来た。

「了解だよヴァイス君！ハッチを開けて！」

ストームレイダー後方にある、ハッチが開き凄い勢いで風が内部に侵入してくる。

「それじゃあ皆、空は私とフェイト隊長で押さえるから、地上の方をお願いね。」

「いこうフェイトちゃん」

「うん、なのは……。」

「スターズ1、高町なのは……」

「ライトニング1、フェイト・T・ハラオウン……」

「「行きます！！」」

ハッチから勢い良く飛び降り、降下する途中でバリアジャケットを装備した二人は、飛行しているガジェットに向かって飛び立って行った。

「よし、次はスターズの二人だ！」

もうすぐ降下ポイントに着くから準備してくれ」

スバルとティアナは自分のデバイスを握り締めながら、後方のハッチへと近付いた。

「ティア、今回の任務も頑張ろうね！」

「当たり前じゃない、今のあんたと私ならこれぐらいの任務楽勝よ」

前回の任務での成功の影響か、二人の顔には自身が満ち溢れていた。それはライトニングの二人も同じのようで、エリオやキャロも前回に見られた緊張は無くなっていた。

「おい、マジかよ……!?!?」

「どうしたんですかヴァイスさん?」

突然驚きの声を上げたヴァイスに、エリオがパイロット席に近付きながら聞き返した。

「スターズの二人が相手をするガジェットに民間人が襲われてる!」

「何ですって!?!?」

エリオが驚きの声を上げてヴァイスのデバイス「ストームレイダー」が映してくれた拡大映像を見た。

ヴァイスの言った通りガジェット? 型改5機が、クラナガンじゃ見掛けない服を来た、女の人の目の前に展開していた。

女の人も抵抗しようとしてるのか、刃物みたいのを構えている。

そんなことはエリオ達魔導士からしたら無謀極まりない事。

管理局の魔導士でもてこずる相手に、ただの民間人がかなう筈も無いからだ。

そのただの民間人が以前にガジェット4機を破壊している事を露知らずに……。

「スバルさん、ティアナさん、急いで降下してください!!」

「ど、どうしたのエリオ？」

凄い剣幕のエリオにびっくりしたスバルがモニターに応じた。

「ガジェットに囲まれてる民間人がいます！」

このままだと襲われてしまいます、すぐに行ってあげてください！」

「わかった。ティア！」

「分かってる、行くわよスバル!!」

「スターズ3、スバル・ナカジマ……」

「スターズ4、ティアナ・ランスター……」

「「行きます!!」」

第三話；接触（前書き）

私とティアナが会った異世界の少女、両儀式。ガジェットを破壊したその圧倒的な戦闘力は私達に一体何をもたらしてくれるのか…。それは多分：これから動き次第なのだろう。魔法少女リリカルなのはs t r i k e r s 蒼眼の死神 始まります。

第三話；接触

スバルとティアナは哑然としてその光景を見つめていた。
悪い意味……自分達が間に合わず、民間人を助けられなかったと言
う事では無い。

全て終わった後だったのだ。

ガジェットの残骸の中心に立つナイフを持った一人の少女。
それが全てを物語っていた。

ティアナは有り得ないと言った表情でそれを見ていた。

本来、ガジェットはその性能から管理局所属の魔導師もてこずる相
手なのだ。

それがリンカーコアはあるとしても、デバイスを持たないただの一
般人が魔法も無しに倒せる代物では無い。

最初は手に持っているナイフが何かしらの魔力を宿しているかと思
ったが、自分のデバイスである「クロスミラージュ」がそれを否定
した。

あれは何の変哲も無いタダのナイフだ。

それじゃあ一体どうやって倒したのか……。
謎は深まるばかりだ。

「誰だ……そこのお前ら？」

ティアナが考えに老けていると、その少女は突然振り返りながら尋
ねた。

声には殺気が、目には敵意が宿っており、敵であれば直ぐにでも殺すと言う意思表示でもあった。

「ひっ…！」

その恐ろしさにスバルとティアナは思わず体が竦んでしまった。それもそうだろう。

彼女達は今までガジェットなどの、言ってしまうえば只の機械を相手にしてきたのだ。

そんな中突然、本気の殺意を浴びせられれば体か竦んでも仕方が無い。

むしろ恐怖を押し殺しながら、自分達の職務を果たそうとするのだから称賛に値する。

「わ、私達は時空管理局の者です。
貴女を保護しに来ました……」

「時空管理局……？」

ああ、この街の警察みたいやつらの事か……。
なら、最初からそう言えよな」

そう言った後、彼女はナイフを懷に収め、先程まで空気を圧迫していたかのような敵意が嘘のように消えた。

それに、安心したのか二人は改めて彼女の姿を観察した。

容姿は絹みたいに滑らかな黒髪をショートカットにした中性的な顔立ちの美人。

服装はミッドチルダでは見掛ける物では無く、以前任務で訪れたなのはの故郷「第97管理外世界」の「着物」に酷似している物の上に赤い革ジャンを羽織っている。

その出で立ちや先程彼女が言った言葉に疑問を持ったティアナはクロスミラーージュに、ある事を尋ねた。

「ねえクロスミラーージュ……あの人から『次元質』の反応は？」

『出ていますマスター。』

この人物が次元漂流者で間違いありません。』

なるほど、それならばガジェットを破壊できた理由がある程度推測できる。

他の世界から転移して来た人間は、その身に何かしらの特殊能力を身に着けている事が多いらしい。

この人も多分その能力を使ってガジェットを破壊したのだろう。

『スバルこの人次元漂流者よ……』

『分かってるティア』

一応スバルにはその旨を伝えたが、必要は無かったらしい。

「おいそこの青髪……」

「え？」

わ、私ですか？」

突然自分の事を青髪と呼ばれたスバルがしどろもどろしていた。

「お前以外に誰がいるんだ。

取り敢えず聞きたい事が幾つかあるんだが良いか？」

「あ、はい。構いませんよ。」

それと私の名前は青髪じゃなくてスバル・ナカジマです。」

「へー、スバルって言うのかお前。」

そのオレンジ頭、お前の名前は？」

「オ、オレンジ頭……」

「クスクス……」

笑い声の方向を見てみると、口元を押さえながらスバルが笑っていた。

「ちょっと黙ってなさいバカスバル！」

ゴホン……私の名前はティアナ・ランスターです。貴女の名前は？」

「俺の名前は式……両儀式だ。」

名字で呼ばれるのは嫌いだから式で良い」

「分かりました。」

スバル、対応はあんたに任せるわ。

私はなのは隊長達連絡を取ってくる」

「うん、お願いティア」

そう言うとティアナはデバイスを取り出し、なのは達に連絡を取り始めた。

「それで式さん聞きたい事って何ですか？」

「まず一つ……此所は何処なんだ？」

この街の名前……確かクラナガンって言ったか。

俺の記憶じゃそんな名前の街は日本に存在しないし、他の国にも無い。

一体どうなってるんだ？」

式の口から出た単語、『日本』と言う言葉を聞きながらまさかと思いながらも聞いてみる。

自分の知っている限りその名前の国が存在する星は一つしかないからだ。

「あの式さん……つかぬ事を聞きますが貴女の住んでいる星は……もしかして地球ですか？」

「は？」

そんなの当たり前だろ。

ん？

まさかお前……ここは地球じゃないと言わないだろうか？」

自分からしてみればすっ頓狂な質問をしてきたスバルの言葉を聞き、勘の鋭い式は普通からすれば到底有り得ないであろう質問をする。
が、今回はその「普通」はここでは通用しなかった。

「式さん……落ち着いて聞いてくださいね？」

此所は貴女が住んでいた、貴女の知っている世界では無いんです」

「どうゆう事だ……？」

「此所はミッドチルダ……貴女が住んでいた世界とは全く別の次元世界です」

「聖王のゆりかご」内部

スカリエッティの前に一つモニターが映し出されていた。

そこには何処かの路地裏で、青いクリスタルを持った一人の少女が映されていた。

「どうやらうまくいったようだねウーノ」

「はい、ドクター。」

予定通りジュエルシードはお嬢様が確保し、間もなく転送でお戻りになります」

「ふふふ……レリックの探索の為に出したクズ鉄からジュエルシードの反応があった時には驚いたが……これは思わぬ収穫だね。

それに……面白い人物の映像も手に入った」

今度は別のモニターが現れ、そこにはガジェットを破壊している式の映像が映っていた。

「強化魔法を使わないのにこの身体能力の高さ……更にはデバイスを使わずにあのクズ鉄を破壊したこの戦闘力の高さ！

素晴らしいではないか！バラバラに解剖して、体の構造がどうなってるか調べてみたくなるよ！」

まるで新しい玩具を手に入れた子供のようにはしゃぐスカリエッティ。

だが、その狂喜に満ちた顔は子供とはかけ離れたものである。

「確保の為にガジェットを出撃させましょうか？」

「いや、まだ良いよーノ。

もつと彼女の力を見させてもらおうではないか。

いずれは私達の計画の邪魔になる奴だ。

ここでデータを集めておいて損は無いだろう。

そうだろう……アラヤ君？」

機動六課、取調べ室。

ガジェットとの戦闘が終わった一時間後……。

ガジェットの残骸などの現場検証や街の修復を陸士部隊に引き継いだ後、機動六課メンバーは帰還していた。

式は身体検査を受けた後、なのは達隊長陣の自己紹介を受け、状況とミッドチルダについての説明を受ける。

今は式がミッドチルダに來た状況や元いた世界の情報を話していた。

歳が近いと言う事もあり、今はお互いにタメ口で話している。

「……神秘を再現する魔術に、それらを操る魔術師。

その魔術師を統括する『協会』と言う存在……。

私達の世界とは大違いだね」

一通り説明を聞き終えたなのは達は、驚きの声を漏らした。

大まかな世界の状況などは以前に自分達が住んでいた「第97管理外世界」と瓜二つ。

だけど、自分達が使用している魔法には全く別の「魔術」を使う魔術師の存在。

時空管理局には無いにしろ、「協会」という巨大な組織が別の世界にあったとは正直信じられなかった。

「式、その魔術と言うのは私らの魔法みたいにおおっぴらに使われてるもんなんか？」

「いや、使われていない。

そんな事をすれば協会の連中から追われる事になるし、それが無くても自分からバラすような行為は誰もしらないと思う」

式は説明した疲れがあるのか、今はお茶を飲んで一休みしている。

「それで……はやてだっけか？」

オレが元いた世界を見つけるのにはどれくらいかかりそうなんだ？」

それを聞いたはやては申し訳なさそうな顔をした。

「それがな式……一応覚悟しておいてもらいたいんやけど……。

もしかしたら元の世界に帰れへんかもしれへんのよ」

それを聞いた式は眉をひそめた。

「それはどうゆう事だ……？」

「うん……今の話からして式のいた世界は、私やなのはちゃんがい

た世界のパラレルワールドやと思うんよ」

パラレルワールドと言うのは、ある世界から分岐し、それに並行して存在する別の世界の事だ。

簡単に言えば「もしあの時こうしていれば」というi fの世界である。

「そこまで分かってるんだったら何で……?」

「パラレルワールドについては時空管理局の方でも未知の部類に入るんや。

数はそれこそ数千、数万……いや数億かも知れへん。

そんな中から、一つの世界を特定できる確率は限り無く0%なんよ……」

その言葉は式にとっては死刑宣告も同然の筈……なのだが当の本人はあっけらかんとしている。

「なるほど……だいたいの状況はわかった。

それで、これからの俺の処遇はどうなるんだ?」

「あの……式?

驚かへんのか?」

はやてが驚いた様子で式に質問した。

「何の事だ?」

「だから……もしかしたら元いた世界に帰れへんことにや」

はやての疑問も最もだ。

普通、自分の世界に帰れないと聞けば少なからずは驚く筈だからだ。

「別に俺は元の世界に戻れるかどうかなんて最初から気にしてない。戻れなかったらそれはそれで面白そうだしな。」

それにこれに近い事は俺の世界じゃ日常茶飯事だったんだ、今更驚く理由も無いし……」

「日常茶飯事ってどんだけ物騒なんや式の世界って……」

思わずツツコミを入れるはやて。

流石はエセ関西人、腐ってもツツコミの血が流れている。

「パキユ」

「あれ？何の音？」

見事にハモったフェイトとなのはが、音が鳴った方向を見ると、はやての手の中で無残に折られたボールペンがあった。

「ど、どうしたのはやて……」

「気のせいかな……」。

今誰かにかなりムカつく事を言われた気がしたんやけど……」

「おい、話が脱線してるぞ……」

そこに冷静なツツコミを入れる式。

「あ、ごめんね式。

それで処遇についてやね。

一応式の元いた世界が見つかるまで、うちの機動六課か本局で保護すると言う事で決まったんやけど……。

なあ式……もし良かったから機動六課にはいらへんか？」

「俺がお前の部隊に？」

式が茶を啜りながら、はやてに聞き返した。

「そうや。

スバルやティアナから聞いたんやけど、式は生身であるのガジェットを倒したらしいやんか？

その力を機動六課で生かして欲しいし、何より式にも魔導師になれる素質があるんよ」

「素質……確かにリンカーコアって言った物が俺にもあるのか？」

「そうやで」

そう、はやてはその事と式の戦闘力を見込んでスカウトしてきたのだ。

機動六課はレリックや他のロストログアの確保を目的とした部隊だ。となるとこれから先、それを狙う魔導師や時空犯罪者、ガジェットなどの戦闘が増えてくるのは目に見えてる。

それは同時になるのは達隊長陣やフォワードメンバーの危険が増えるのと同じ事だ。

ならば今此所で式みたいな有能な人材が部隊に入れば戦力は上がるし、何よりメンバーの安全性も高まる。

それに式が元の世界に戻るまでの間の居場所を作ってやりたい…

…。

はやてはそうゆう意味も含めて式を機動六課に誘ったのだ。

なのはやフェイトも同じ気持ちなのか、はやてを見ながら微笑んでいた。

「どうや式？」

別に今すぐに返事を言わなくても構わな……」

「良いぜ、お前らの部隊に入ってやるよ…」

「「即答!?!」」

三人見事なハモリ& a m p ; ツツコミ。

流石は十年の付き合いがある幼馴染み。
息がピッタリすぎて逆に怖くなる。

「な、何だよ。」

別にそんなに驚く事でも無いだろ?」

それには流石の式も驚き、一歩引いていた。

「い、いや式が別に良いなら構わないんやけど…。
そんなに急いで決めて大丈夫なんか?」

「別にこの世界でやる事なんて何も無いんだ。
ただ毎日無駄に過ごすより、お前の部隊で何かをやる方がよっぽど
有意義だ。」

それに……オレをこの世界に飛ばした原因にも近付けられるかもしれない
いな……」

実際はもっと別の理由があったのだ。

先程はやて達に話した通り、元の世界に戻るかどうかは正直どうでも良かった。

どうせ戻った所で自分の殺人衝動を満たす程の奴と殺り合う事ができるのはあまり無いだろうと考えていたからだ。

だからはやてから機動六課への誘いを受けた時、直ぐに返事を出したのだ。

此所に居れば少なくとも暇つぶしぐらいにはなるだろうし、上手くいけば自分みたいな異端と殺り合う事ができるからだ。

式の目には決意のまなざしがあり、それを見たはやて達も納得した。

「それじゃあ式改めて……機動六課へようこそや！」

笑顔を浮かべながらはやては握手を差し出し、式はそれを握り返した。

「宜しくね式」

「わからない事があったら遠慮無く聞いてね？」

なのはやフォワードも式と握手しながらそう言った。

「ああ、宜しく頼む……。」

式も無愛想ながら返事を返した。

そんな中フェイトは先程から気になっていた事を口にした。

「そういえば式……さっきから気になってたんだけど……貴女はど

うやってあのガジェットを倒したの？」

それはなのはやはやても疑問に思っていたのだ。

式は自分達魔導師とは違い全く魔法が使えない身だ。

幾ら身体能力がずば抜けているとはいえそれにも限界があるし、何より所持していた只のナイフでガジェットを破壊できる筈が無いからだ。

「ああ、その事か……。そうだな……。説明するより見せた方が早いかな……。」

なのは、今ナイフみたいな物持ってないか？」

「えっと……。こんなんで良いかな？」

なのはが取り出したのは、そこら辺に売っているようなペーパーナイフだった。

それを受け取り式は魔眼のスイッチを入れた。

「あ、目の色が蒼色に……。」

フェイトがそう呟いた後、式は先程まで自分が座っていた椅子の『線』をナイフでなぞり始めた。

なのは達から見たら、椅子にナイフが突き刺さっているように見えただろう。

『線』を全てなぞり終わりナイフを椅子から離した途端、椅子は音を立ててバラバラに崩れ落ちた。

その光景をなのは達は咄然として見ていた。

「有機物、無機物に関係なくこの世に存在する物は生まれた瞬間か

ら己に『死』を内包している。

俺はそれを『線』や『点』という情報として視る事ができるんだ。それが俺の眼……『直死の魔眼』だ」

式の説明を聞いていたなのは達は、あまりの反則技に驚きを隠せなかった。

が、正直言って説明してる内容はチンプンカンプンであった。

「何か私達……えらいジョーカーを引いてしもうたな……」

「にやはは、そうだねはやてちゃん……」

「幾ら何でもすごすぎだよ……」

そんなこんなで本日はお開きになりなのは達は夕食へ行き、式は案内された部屋のベットで寝っ転がっていた。

「はあ……だけど、まさかこんな事になるなんてな……」

式は今日一日あった事を思い出していた。

ガジェットとの戦闘。

ミッドチルダへの転移。

そこで初めて出会ったスバルとティアナ。

機動六課への入隊。

一日で色々な事があった。

元の世界に戻れないかもしれないと聞いた時には正直驚いたが、別にそれでも構わないと思っていた。

ただ幹也に会えなくなる事を考えた時、何故か胸の奥が微かに痛んだ。

その理由を考えながら、式は深い眠りに落ちていった。

第四話：模擬戦《前編》（前書き）

元の世界が見つかるまで機動六課で世話になることになった私。ミッドチルダという何も判らない世界にて：私はこの眼で一体何を見る事になるのだろうか？魔法少女リリカルなのはs t r i k e r s
　　蒼眼の死神　　～始まります。

第四話：模擬戦《前編》

翌日早朝

機動六課模擬演習場前

そこにはこれから訓練を始めるのはとバリアジャケット姿のスバル、ティアナ、エリオ、キャロ達フォワードメンバーが整列していた。

「はーい、皆集まってるね。」

それじゃあこれから早朝訓練を始めるね。

皆準備は良い？」

「「「はい!!」「」」」

その返事を聞いたなのは満足そうに頷いた。

「けどその前に……。」

皆には今日から私達の仲間になる人を紹介するね」

「仲間になる人ですか？」

スバルがキョトンとした顔で聞いてきた。

それは他のメンバーも同じで頭に？マークを浮かべている。

「うん、多分もうすぐ来ると思うんだけど……。」

「シャーリーさんというあの人じゃないですか？」

エリオが機動六課隊舎の方から近付いて来る人物を指差しながらそう呟いた。

そこには朝から何故かご機嫌なシャーリーと遠目で分かるぐらいに不機嫌な顔をした式がいた。

「ねえティア……」

あの女の人どっかで見た事ない？」

「奇遇ねスバル。私もちょうど同じ事考えてたわ」

スバルとティアナが式を見ながら同時に首を傾げていた。

「なのはさん、おはようございます」

「おはようシャーリー」。

式もおはよう、ごめんね朝早くから来てもらって」

「一体何なんだよ……」

もししようもない理由で呼び出したんならオレは寝させてもらおうぞ？」

式は欠伸をしながらなのはにそう言った。

「にゃはは、式の事を紹介しておきたかったし、ちょっと手伝って欲しい事があったからさ。

あ、皆に紹介するね今日から私達の仲間になる両儀式さん」

「名字で呼ばれるのは嫌いだから式で良い。

まあ、宜しく頼む……」

式の妙に軽い挨拶を聞いたフォワードメンバーは少し唾然とした顔をしていた。

「つてあゝゝ!!」

そんな中スバルが突然式を指差しながら大声を上げた。

なのはやシャーリー、他のフォワードメンバーも驚いたのか仰天した表情でスバルを見ている。

式だけはめんどくさそうな顔をしているが。

「ちょ、何なのよスバル。

いきなり大声を出して!」

「ティア覚えてない?

この人昨日私達が保護した次元漂流者の人だよ!」

その言葉で思い出したのかティアナは驚いた表情で見っていた。

式もスバル達のことを思い出したのか微かに目を細めながら二人を見ている。

「そう言えば昨日お前らと会ったな…。

確か青髪がスバルで、オレンジ頭がティアナだったっけか?」

「あ、覚えててくれたんだ」

「オレンジ頭……。

そ、それよりなのは隊長、何で次元漂流者である式さんが機動六課に入る事になったんですか?

本来なら保護しなければいけない筈なのに」

「式……別に話して良いよね？」

「ああ……」

その後なのはは式がこの世界に來た経緯。

元居た世界がパラレルワールドで戻れる確率が限り無く低い事。

はやてが式を機動六課に誘った理由などをフォワードメンバーにあらかた話して聞かせた。

最後の部分は式には聞こえないようにしていたが。

「そうだったんですか……：すいません式さん無粋な事聞いて……」

「別に気にしてないから謝るな」

相変わらず無愛想な式。

それを見たティアナは、何かやりにくい、と感じながら顔をしかめた。

「それよりそこいるチビも六課のメンバーなのか？」

「そうだよ、紹介するね。」

エリオとキャロだよ。

二人共まだ小さいけど、優秀な魔導師なんだ」

「よ、よろしくお願いします！」

なのはの言葉の後何故かエリオとキャロは式に敬礼した。

二人の自己紹介が終わった後、なのはは今回の訓練の説明を始めた。

「それじゃあ訓練を始めるね。」

今日はシャーリーからの要望で、式のデバイス用の戦闘データを取るのを兼ねてフォワードメンバーと式でガジェットを使った実戦訓練をやってもらおうから」

その言葉を聞いた式が眉をひそめた。

「おいなのは……それはオレも参加しないといけないのか？」

「当たり前だよ？」

式のデバイスを作る為なんだから。

それに私達の仲間になるんだから、これからは毎日訓練に参加しないとダメだよ？」

「めんどくさい……」

式はそんな事必要ないだろと思いつつも渋々懐から愛用のナイフを取り出した。

「それが式さんのデバイスなんですか？」

それを見たエリオがそんな質問をした。

「良く見てみる……これは只のナイフだよ。」

だいたいこの世界に来たばかりのオレがお前らみたいな武器を持つてる筈が無いだろ。」

だから今日は俺の戦闘データを取るんだろ？」

「た、確かに……。」

え？それじゃあ式さんはそのナイフで訓練に参加するんですか？」

「それがどうかしたか？」

それを聞いたエリオとキャロは驚愕の表情をしていた。

まあ、当然な反応と言えるだろう。

スバルとティアナも驚いてはいたが、昨日の光景を見ている為か落ち着いている。

「そんなに心配しなくても大丈夫だよ皆。

式は結構戦闘慣れしているし、これでも生身でガジェットを破壊してるんだから。」

全員の心境を察知したのかなのはがフォローを入れた。

その言葉に渋々納得したのかフォワードメンバーは模擬戦闘場へ移動した。

因みにシャーリーはデバイス開発を頼まれた時点で式の『眼』の事以外は教えられているので平然としている。

「おいなのは……あいつらにオレの『眼』の事を教えなくて良いのか？」

式は自分のナイフを弄びながらなのはに尋ねた。

「言葉で説明すると混乱するだろうから、見せた方が良いと思ってね」

「まあ、確かにその通りかもな……」

式はフォワードメンバーの後を追いかけるように模擬戦場へ移動し

た。

余談だがこの時点式の服装が着物だと言う事に疑問を持ったのは誰もいなかった。

模擬演習場内部

全員がスタートポイントに着いた時、なのはから訓練の内容が言い渡された。

『それじゃあ、訓練の内容を説明するよ。』

今回は予め設置されたターゲットを確保するミッション。

前々回の任務と同じと考えて良いよ。

出現してくるスフィアやガジェットを破壊しながらルートを進んで、如何に効率良くターゲットを確保するかがポイントになるから皆頑張ってね』

説明が終わった後、ティアナはなのはから渡された式のデータを見ながら今回のプランを考えていた。

ミッションの内容自体はそれほど難易度は高くない。今の自分達ならば焦らなければ十分に成功する自身がある。

しかし、今回は式と言う不確定要素がある。

魔法は全く使えない素人だし、武器は何の魔力も付加していない普通のナイフが一本。

身体能力はスバルやエリオの軽く上に行くがそれでも不安なのは変わらない。

正直この状態でガジェットを破壊したのが未だに信じられなかった。なのはが言うのだからそこには嘘や偽りは無いだろう。

直接では無いにしろ自分やスバルもその光景を見ている。
さてどうしたものか……。

「ねえティア〜早くしないとスタートの時間になっちゃうよ?」

「わかってるわよ……」

しょうがない、その場にならなければ分からない事もあるし戦闘経験もある程度あるらしいから何とかなるだろう。
今は何時も通りにやるだけだ。

そう割り切った後、ティアナはマップを広げながらフォワードメンバーと式に今回のプランを話した。

「それじゃあ説明するわよ。」

今回はスターズとライトニングの二つに分けて行動するわ。

式さん、貴女は私とスバルと一緒に来てください」

「分かった……それとさん付けはいらないしタメ口で別に良い」

式は素っ気無い態度でそう言った。

「分かり……分かったわ式。」

続きだけど、私達スターズは道路を使ったAルートを、ライトニングは反対側のビル群を使ったBルートで行って。

行動は必ずチームで行なう事、単独になった場合は直ぐに連絡して合流する事。

良いわね?」

「「了解!」」」

「式もそれで良いわね？」

「ああ…」

各々の返事を確認した後、シャーリーからミッション開始のカウトダウンが始まった。

「3……、2……、1……、スタート！」

「スターズ、ライティングGO！」

ティアナの合図と同時にスターズはAルートを、ライティングはBルートを進み始めた。

スターズの進むAルートは直線的な道路などが中心のなだらかな道だ。

ビルなどの遮蔽物も少なく敵の位置も把握しやすい。

比較的安全な道と言えるだろう。

その道を進んでいると前方からガジェット？型が左右から3機ずつ接近して来ていた。

敵もスバル達に気付いており、発見した後直ぐにレーザーで弾幕を張って来た。

「早速おいでなすったわね。

スバル、後ろから援護するわ。

アンタはいつもどおりに前で暴れて来なさい！

式はまだ前に出ないで！」

「分かった！」

「……………」

そう言った後スバルはマッハキャリバーのローラーを唸らせながら右のガジェット群に接近。

ティアナはクロスミラージュで援護をしながら左のガジェット群に攻撃を開始。

式の方は珍しく人の言う事を聞いており、ナイフを持ちながらティアナの後ろを走っていた。

「リボルバーシュート!!」

「バリアブルシュート!!」

カートリッジを一発消費するリボルバーナックルとクロスミラージュ。

それぞれから放たれる衝撃波と誘導式多重弾膜射撃。

それにより6体中の3体が貫かれた。

スバルは一体を蹴り飛ばした後、もう一体の後方に回り込み得意のシューティングアーツで撃破した。

今回のガジェットのAMFは一カ所にしか作用しないタイプ。

後方に回り込めばその影響は少ない。

蹴り飛ばした一体も脚技で倒した後馬乗りになり、そこからナックルダスターを叩込んだ。

ティアナも3発の誘導弾を巧みに操り最後の一体を貫いた。

3人は破壊した時の粉塵を突き抜けながら、先に進んでいる。

ティアナの方は消費したカートリッジを装填しながら周りを警戒している。

「大丈夫？ 怪我はない式？」

「怪我も何も、お前らみたいに殺り合って無いんだからするはずも無いだろ……」

「あはは……それもそうだね」

相変わらず無愛想な式に苦笑したスバル。

「二人とも無駄話ししないで行くわよ……スバル右!!」

「え……?」

ティアナの警告が飛ぶ。

スバルが咄嗟にその方向を向くと高魔力の直射魔法が飛んで来た。咄嗟にプロテクションを張り防ごうとするが間に合わない距離にまで来ていた。

そのまま直撃を受けると感じ身構える。

その時式がナイフを構えて目の前に立ちはだかった。

「式!？」

スバルが思わず叫んだ。

スバルやティアナとは違いバリアジャケットなどを装備していない式が直射魔法をくらえば只じゃすまない。

それに式が持っているナイフでは防御したところで叩き折られるのが目に見えている。

しかしこの予想は呆気なく裏切られる事になった。

式が徐々に近付いて来る弾を見つめる。

そして1mにまで接近したところでナイフを一閃すると魔力弾は横に真っ二つに裂けてしまった。

「え!？」

スバルが驚きの声を上げる。

それもそうだろ。

デバイスでも何でもない只のナイフで魔力弾を切り裂くなど本来なら有り得ない事だからだ。

しかしティアナ落ち着いてそれを見ている。

スバルは忘れているかもしれないが、式は生身でガジェットを破壊しているのだ。

ならば魔力弾を切り裂く事できてもおかしくはないからだ。

「おい、大丈夫かスバル…?」

「え、うん…ありがとう式」

「なら良い。おいティアナ、あそこの丸いやつ……オレにやらせてもらうぞ」

スバルとティアナが式が指を指した方向に目を向ける。

そこには以前Bランク試験の時にスバルが破壊したのと同じ中距離タイプのスフィアがあった。

「そんな、幾ら何でも一人じゃ「分かったわ」ティア!？」

スバルの言葉を遮るようにティアナが言った。

その言葉を聞いた後、式は右手のナイフを構えた。

そして体勢を低くし、スフィアに向かって疾走し始めた。

ティアナが式にスフィアの迎撃を任せたのには理由があった。

これから共に戦う仲間として式の戦闘能力を自分達の目で確認しておきたかったからだ。

なのはのお墨付きとガジェットを生身で破壊した事実があるとは言え、偶然という事も考えられたからだ。

それでは実戦では役に立たないし、下手すれば死ぬ事になりかねない。

スフィアとの距離は約15メートル。

式の身体能力を考えればこの距離を詰めるのに3秒と掛かるまい。

その間レーザーの弾幕が続いたが、全て『線』を断ち切りながら疾走した。

式が目の前にまで接近しようとした時、スフィアは特大の直射魔法を放った。

それは直撃すれば確実にケガを免れない一撃。

流星にヤバイと感じたのかティアナとスバルが式を助けようと走った。

しかし、その心配は無用だったようだ。

式は魔力弾が当たる直前に真横に回避したのだ。

スフィアも式が回避したのを確認したのか直ぐさま障壁を張るがそんな物は無駄だ。

強固な障壁もナイフの一振りにより『殺され』消滅。

「お前……暇つぶしにもならねえよ」

その一言の後、式はスフィアの『線』をナイフで一閃した。

式はさもつまらないと言った表情で残骸となったスフィアを見ている。

ティアナはその光景を咄然として見ていたがスバルはおもいきり

はしゃいでいた。

「すごい、すごいよ式！

本当にデバイス無しで倒すなんてすごいよ！」

「うるさいスバル……。」

まだ終わりじゃ無いんだ、とつとと先に行くぞ」

そう言った後式はスバルの横を通り過ぎ、先に進んでしまった。

「え、ちょっと待ってよ式。

ティア早く行かないと遅れるよ！」

立ち尽くしているティアナの腕を引っ張りながらスバルも式の後を追っていた。

「何よ……やっぱり凡人は私だけじゃない」

第五話：模擬戦《後編》

模擬演習場モニター前

モニター前でスターズと式の戦闘データを計測していたシャーリーは驚きを隠せなかった。

式の身体能力はさる事ながら、スフィアの射撃魔法や障壁をナイフ一本で無効化し、魔法無しで本体を破壊したのだ。これを驚かすにはいられない。

「なのはさん……式さんの今の能力は一体……？」

「そっか、シャーリーにはまだ話してなかったんだよね。

あれが式のレアスキル『直死の魔眼』。

なんでも物の『死』が視る事ができるんだってさ」

「物の『死』ですか……？」

シャーリーはわけが分からないと言った顔をしている。

まあ、それも当然の話だろう。

なのは達でさえ、最初はどうゆう意味かチンプンカンプンだったのだ。

それを何も知らないシャーリーに分かれと言う方が無理な話である。

「そうだね……。

説明すると長くなるけど……」

なのはは自分達が式から受けた説明をそのままシャーリーに話して

聞かせた。

「この世に存在する物が予め内包している『死』を視る事ができる……。

何か難しい話ですね」

「そうだね。

私だって今だにどうゆう意味かわからないもの」

なのはとシャーリーはお互いに苦笑しながら、再びフォワードメンバーと式の戦闘データを取り始めた。

だが、なのはの方はむしろ逆で内心寒気とも呼べる感覚を抱いていた。

昨日の式の説明を聞いた時点では彼女の眼をそれほど重要視していなかった。

せいぜい障害物を魔法無しで破壊できる便利な道具程度と言った感じだ。

だが、今の映像を見てその考えは間違っていると感じた。

式個人の驚異的な身体能力と魔法すら無力化する「直死の魔眼」。

そこにデバイスとミッド式カベルカ式のどちらかを加える。

それは圧倒的な力を持つ魔導師が生まれるのではないか？

勿論式本人のデバイスや魔法との相性、空戦適性の有無で変わってはくるがその可能性は十分に考えられる。

なのはは式の戦闘映像を見ながら、その事を嬉しく感じた。

「式がどんな魔導師に育つのか……これからが楽しみだな」

午前中のデスクワークを終えたフォワードメンバーは昼食を取っていた。

お昼時とゆうこともあり、周りは同じように昼食を食べている人で賑わっている。

「そう言えば、今日の訓練の時の式凄かったね」

山盛りのパスタを取り分けながらスバルがそう言い出した。

訓練後、フォワードメンバー内ではこの話で持ち切りだった。

今朝の訓練は、当初ティアナが予想していた結果を裏切り、好成績を残す結果で終わった。

スフィアを撃破した後、スターズと式は途中のガジェットやスフィアを蹴散らしながら一番乗りでターゲットポイントに到着。

その後、合流したライトニングと共に周りに展開していたガジェット軍を呆気なく破壊、スバルがターゲットを確保し訓練は無事終了した。

メンバーはその時の映像を見ながら、食事を取っている。

「そうですね。」

最初、スバルさんから話を聞いた時は僕も半信半疑でしたから、実際に見た時には驚きましたよ。

デバイス無しでガジェットを破壊するなんて普通はできませんから。なのは隊長から式さんのレアスキルの話しを聞くまでは何がどうなってるか分かりませんでしたよ」

エリオが式の戦闘場面を見ながらそう呟いた。

訓練の後、スバル達フォワードメンバーはなのはから式の魔眼についての説明はある程度受けていた。

「えっと…確か名前は『直死の魔眼』でしたっけ？」

「そうそうそれぞれ。」

確か能力内容は何でも壊せる。

だけどさ、なのはさんのあの説明内容……理解できた？」

随分とはしよった内容で解釈しているが今のスバルからすればこれぐらいでしか理解ができなかったのだろう。

「全然理解できませんでした……」

「私もエリオ君と同じく……」

ライトニング二人は苦笑しながら、そう答えた。

「やっぱりか……私も全然理解できなかったんだよね。」

何か物の『死』が何たらかんたらって言ってたけど。

結構あれってどうゆう意味何だろうね。

ティアは分かった？」

スバルがティアナに質問を投げ掛けてみる。

が、当の本人はパスタを見つめながら何か思い詰めた表情をしていた。

訓練の後からずっとこんな調子である。

「ティア……ねえティア。」

もう……ティアナ！」

「え！？な、何よスバル……？」

業を煮やしたスバルが大声で叫ぶと、ティアナはやっと呼ばれてる事に気が付いた。

「何よ、じゃないよ。」

訓練の後からずっとそんな調子だよ？

デスクワークの時も、珍しくミス連発してたし……。体調でも悪いの？」

スバルが心配そうにティアナの顔を覗き込む。

「だ、大丈夫よ。」

ちよっと疲れただけだから心配しないで。

「ごちそうさま……」

そう言った後、食べかけのパスタの皿をテーブルに残し、ティアナは食堂をあとにした。

その後ろ姿をスバル達は心配そうな顔で見つめていた。

翌日

自分の瞼の上から朝を知らせる光が降り注ぐのを感じ、私は嫌々に目を開けた。

まだ、覚醒しきっていない頭を無理矢理叩き起こしながら、ベットを降りカーテンを開けた。

窓から外を見てみると、海が見え、空の天気は晴れ渡っている。

一通り見終わった後、この部屋での普段着である大きめのYシャツ

を脱ぐ。

その後部屋の片隅にポツンと置いてあるタンスの中から藍色の着物を取り出しそれに着替え始めた。

この着物ははやてやなのはが私の為に用意してくれた物だ。

材質はそれ程の物では無いけれど、色具合などがなかなかなので一応気に入っている。

それに着替え終わった後、愛用のナイフと投擲用の小刀を数本懷にしまい込む。

掛けてある何時もの赤い革ジャン羽織り、私は部屋を後にした。

私がこのミッドチルダに來た日から一週間が過ぎようとしていた。基本的な生活洋式にそれほどの差が無かった為、私は直ぐに順応するようになった。

私のここ一週間の生活は特に変わった事は無く、六課の隊舎の周りを散歩するだけの退屈な日々を過ごしている。

最初の数日はスバル達に誘われ暇つぶしがてら訓練に参加してみたけど、あのロボットもどきの相手ばかりなので早々に飽き、出るのをやめた。

その事を何処から聞き付けたのか、はやては嫌がる私の話しを無視して機動六課隊舎内の案内と副隊長陣などの顔合わせに無理矢理連れ回された。

桃色の髪をポニーテールにした騎士シグナム。

どう見ても十歳前後の少女にしか見えない赤い髪のヴィータ。

黄色い髪に穏やかな顔をしたシャマル。

狼のザフィーラ。

そして体長10cmぐらいで空中にフヨフヨと浮いているリィンフオース？。

最初にあった時は相手が警戒心丸出しなのがヒシヒシと伝わって來

た。

特にシグナムは完全に疑っている目をしていて、はやてが私の事情説明が終わるまでそれが続いた。

はやての話しによれば彼女達はヴォルケンリッターと言う名の騎士らしい。

具体的な話しはその時間けなかったが、正直どうでも良かった。

引き続き隊舎の案内と人員の紹介、私の身分を示すIDカードを受け取る事でその日は終了した。

その後の数日間には以前と変る事が無く、周りを散歩したり、たまにスバル達の訓練を遠くから眺めるなどをして暇をつぶす日々が続いた。

そんな時、昨日突然なのはから連絡が入った。

内容は私用のデバイスが完成したので、明日来てくれという内容だった。

そう、私が今向かっている場所はシャーリーの研究室だ。

隊舎の中を5分位歩き、目的の場所を見つけて中に入った。

シュツと音と共にドアが開き、その中に足を踏み入れる。

部屋の中は作業機械などが並んでおり、その一角でなのはとシャーリーがモニターを開きながら作業をしていた。

式が入って来た事に気がついたのか、一旦作業をやめ二人とも向き直った。

「あ、来たね式。

よし、それじゃあ本人も来た事だしさっそくお披露目といこうか。シャーリー見せてあげて」

「わかりましたなのはさん」

シャーリーがモニターを操作する。

すると式の目の前にあるデスクに宝石みたいな物が転送されてきた。その形はなのはのレイジングハートの待機状態と同じで、唯一違うのは色が白であると言う事だけだ。

「これが・・・オレのデバイスなのか？」

何かスバル達のとだいぶ違うみたいだが・・・」

式が疑いの目をしながらそう呟いた。

「あはは、違うよ式。

これは待機状態で、使うときにはちゃんと武器化するんだよ」

なのはが苦笑しながら式にそう説明した。

「それにそんな心配しなくても大丈夫ですよ式さん。

開発は私となのはさん、レイジングハートさんの三人でやりましたから。

式さんの戦闘データを解析し、今でのデバイスのデータを考慮。さらに最新の技術を使って開発したバリバリの式さん専用の最新型デバイスですから」

シャーリーはやや鼻息を荒くしながら自信満々にそう言った。

「それじゃ早速、性能テストでもしてみようか。

式も早く試してみたそうな顔しているし。

シャーリー模擬戦場は空いてる？」

「はい、今の時間なら誰も使用していないので大丈夫だと思います」

なのはの質問に答えた後、シャーリーは自分の工具を持って移動す

る準備を始めた。

「じゃあ移動しよう。
式行こうか」

その言葉に反応し、式は自分のデバイスである白い宝石を握り締めた。

「ああ、わかった。

ところでシャーリー……こいつの名前は何て言うんだ？」

「この子の名前はディレクティです。

『秩序を直す者』と言う意味を持つ名前ですよ」

「ディレクティか……」

自分の相棒となるデバイスの名を呟いた後、式はシャーリーの研究室を後にした。

第六話；ホテルアグスタ《前編》（前書き）

私は自分の周りの人達に比べれば、誰が見ても平凡な才能しか持っていない。一番の親友は計り知れない潜在能力を秘めているし、五歳も年が離れている同僚も魔力変換資質やレアスキル持ちと言う有様。挙句の果てには魔法技術が発達していない世界から来た住人今まで置いていかれる始末……。ならば…私がやるべきことは自然と一つに絞られてくるのではないか？魔法少女リリカルなのはs t r i k e r s 蒼眼の死神く始まります。

第六話；ホテルアグスタ《前編》

ミッドチルダ首都南東地区上空、ストームレイダー内部。

「それじゃあ、これからの六課の方針と今日の任務について説明するやね」

ヘリの内部では部隊長であるはやてから直々に説明がされていた。周りにはスターズ隊長であるのはとライトニング隊長であるフェイト。

フォワードメンバー四人に式とシャーリー。更にはシャマルとザフィーラが乗っている。

「これまで謎やったガジェット・ドローン製作者とロストログイア・レリックの収集者が現状ではこの男…」

一同の目の前にモニターが開き、そこに一人の男の写真が表示される。

「生体関連の違法研究で広域指名手配されている次元犯罪者ジェイル・スカリエッティ。」

この男が深く関わっている線で調べる事になったで」

「この男についての捜査は主に私が進めるけど、皆も一応覚えておいてね」

フェイトの言葉にフォワードメンバー四人は返事をする。

が、式だけはスカリエッティの写真を睨みつけながら黙ったままだった。

「式……どうかしたの？」

「いや、別に何でもない。

説明を続けてくれ」

その事を心配したなのはが声を掛けるが、式は軽く受け流した。

フェイトの説明が終わった後、リインがモニターを操作する。

すると、さっきの写真の代りに大きな建物の映像が映し出された。

「そして今向かっている場所はここ……ホテル・アグスタ」

「骨董美術品オークションの会場警備と人員警護…、それが今日のお仕事だよ。

今回のオークションでは取引許可の降りているロストログアが幾つかあるの。

その反応をレリックと誤認したガジェットが現れる可能性が高いから私達が呼ばれてってわけ。

皆分かった？」

なのはの言葉に全員が頷いた。

「それじゃあ配置について説明するね。

スターズとライトニング、フォワードメンバーは先にいるシグナム副隊長とヴィータ副隊長の指示を受けた後外の警備。

館内の警備は私とフェイト隊長、はやて部隊長が担当するね」

「おい、オレは一体どうすれば良いんだ？」

自分の名前が呼ばれなかった為、式が不満な顔をしながら聞き返した。

「式は遊撃戦力としてシャルマル先生の所で待機。

シャーリーと一緒にデバイスの調整を進めて。

もしかしたらぶっつけ本番になるかもしれないから…」

その言葉に式とシャーリーは神妙な面持ちで頷いた。

実はまだ式のデバイスのテストは終わっていないのだ。

なのは達が新型デバイス「ディレクテイ」のテストを始めようとした直後に召集が掛かった為、何も終わっていない。

その為、式はデバイスの作動はおろか、能力の詳細も何も聞かされていない状態だ。

さしもの式もその事に内心、若干の不安を抱いている。だが、その気持ちをかぶりを振りながら押さえこんだ。

（いや、そんな事は関係ないか……。

私はいつも通りに、自分のやり方でやれば良いだけだ）

そうこうしているうちに、ヘリはホテル・アグスタに到着。

フォワードメンバーはシグナムとヴィータの指示を受け外の警備に。なのは達隊長陣もドレスに着替え館内の警備に向かう。

式もシャルマルやシャーリーと共に屋上へと移動を始めた。

ホテル・アグスタ内部

スバルとティアナはお互いに自分の持ち場を警備しながら念話で会

話をしていた。

『今日は八神部隊長の守護騎士揃い踏みかあ』

『そういやそうね。』

スバル、あんたは結構詳しいわよね、副隊長たちのこと』

『お父さんやギンねえからちょっと聞いてるだけだから。』

副隊長達やシャルさん、ザフィーラは八神部隊長が個人で保有している戦力ってことと、それにリイン曹長が合わさった6人は無敵の戦力って言われてること……くらいかなあ。

まあ、八神部隊長の出自とか能力は特秘事項だから私も詳しくは知らないんだけど……

ティア、なんか気になるの？』

『いや、別に……』

『そっか、それじゃまた後でね』

『うん』

そうして念話が切れた後、ティアナはゆっくりと考え始めた。

（やっぱり……六課の戦力は無敵を通り越して異常だ。

一体八神部隊長はどんな裏技を使ったんだか……）

静かに、それでいて周囲への注意を怠ることなく六課の分析を始めるティアナ。

（全員がオーバーSクラスの隊長陣に加えて、副隊長達もニアSク

ラス……

管制やバックアップのほうも将来のエリートばかり。

私達フォワードだって、あの年でBランクのエリオに竜召喚っていうレアスキルを持つキャラ。

二人ともフェイト隊長の秘蔵っ子って言われてるし……。

スバルだって、今でこそ危なっかしい所が目立つけど潜在能力や可能性は計り知れない)

そしてもう一人……

(両儀式……。

スバルやエリオ以上の身体能力を持ち、明らかに慣れているとしか言い様が無い戦闘での身のこなし。

更にはあらゆる物を破壊するだけでは無く、魔法自体を無力化してしまう化け物級のレアスキル『直死の魔眼』……)

冗談じゃない、と思う。

自分達が何年もかけてようやく辿り着いた場所は、魔法も何も知らない異世界の人間にとってはたいした事も無い。

これが笑い話でなくてなんなのだろう。

ティアナは自分の中に芽生えつつある暗い感情を押さえ込み、かぶりを振った。

「……やっぱりあの中で凡人は私だけ、か……」

確認するように小さく呟き、ティアナは目を閉じた。

ふう、と息を吐き閉じていた目を開く。

そこには、決意のようなものが宿っていた。

(でも、そんなの関係ない。

私は証明しなくちゃいけないのだから。

例えばどんな強い敵でも、きつい任務でも……。ランスターの弾丸は全てを貫けるんだって)

小さく、しかし強く心の中で言い放った、その時であった。

「……通信、本部から？」

え、敵襲!？」

機動六課がそれに気付くのはすぐそのあとだった。

シャマルのデバイス、クラールヴィントが反応する。

すぐさま、シャマルは機動六課本部へと通信を繋ぎ、アルトに連絡をとって、状況の説明を仰いだ。

『来ました、ガジェット・ドローン陸戦一型機影30、35！
陸戦三型2、3、4……。まだ増えます。』

その通信は近くで「ディレクテイ」の調整をしていたシャーリーと式にもきこえていた。

『前線各員へ、状況は広域防衛戦です。
ロングアーチ1の管制指揮と合わせて、私、シャマルが指揮をとります。』

各員へと繋がるシャマルからの通信。

隊員たちは了解の通信を入れ、それぞれの場所に向かう。

ティアナも現場の状況を知るためにシャルマルからデータをもらった後直ぐにスバル達の元へと向かって行った。

「シャーリー、式のデバイスの調整は後どれくらいで終わりそう？」

「後、5分程で何とか……」

「分かったわ。」

とにかく急いでちょうだい……」

「分かりました」

フォワードメンバー前線。

戦闘が開始されてからある程度の時間が立った時、キャロが召喚魔法の気配を感知した。

その直後からガジェットたちの動きが突然変わりはじめる。

「何よこいつら、急に動きが……!」

ティアナがクロスミラーージュで攻撃しながら思わず毒づいた。

エリオやスバルも急に動きが良くなったガジェットに翻弄され苦戦している。

「遠隔召喚…来ます!!」

キャラが全員に警戒を促す。

キャラの言うとおり、姿を現すガジェット一型三十機、二型二機。

「これ、召喚魔法陣!？」

「召喚って、こんなことも出来るの？」

驚くエリオとスバル。

「優れた召喚士は転送魔法のエキスパートでもあるんです」

キャラの言葉を聞きながらデバイスに弾をこめる。

「何でもいいわ、迎撃！」

行くわよ!!!」

ティアナの声に、みんなが覇気の籠った返事をする。

（今までと同じだ：証明すればいいんだ!!）

クロスミラージュを構えるティアナ。

（自分の勇気と能力を証明して：、私はそれで、いつだってやって来た!）

ティアナの傍らにオレンジ色の魔法陣が展開した。

フォワードメンバーが必死にガジェットを押さえていたが、それに

も限界が来始めていた。

『皆もうちょっと頑張って。』

今式がデバイスを持ってそっちに応援に向かったから』

シャマルからの通信を聞いたスバル、エリオ、キャロにやる気が戻り始める。

「守ってばっかじゃ行き詰まります。ちゃんと全機落とします!!」

『ティアナ無茶よ!』

「大丈夫です。そのために毎日、訓練してきてんですから! エリオ、センターに下がって!

私とスバルのツートップで行く!!」

ティアナの指揮でエリオが後退する。

「スバル!! クロスシフトA行くわよ!」

「OK!! ティア!」

ウイングロードを使いガジェットを翻弄するスバル。

(証明するんだ!)

消費される左右二発ずつ、合計四発のカートリッジ。オレンジ色の環状魔法陣がティアナを中心発生する。(特別な才能や、凄い魔力やレアスキルが無くても、一流の隊長たちのいる部隊でだって、どんな危険な戦いだって…)

魔法陣と同色の無数の魔力弾が、ティアナの周囲を囲む。

（私は…ランスターの弾丸は…ちゃんと敵を撃ち抜けるんだって！）

スバルがガジェットたちを引き付けている間、エリオ、キャロは別方向からのガジェットに対処する。

数は三つ。

エリオとキャロの連携により、その三機を撃破した。

クロスミラージュの本体を魔力が電気の這うようなおとをたて、バチバチと駆け抜ける。

『ティアナ！』

四発ロードなんて無茶だよ！

それじゃティアナのクロスミラージュも！』

アルトからの制止の声がかかる。

「撃てます!!！」

『Yes』

ティアナとクロスミラージュが答える。

「クロスファイアー!!！」

その声を合図に、スバルは攻撃範囲内からの離脱に入る。

「シュート!!！」

十数発の魔力弾が一斉に発射される。

それがスバルを攻撃しようとしていたガジェットを貫く。

「スバルさん!!」

突然のエリオがスバルに向かって叫ぶ。

その尋常ではない様子に気付いたスバルは振り向いた。
見慣れた色の魔力弾がスバルに向かって飛んでくる。

「ヤバイ!!」

そう言った時にはもう光は目前にまで迫ってきていた。
直撃にそなえ、スバルは目を閉じ歯を悔い縛った。

が、何時まで立っても衝撃と痛みがこない。
恐る恐る目を開けると目の前には見慣れた赤い革ジャン。
そして手に持つのは銀色に鈍く輝く一本のナイフ。

「おい、無事かスバル?」

そして聞き慣れたぶっきらぼうな声。

「式!!」

そこにいたのはまさしく両儀式であった。
その姿を見たティアナ、エリオ、キャロも驚きの表情を浮かべる。
ウイングロードから飛び下りながら式はスバルを見上げる。

「その調子なら何とか大丈夫そうだな。」

スバルお前は一旦下がってろ、後はオレとこいつでやる」

そう言って取り出したのは白い宝石のディレクティ。

そして何時もの自分の姿を思い浮かべながら眩かれる一つの言葉。

「ディレクティ……バリアジャケットセットアップ……」

『yes master。

barrier jacket set up』

その直後に式を包み込む白銀の色をした魔力。

その眩しさにフォワードメンバーは思わず目をつぶった。

光が収まり恐る恐る目を開けてみる。

そこにいたのはバリアジャケットを装備した式。

白い着物をベースになのはやスバルのバリアジャケットと同じ蒼と金色のラインが入った袖口。

同様に蒼の帯や羽織っている赤い革ジャンにも所々に金色のラインが走っている。

ブーツは茶色を基調としており、金属パーツが付属している。

そして手には柄が真紅、刃は白銀に輝くナイフがあった。

「さあ……次はオレ達が相手になってやるよ……」。

いくぞディレクティ」

『yes master』

第七話；ホテル・アグスタ《後編》

式が間一髪でスバルを誤射から救ったすぐ後、援護に駆け付けたヴィータが到着した。

さっきまでの一部始終を見ていたらしく、顔には明らかと言って良い程の怒りが滲み出てる。

「ティアナ！！この馬鹿！！！！」

無茶やった上に味方撃ってどうするんだ！！」

地上には啞然と立ち尽くすティアナ。

ウイングロードの上ではスバルがあたふたしている。

「あ、あのヴィータ副隊長……。

今のは自分が回避するのが遅れて……」

「ふざけろ……たこ……！！」

今のは完全に直撃コースだったろうが！！

もしあそこで式が間に合わなかったら……当たってたらタダじゃすまなかったんだぞ！！」

スバルの言い訳を聞いて更に怒りを募らせる。

「あの……でも……」

尚もティアナを庇おうとするが、今更何を言っても遅い。

「うるせえ馬鹿ども！！」

もう良い……あとはライトニングと式に任せる。

二人纏めてすっこんでろ!!!」

ヴィータの言葉を聞いたティアナは絶望的な表情を浮かべていた。スバルとティアナが後方に下がり始めるのを確認しながら、ヴィータはシヤマルに通信を送った。

「スターズ2よりロングアーチへ。

スターズ3、スターズ4を後方に下げさせる。

ガジェットの迎撃はライトニングとウイング1を向かわせたから、私はこのままライトニング2の所へ向かう」

因みにウイング1とは式のコールサインである。

『分かりました。

それではこちらはライトニングとウイング1のサポートに入るわ』

「了解だ、それじゃあ頼むぜ」

通信を切ったヴィータはシグナムの元へと向うために飛翔を始めた。

式、エリオ、キャロ最前線組

バリアジャケットを装備した式は、エリオ、キャロと共に新たに出て現れたガジェットの迎撃に向かっていた。

移動している最中、シャリーから渡された通信機を通してディレクティブの説明がされていた。

『式さん時間があまりないので手短に説明しますね。

まだ不完全ですが一応式さんの動きについていけるようにある程度調整しました。

最初は動き難いかもしれませんがディレクティが徐々に合わせてくれるので心配しないでください』

「そんな事はどうでもいい。

問題なのは魔法の方だ、オレは何も使えないんだぞ？」

『そちらの方も大丈夫です。

式さんの戦闘データを分析して、最適な物を選んでおきました。

ディレクティの中にも予め記憶させておいたので発動などの補助も含めてサポートしてくれます。

それでは頑張ってください！』

『マスター、敵を補足！』

シャーリーとの通信が終わった直撃、ディレクティがガジェットの接近を警告する。

式の目の前にモニターが開き、敵の位置や数が表示された。

1型改が30機に3型が2機だ。

「エリオ、キャロ！」

「こちらでも確認しました。

どうしますか？」

「お前らはいつも通り2人でやれ。

オレが入ったところで連携が崩れるだけだ」

「分かりました。

式さんも気をつけて！」

その言葉と同時に大量のガジェット群を視認。

式はディレクティを逆手に構え、エリオもストラダーを両手で構える。

キャロは二人の後方に下がりフリードに指示を出す。

『エリオ、キャロ連戦でキツイとは思うけどもう少しだけ頑張つて。式もまだデバイスが本調子じゃないから無理しないでね？』

「「はい！」」

「了解……」

シャマルの劳いの通信を聞いた後、3人はそれぞれガジェットの破壊に向かった。

式は青い熱線や小形ミサイルを大量に放ってくるガジェット1型改の相手をしていた。

己の身体能力を生かしながら、段幕を軽々と避け、徐々に近付いていく。

一度ガジェットとの戦闘を経験している式にとっては、造作も無い事だ。

その圧倒的なスピードでガジェットの懐に入り込む。

機体の間を駆け抜けながら、滑らかな動きでディレクティを操り『線』を断ち切る。

その間の時間は僅か5秒。

呆気なく1型改4機が破壊された。

『マスター、幾つか使用をお勧めする魔法があるのですがどうしますか？』

ディレクティが式の目の前に使用可能な魔法の類を表示する。

「そうだな……取り敢えずお前に任せる」

『了解しました。』

発動については私がサポート致しますのでご心配なく』

そうこうしている内に目の前に1型改が10機出てくる。

ガジェットは式を発見した途端、再び熱線やミサイルなどを放ってくる。

流石に今回は弾幕がかなり濃い為、式も接近するのに苦労している。一旦近くの木の裏に身を潜める。

「ちっ、流石にあいつらも学習能力はあるか…。

ディレクティ、あれをやるぞ」

『了解です、マスター』

式が右手に持ったディレクティに意識を集中させる。

それに反応するかのように刃が魔力を纏い始め、式の魔力光である白銀に輝き始める。

それを確認すると式は木の裏から飛び出し、4機のガジェットの『線』を視認。

そして右手のディレクティで高速の一閃を横に放つ。

『ルフトメッサー』

ディレクティより放たれた微かに白銀の色を纏う空気の刃は一直線にガジェットに向かい呆気なく機体を真つ二つにした。

ルフトメッサー

ディレクティによる斬撃の際に、周囲の空気を圧縮・加速し、空気の刃を作り出す射撃魔法。

以前にエリオが初めてのガジェット戦で使用した魔法だ。

しかしスピードや威力に関してはエリオの物とは桁違いと言っても良い程だ。

地面に着地すると、すかさず式は緩んだ弾幕の間を駆け抜ける。

『ロードカートリッジ』

ディレクティの柄からカートリッジが一発排出され、式の周りに白銀のベルカ式魔法陣が展開する。

『フォトンランサー』

魔力スフィアを5発生成、槍状に変化された魔力弾が発射される。しかし魔力の形成が不完全な為か数発はAMFにより無効化された。だが不意打ちを食らった2機はランサーに貫かれる。

残りの4機は咄嗟に障壁を張ろうとする。

が、式がそれを許す筈もなく、完全に障壁を張る前に胴体を一閃。続けざまに機体の間を駆け抜けながら、次々とガジェットを破壊していった。

「す、凄い…」

近くで同じようにガジェットを迎撃していたエリオが思わず驚きの

声を漏らす。

魔力運用や術式などはまだかなりのムラがあるが式は当然のように魔法を使っている。

幾らデバイスのサポートがあるとはいえ、本来ならばこう軽々と使える筈がない。

そして改めて思い知らされる、式の戦闘能力。

あの大量のガジェットを相手にしながらも傷一つおっていない。

これが式の才能なのか……。

そう思うとエリオは突然背筋が寒くなり、自然とこう思うようになった。

式が自分達の敵でなくて良かった、と……。

「エリオ君、右！」

キャロの警告が飛ぶ。

エリオは即座にストラダーを構え直し、右から接近してきたガジェットの振り向きざまに切り裂いた。

「ありがとうキャロ、助かったよ」

「ううん、気にしないで。」

それよりさっきから変だけど、どうかしたの？」

「別に何でもないよ、ちょっと気になった事があったただけだからさ」

「おい、その2人！」

喋ってる暇があったら、とつとつこいつらの相手をしろ！」

式の罵声が2人に飛ぶ。

見てみると3型2機相手に戦闘をしている。

3型とは初めて戦うので流石の式も苦戦しているらしく、上手く懷に飛び込めないでいた。

「す、すみません！」

キャロ行くよ！」

「うん、エリオ君。

お願いフリード、ブラストフレア！」

可愛い鳴き声と共にフリードが小さな火炎弾を放つ。

一見頼りないように見えるが中身はものすごい熱量と破壊力を秘めている。

それが横から式を攻撃しようとしていたガジェットに直撃し、体勢を崩す。

その隙に式は目の前のガジェットのベルトや触手を破壊。

「我が乞うは、清銀の剣。

若き槍騎士の刃に、祝福の光を。

猛きその身に、力を与える祈りの光を。

ツインブーストスラッシュ&ストライク！」

「ストラーダ！」

『ロードカートリッジ。

メッサーアングリフ！』

カートリッジが2発消費される。

それによりストラーダの穂先から大量の魔力が噴射され、ツインブーーストの効果で刃には電気を付加した魔力刃が発生する。

エリオは両手でそれを構え、一気に加速を始める。
ガジェットがAMFを展開するが、ツインブーストの効果で無力化。
そのまま突撃し、一気に胴体を貫き、縦に振り上げ真っ二つに切り
裂いた。

「へえ、あのオチビ共もなかなかやるじゃん」

式がエリオ達を見ながら感嘆の声を漏らす。

『マスター、フォルムチェンジの使用を提案しますがどうしますか
？』

ディレクティの能力データが表示される。

「いや、まだ良い。

あんな奴にそれを使う必要はないさ」

『了解です、マスター』

ディレクティを逆手に構え、再び地面を疾走する。

ベルトや触手を破壊されたガジェットが、最後の抵抗とばかりに魔力弾を一斉掃射してくる。

だが、その程度の物は式にとっては攻撃とは言えない。

最小限の動きだけで、次々と魔力弾を回避しながら徐々に接近していく。

その姿はもはや風。

『ロードカートリッジ』

カートリッジを一発消費され、大気と魔力が高密度に圧縮される。

それが微かに白銀の色を纏った風の刃として形成され始めた。

それが刀身に付加され日本刀程の長さにまで伸びる。

それを確認すると、式は帯から投擲用の小刀を取り出し左手に構える。

目の前にまで接近したガジェットのアMFの『線』を小刀で一閃し殺す。

『風牙一閃』

そのまま地面を疾走し、風の刃とかしたディレクティでガジェットの胴体を真っ二つに切り裂いた。

警備指定範囲裏手。

その建物の影に隠れるようにして立つスバルとティアナ。

ティアナはスバルに背を向け、建物の陰を正面にして立っている。

「ティア…向こう終わったみたいだよ？」

話かけずらい雰囲気の中、スバルは思いきってティアナに声をかける。

「私はここを警備してる…。」

あんたは…あっちいきなさいよ…。」

ぽつりとティアナ。

「ティアは…全然悪くないよ…。
私がつと…ちゃんと…。」

「いけつつつてんでしょ!!!」

怒声をあげるティアナに圧倒され、スバルは渋々とヴィータたちのもとへと戻っていった。

スバルが去った後、ティアナは壁に拳を打ち付けながら、静かに嗚咽を漏らしていた。

ホテル・アグスタ正面玄関前

一度5人に集合かけたなのは今後の流れについての説明をしていた。

周りでは合流した陸士部隊が現場検証を始めている。

「報告は以上かな。

皆は一応このまま待機。

何もなければ直ぐに撤収だから、もうちょっとだけ頑張ってね。

式はこの後直ぐにシャーリーの所に行ってデバイスの点検をしてもらってね」

何時ものように式以外の四人が返事をする。

だが、ティアナだけは小さな声で返事をしていた。

「それと…ティアナは少しだけ私とお散歩しようか」

「はい……」

返事後、なのはとティアナ茂みの方へ歩いて行った。
その後ろ姿を式は何か気になっている様子で見据えている。

「式、どうかした？」

その姿を見てスバルが心配そうな顔で声をかけてくる。

「いや、別に何でもない。

たいした事じゃない……」

その言葉を言った後、式はシャーリーの元へ向かうべく屋上に向かった。

機動六課隊舎前

任務を終えて現場を撤収したメンバー一同はそこで、なのはからの指示を待つ。

なのはが訓練をすると言うのなら、これから訓練だからだ。

まあ、式に至っては訓練をやれと言われてもサボる気バリバリだが。

「今日は、午後の訓練おやすみね」

「明日に備えて、ご飯食べて、お風呂はいつて…ゆっくりしてね」

となのはの隣に立っているフェイトが言う。

それに式以外の四人は敬礼で答え解散となった。

日も半分沈みかけ、辺りが夕日に染まる中を、局員隊舎へと向かって歩いていく5人。

ティアナが不意に立ち止まりる。

「スバル…、私、これからちょっと一人で練習してくるから…」

と言い出した。

「自主練？私も付き合うよ？」

元気一杯答えるスバル。それに続き、エリオ、キャロ、付き合うと言う。

だが、ティアナはそれを丁寧に断り、一人訓練場へと向かって行った。

後日談

ティアナと隊舎前で別れた後、四人はの疲れを癒す為に風呂に入っていた。

今日は珍しく式も一緒に湯船に浸かっている。

勿論エリオは男湯だ。

「そう言えばさ式。

一つ質問があるんだけど良いかな？」

「何だよ、藪から棒に…」

スバルが珍しく質問をしたので式は多少ながら驚いていた。

「今日さ初めてバリアジャケットを装備したでしょ。

あれのデザイン、私達みたいなのはさんやフェイトさんのベースにしてるのと違って、何時もの着物が元になってるじゃん。

あれ、どうして？」

「あ、それ私も気になってたんですよ。
どうしてですか？」

「別にたいした理由はないんだけど……。
それでも聞きたいのか？」

2人が同時に首を縦に振る。だが、2人はこの後理由を聞かなければ良かったと後悔する事になる。

「なのはみたいなあきらかにコスプレとしか思えないような、服を着るのが嫌だったただけだ」

それを聞いた2人は思わず啞然とした。

正に爆弾発言。

式は今まで機動六課の職員の大半が思っていた事をあっさりと言ってしまった。

「確かあいつは今年で19になるんだろ？」

そんな歳の奴が、小さい子供が見るような魔法少女の格好のバリアジャケットを着るんだぜ？

オレはそんな事死んだってやりたくないね」

式の容赦無い本音が次々と炸裂する。

尚本人達は知らないが、実は脱衣所てこの話をなのはが聞いていたのだ。

風呂場に入ろうとした時にちょうど式の本音が炸裂していたのだ。

「あはは……私ってコスプレマニアのかな……」

尚この時なのはは密かに心に傷を負い、虎視眈々と式にSLBをぶっ放そうとしたのはまた別の話である。

第七話；ホテル・アグスタ《後編》（後書き）

どうも、毎度私の小説を読んでくださっている方々こんばんわ（又はこんにちは？）。蒼眼の死神の作者闇帝です。この度、PVが三万アクセス、ユニークが五千人を突破致しました！パチパチパチパチ（自分で拍手）。

まあ、他の作者様に比べればまだまだですが、これからも精進していききたいと思います。皆さんこれからもよろしくお願い致しますm

（――）m。

第八話；すれ違い（前書き）

結局：私は何もできなかった。自分の実力を示そうとした結果、相棒を傷つけかけて、隊長達や仲間から失望され…。私は一体…どうすれば良いの…？魔法少女リリカルなのはs t r i k e r s 蒼眼の死神く始まります。

第八話；すれ違い

休憩所

そこにはなのは、フェイト、はやての隊長陣とシグナム、ヴィータの副隊長陣。

更にシャーリーが深刻そうな顔をしながら話しをしていた。内容は勿論、ティアナの誤射についてだ。

「気になってたんだよ、ティアナのこと。

強くなりたいなんてのは、若い魔導師なら皆そうだし、無茶も多少はするもんだけど・・・。」

ヴィータが常日頃から思っていた事を口にした。

なのはもティアナの事については前々から気になってたのだ。

ヴィータの言った事もそうだが、ティアナは些細な失敗でも極度に自分を責める癖がある。

別にその行為事態は問題ない。

失敗を悔やむ事は大切な事だし、次には成功させようという意気込みに繋がる。

だがそれもやり過ぎとなれば話しは別になってくる。

極度に自分を責める事は自信の喪失に繋がる。

それはこれから戦っていくには致命的だと言って良い。

「だけどさ、オレが今まで見た限りあいつも馬鹿じゃない。

むしろ頭に関しては、あの四人の中じゃかなり上だと思っぜ。

そんな奴が、理由も無しそんな事をやるとはオレには思えないけど

な」

突然の横槍にビックリするなのは達。

声のした方向を見てみるとジャージ姿に首にバスタオルをかけた式が立っていた。

ドリンクでも買いに来たのか手にはカードが握られている。

「あ、お疲れ様式。

お風呂上がりなの？」

フェイトが首に架けられているバスタオルを見てそう聞いた。

「ああ、さつきスバル達と入って来た」

そう言って式が隣りに座ると、なのは微かに体を強張らせた。

その姿を見たシグナムが微かに眉を潜める。

まあ……理由については読者の皆様はご承知だと思うが……。

「それで話しの続きだけど……どうなんだ？」

「ああ、それについては両儀、お前の言う通りだ」

そう言ってシグナムが一人の男の画像を映しながら説明を始めた。

両親が無くなってからティアナの兄であるティーダ・ランスターが育ててくれたこと。

執務官志望の兄が、任務中に亡くなったこと。

その任務で犯人に手傷を追わせたが、取り逃がしてしまっていたこと。

犯人はその日のうちに、地上部隊が捕まえたが、その件につき、心

ない上司が酷いコメントをしたこと。

それが問題となったこと。

唯一の肉親が命がけで行った仕事が『無意味で役に立たない』事ではないことを証明するために、必死に頑張っていること。

「なるほどね……だからあいつ今日の任務や訓練の時にあんな無茶をしていたってわけか……」

式は任務や訓練時に見たティアナの必死な顔を思い出しながら呟いていた。

「エリオ君から聞いたんですけど…。

ティアナ、今一人で自主トレーニングをやってるみたいなんです」

「あいつ……休めって言ったのに……。
無茶しやがって……」

シャーリーの報告に顔を顰めながら答えるヴィータ。

「だから式にも一緒にどうしたら良いか考えて欲しいんだけど……」

「嫌だね」

フェイトの申し出を式はキツパリと断った。

「今のオレには他人の問題に構ってる暇はない。

それにその問題はティアナ自身がどうにかしなきゃいけない事だ。

オレ達が外からあーだこーだ言っても直るとは思えない」

そう言った後式は立ち上がり、自分の部屋に戻るとする。

フェイト達は式の言った言葉が的を射ている為に何も言えなかった。

「だけど……」

しかしなのはだけはその言葉に納得がいかに反論を述べる。

「それでも私は……ティアナの事をどうにかしてあげたい……。

このまま……あの子が今のやり方を突き通せば……遠からずフォワードメンバーの皆やティアナ自身が……取り返しつかないような事に巻き込まれちゃう……。

それだけは……絶対に避けたいの……」

拳を握り締め、自身の思い皆に語る。

それを聞いて式が何を思ったかは分からない。

だが、なのはに気持ちに同意し、自分も手伝うなんて事はしないのは確実だろう。

彼女がやる事はただ一つ……。

「なら……その気持ちも含めてティアナにどうしたら良いか伝えてこい。」

今オレ達に聞かせたその思いが嘘じゃないならな」

その一言の後、式は自分の部屋へと戻り始めていった。

翌日早朝

ピピピピピ……。

早朝からなり響く電子音。そしてカーテンから少し漏れる朝を知らせる光。

「ティア？」

鳴り響く音で目を覚ましたスバルは、ティアナを起こそうと2段ベツトを降りる。

昨日、正確には今日だが、真夜中を過ぎてフラフラになりながら部屋に戻ってきたティアナが

「私、明日から四時おきだから…目覚まし…うるさかったらごめんね」

といって寝てしまった。

まあそれ自体は大して問題はない。

あるとすれば起きると言っていた本人が未だにグッスリと寝こけている事だ。

「ティア、起きてよ、朝だよ？」

朝練するんでしょ？

ティゝア？」

「ん…ん…」。

ありがと…スバル、起きた…」

布団の魔力からやっと抜け出しティアナがのっそりと起き出しベツトから降りる。

昨日の疲れがまだ残っているのか、少し頼りない足取りだ。

そのまま机の上に置いてある訓練着を手に取り着替え始める。

するとその横でスバルも着替え始める。

「何であんたまで着替えるのよスバル…？」

「私はティアの相棒でしょ？」

だから私も一緒に朝練やるよ。

そっちの方が一人でやるよりは効率良いでしょ？」

そう言いながらにこやかに笑うスバル。

「そう…勝手にしなさいよ…」

そう言いながらさっさと訓練着に着替え終わる。

「そうだ！」

ねえ、どうせやるんだったらさ、式も誘おうよ？」

「はあ？」

何でそこであいつが出てくるのよ」

明らかに不満と言った顔を浮かべるティアナ。

「だって同じフォワードメンバーの仲間だけど、連携とかやったことなかったじゃん。」

それに式って近接戦はあたし達の中じゃ一番強いから、何か参考とかになるかもよ？」

「まあ、確かにそうよね……」

スバルの言い分も一理ある為にティアナは誘う事を渋々納得した。

が、当の式は「朝は眠いしダルいから」と言う理由であっさりと断った。
それを聞いたティアナが半ギレしたのをスバルがなんとか押さえこんだのは言うまでも無い。

模擬演習場

『フォトンランサー』

式の周りに展開していた六個の魔力スフィアから槍状の魔力弾が射出される。

それは約十メートル離れた六個のターゲットポイントの中心を見事に貫いた。

「うん、なかなかいい感じだね。

まだ魔力の圧縮に少しムラが残ってるけど射撃精度はさっきより格段に上達してるよ」

「いや、あいつらに比べたらまだまだだな……」

なのはが式の放ったフォトンランサーの評価を述べながら近いくる。

当の式は微かに汗を浮かべてはいるが、疲れているという感じはしていない。

ホテル・アグスタでの任務から翌日。

この日から式もスバル達フォワードメンバーと共に本格的に訓練に参加する事になった。

訓練の内容はフォワードメンバーと違い、元々個人技能に関しては特化しているので、魔法自体への慣れと熟練度を上げるのが目的だ。その為、式は訓練着では無くバリアジャケットを装備しながら訓練をしている。

が、それも本来の戦闘用のジャケットではなく、訓練用に魔力消費量を二倍に調整した物を着用しているのだ。

この状態で二時間ぶっ続けでやっているが、式は疲れを感じさせていなかった。

それに先程から訓練しているフォトンランサーやルフトメッサー、初めて使用したプロテクション。

これに関しての上達度も異常と言って良い程のものだ。

これには流石のなのも多少驚いている。

ついでにフォワードメンバーの方はヴィータにコッテリと指導されていた為相変わらずグロッキー状態だ。

全員「何でなのはさんの訓練受けてるのに平然としてるの？」と言った顔だ。

「それじゃあ今朝の訓練はここまで。

今日は私もヴィータ副隊長も会議で居なくなるから午後の訓練はお休み」

「自由待機だからってあまり気緩みすぎるなよ。
それじゃあ解散だ」

「」「」「ありがとうございます！」「」

四人の覇気のある返事が響く。

その後の行動はいつもと変わりなかった。

スバル、ティアナ、エリオ、キャロの四人はシャワーを浴び、制服に着替えた後デスクワークへ。

式の方は汗を流した後、慣れない早起きをした為か眠気が襲って来てベットへ直行。

午後は自由待機と言う事もありスバル、ティアナは今朝の自手練の続き。

エリオやキャロはアルトとのんびりお茶。

式はデバイスの調整と能力説明を受ける為にシャーリーの元へ足を運んでいた。

数日後

模擬演習場

「さーて、じゃあ午前中のまとめ、ツーオンワンで模擬戦やるよ。まずはスターズからやろうか、バリアジャケット、準備して」

「はい!!」

気合を入れて返事をするスバルとティアナ

三人が戦闘準備をしている間、ヴィータとシグナム、エリオ、キャロ、式はビルの屋上へと向かった。

今日はフォワードメンバーと隊長陣による模擬戦の日だ。

最初はスターズ組となのはによる模擬戦、次にライトニング組とフェイト。

式は遊撃戦力としての位置付けからシグナムと一対一で模擬戦をする予定になっている。

屋上からスバル達の戦闘を見ているとフェイトが息を切らせながら走ってきた。

「ああ、もう模擬戦始まっちゃってる…。」

その声に気付き、一同はフェイトへと向き直る。

「遅かったなテストロッサ。

今はスターズ、次にライトニングの番だ」

「すいませんちょっと調べ物があったので…。」

本当は私がスターズの模擬戦の相手もしようと思っていたんだけど…。このところ、なのは全然休んでないし…。」

「なのはも訓練密度が濃いからな…。」

こここのところ式のデバイスにも掛りきりだし、いい加減にそろそろ休ませないとぶっ倒れるぜ」

そう言いながら再びヴィータは空を見上げる。

「なのはさん…、いつも僕たちのことをみててくれるんですね…。」

エリオが言ったその言葉に頷くキャロ。

「部屋に戻ってから、ビデオを見て皆の訓練メニューを考えたりしてくれたりしてるんだよね」

フェイトが微笑みながら言う。

「おっ、クロスシフトだな」

魔力反応を感知したヴィータは、下で魔法陣を展開するティアナを見て、呟いた。

「クロスファイヤー！シュート！！」

ティアナの周りに展開していたスフィアから多数の魔力弾が放たれる。

しかしなのはをそれを簡単に見切り、あっさりと回避する。

「なんか・・・キレがねえな」

「うん、コントロールは良いみたいだけど」

「気のせいかな何処か集中できていない感じがするな……」

ティアナの攻撃に違和感を感じたヴィータ、フェイト、シグナムが呟く。

（あいつ…やっぱり今までの疲れが残ってるのか……？）

スバルとティアナが朝早くから練習していたのを知っていた式は内心で呟いた。

ティアナの攻撃を避けたなのは前方を確認。
するとウイングロードを展開し、リボルバーナックルを構えながら
真っ直ぐ突っ込んでくるスバルがいた。

なのははアクセルシューターを複数展開、次に来るであろう攻撃に
備える。

が

「フェイクじゃない・・・本物!？」

なのはに向って真っ直ぐに突っ込んでくるスバルに、なのはは展開
していたアクセルシューターを放つ。

桜色の魔力弾が滑らかな軌道を描きながらスバルに向かっていく。

「うおおおおお!!!!」

掛け声と共に右手にプロテクションを張り、アクセルシューターを
強引に防ぐ。

「くっ・・・うおりあああ!!」

気合と共になのはは渾身の一撃を放った。

「あのバカ、無理矢理突っ込みやがって……。
今のは無謀だぞ……」

今のスバルの攻撃を見て苦々しく呟く式。

「え、今の防いだように見えましたけど？」

その言葉を聞いたエリオが尋ねてくる。

「いや、右足と左手に一発ずつ掠めてる。

それに今のは防いだと言うよりは『ギリギリで持ち堪えた』って言った感じだし、あそこで無理矢理突っ込むよりは防御か回避のどちらかに専念した方が後の行動にも無理が無くなる」

「ほう、あれだけの短時間の行動をそこまで分析できるとは……。なかなかの観察眼だな両儀」

今の分析に思わず感嘆の声を漏らすシグナム。

「別にたいした事じゃないよ。

それになのはも同じ事考えてるらしいぜ？」

式に釣られて再び全員が空を見上げると、なのはがスバルに何かしらの注意をしているのが分かる。

一通りの注意をした後、なのは姿が見当たらないティアナを探す。すると、ビルの上でクロスミラーージュを向けながら砲撃のチャージをしているティアナが見えた。

「ティアナが……砲撃……？」

その行動を不思議に思ったフェイトが呟く。

今までの訓練でティアナは砲撃系の魔法を使った事がなかった為、全員も同じ心境だった。

式を除いて。

「いや、違う。
あれは幻影だ」

魔眼で幻影を見破った式が言い放つ。
その言葉に微かに驚くヴィータ、フェイト、シグナム。

「てえりゃあああああ!!!!!!」

カートリッジをロードし、リボルバーナックルに魔力を纏わせ、気合と共になのはに突っ込んでいくスバル。

なのははアクセルシューターを放つがスバルはそれらを強引にスピードを上げながら無理矢理避けきる。

なのはに向かつて強烈な一撃を放つが展開していたラウンドシールドにはじき返される。

次にくるであろうティアナの攻撃を警戒し、ビルの上を見るがその姿はない。

「え!？」

それじゃあ本物のティアナさんは……?」

ティアナの姿を探そうとキョロキョロするエリオ。

(私の予想が正しければ次にティアナがとる行動は……)

式がスバルの展開しているウイングロードの方をチラリと一瞥する。
そこにはカートリッジをロードし魔力刃を展開しながら駆け上がっていくティアナがいた。

(バリアを切り裂いてフィールドをつき抜く!)

なのはの頭上から魔力刃を向けながらティアナが突っ込んでくる。
スバルの方もリボルバーナックルを振りかぶりながらなのはに渾身
の一撃を放とうとしている。

「一撃必殺！！！！
てえええええ！！！！」

「はあああああ！！！！」

その攻撃は確実になのはを捕らえようとしていた。
そしてなのはが今まで感じていた違和感は確実な物となった。

「レイジングハート…モードリリース…。」

『all right』

デバイスを待機形態に戻したなのは。
目を見開くスバル。

直後、爆煙が三人を包み込んだ。
息を飲む見学者一同。

当たったのか、当たらなかったのか、気になるのはそこだ。
しかし、煙が晴れてみると、スバルのリボルバーナックル右足で、
ティアナの一撃必殺の刃を左手で止める、なのはの姿があった。

「おかしいな…二人とも……どうしちゃったのかな…」

「あっ…」

「えっ…」

間拔けな声をあげるスバルとティアナ。

「がんばってるのは分かるけど…模擬戦は…喧嘩じゃないんだよ？」

いつもよりもトーンが低い声。

「練習の時だけ言うこと聞いてる振りで…本番でこんな危険な無茶するなら…練習の意味、ないじゃない…。
ちゃんとさ…練習通りやろうよ…。」

いつもの雰囲気ではないなのはの声と、無表情な顔にスバルとティアナは脅え始めた。

「ねえ？」

私の訓練…そんなに間違ってる？」

刃を受け止めている手から血を滴らせながら、なのは二人に問掛ける。

沈黙と緊張がはりつめ、それが堪らなくなったのか、ティアナは魔力刃を消し、後方のウイングロードに着地する。

「私は!!…!」

カートリッジを消費。流れる涙を拭いもせず、ティアナは再びなのはに銃口を向ける。

「もう誰も…誰も傷付けたくないから…!!
亡くしたくないから!!」

「ティア……」

涙を流しながら自分の思いを言い放つティアナにスバルは何も言う事ができなかった。

「だから……強くなりたいんですっ……!!」

フェイト、シグナム、ヴィータ、エリオ、キャロはその言葉を悲痛な面持ちで見ている。

そして、その思いを聞いたなのは冷めた表情でティアナ見ていた。

「少し……頭、冷やそうか？」

小さいが良く通る声で言い放ってから、ゆっくりとした、しかし確実な動作で片手をティアナへと向ける。

「クロスファイア……」

「ああああああああ!!
ファントムブレイ!!」

「シュート」

なのはの指先から桜色の魔力弾が幾つも放たれる。

その全てがまるで断罪のように、ティアナの体へと吸い込まれ炸裂した。

「ティアっ……!!?」
「バインド!?」

咄嗟に体を動かそうとしたスバルを桜色のバインドが縛り上げる。

「じっとしてて……そこでよく見てなさい」

なのはが感情を一切排除したような音でスバルに告げ、もう一度指先に魔力を集中させる。

その示す先には、すでに戦意とかそういったものの全てを失い、ただ呆然と立っているティアナが居た。

「なのはさんっっ!!!」

スバルがやめてくれという思いで叫ぶが、無情にも魔力弾は放たれる。

それはティアナに全弾直撃し、大きな爆煙を上げる。

「ティアアアアア!!」

バインドに縛られた体を無理矢理動かしティアナの元へと向かうスバル。

なのはがティアナの落下速度を減速させ、ウイングロードに寝かせた。

スバルが駆け寄り名前を呼ぶが返事がない。

「今日の模擬戦はここまで……」

二人は撃墜されて終了だよ……」

静かに、しかし反論を言うのは許さないと言う感じで告げるなのは。その姿を、スバルは涙を流しながら睨むような目付きで見っていた。

第八話；すれ違い（後書き）

え、今回は皆様に謝罪があります。評価ページの感想を私のミスで消してしまいました。以後こうゆうことがないように気をつけたいと思います。これからも蒼眼の死神をよろしくお願いします。

第九話；絆へ（前書き）

模擬戦での無謀な攻撃を行いなのはからの修正を受けたティアナ。エースオブエースの二つ名を持つ魔導師は何の思いがあり、それを行ったのか……。そして明かされるなのは過去の出来事……。魔法少女リリカルなのはs t r i k e r s（蒼眼の死神）始まるぜ。

第九話；絆へ

訓練所周辺

夜も更け、辺りを暗闇と月明りが支配する中、なのははモニターを見ながら一人黙々とキーボードを叩いていた。

その顔には何時もの明るい表情は無く、何処か沈んだ感じを漂わせていた。

「なのは」

「フェイトちゃん……」

そんななのはに心配そうな顔をしたフェイトが声を掛けてきた。六課隊舎へと戻る道をなのはとフェイトは歩きながら話をする。

「さつき、ティアナが目を覚ましてね、スバルと一緒に謝りに来たよ」

「うん……」

「なのはは訓練場だから明日朝一で話したらって伝えちゃったんだけど……」

「うん……ありがとう」

暗い表情を浮かべながら返事をするなのは。

「でもごめんね……」

私の監督不行き届きで…。

フェイトちゃんやシグナムさん、ライトニングの二人に式まで巻き込んで…」

「ううん……私は全然。」

シグナムも気にしてないし、心配しないで…」

フェイトが慌てた様子で否定する。

「皆の様子どうだった……？」

フェイトに不安な表情で聞くのは。

「ティアナ達は、やっぱりまだご機嫌斜めだったかな…。」

エリオ達は全然気にしてないし、式もシグナムと一緒に自主練してるから……」

「そっか……」

少し考え込みながら返事をする。

「まあ…、明日の朝、ちゃんと話すよ。」

フォワードのみんなと…」

そう言った後、二人はこの話を終わりにした。

明日やこれからの訓練についてや、他愛もない話をしながら六課隊舎へと入って行く。

そしてちょうど玄関口をくぐったところで、館内に警報がなり響いた。

六課管制室

管制室では対応の検討が行われていた。

本来ガジェットはレリック、又はレリックと誤認したロストログアを発見した場合に出現する。

しかし……

「航空2型4機編隊が3隊、12機編隊が1隊」

「発見時から変わらず、それぞれ別の機動で飛行中です」

現状を報告するルキノ達。

「場所は何にも無い海上、レリックの反応もなければ付近には何もない」

モニターを見ながら呟くはやて。

そう、今回はガジェットが出現した地域には、レリックの反応やロストログアの反応が全く無いのだ。

これが普通にレリックを強奪しようとしていたならば、隊長陣やフォワードメンバーを投入すれば事は簡単。

しかし、今回の場合は明らかに異、又は何かの思惑があるのではないか思えない。

はやてはそこに疑問を持っていたのだ。

「テストロッサ・ハラOWN執務官、どう見る？」

フェイトの方に振り返りながら、はやては状況の見解を求めた。

「犯人がスカリエッティなら、こちらの動きとか、航空戦力を探りたいんだと思う」

はやての問いに、フェイトは現状での自分の意見を述べる。

「うん、この状況なら、こっちは超長距離攻撃を放り込めば、済むわけやし」

「一撃でクリアですよ」

はやての考えにリインが賛成する。

が……

「しかし、それでは向こうにデータをくれてやるようなものです。向こうは壊れても良い機械が破壊される代わりに貴重な戦力データが手に入る…。」

損得以前の問題になりますね…。」

そこにシグナムが超長距離攻撃の意見を否定する。

指摘された通り、はやても内心それには同意だった。

「まあ、実際この程度のことでは隊長達のリミッター解除ってワケにもいかんしな…。」

高町教導官はどうやる?」

「二人の言う通り、こっちの戦力調査が目的なら、なるべく新しい

情報を出さずに今までと同じやり方で撃退、かな？」

なのはの意見に、はやてとグリフィスは頷いた。

機動六課ヘリポート

ヘリポートに集まる隊長達とフォワード組。

「今回の任務は空戦だから、出撃は私とフェイト隊長、ヴィータ副隊長の三人」

「皆はロビーで出動待機ね」

「そっちの指揮はシグナムだ、留守を頼むぞ」

なのは達がフォワード組に指示を出す。

エリオとキャロははつきりと、式も何時ものように気怠そうに返事をする。

スバルはいつもの元気がなく、ティアナは間を置いて小さく返事をした。

「ああ、それからティアナ……？」

なのはに呼ばれ、驚きながらも静かに顔を上げるティアナ。

「ティアナは出撃待機から外れておこうか……」

その言葉に式以外のフォワードメンバーが驚きの表情を浮かべる。実際、今日のようなことがあったので出撃は無理と判断したのだらう。

「そのほうがいいな…。
そうしとけ」

ヴィータもなのはの意図を察知し、ティアナに休むように促す。

「今夜は体調も魔力もベストじゃないみたいだし…。」

なのはとしては気を使って言ったつもりなのだろう。
しかし、当のティアナはそうは受け取らなかった。

「言うことを聞かないやつは…使えない…ってことですか？」

声の調子を落とし、低い声音でティアナは言う。

なのはもさすがにあきれたのか、気に触ったのかはわからないが、表情を厳しくしてティアナの目を見る。

「はぁ…、自分で言ってるってわからない？」

当たり前的事だよ？

それ…」

「現場での指示は聞いてます。
教導だってサボらずやっています」

ヴィータがティアナのもとへ眉間に皺をよせ歩を進めようとするが、
なのはがそれを制した。

目に涙が溜って行くティアナ。

「それ以外の場所での努力まで、教えられた通りの努力じゃないと駄目なんですか？

私は…！

なのはさんたちみたいにエリートじゃないし、スバルやエリオみたいな才能も、キャロみたいなレアスキルも、式みたいな特殊な存在でもない……」

不安な表情でティアナを見守るスバル、エリオ、キャロ。

「少しくらい無茶したって！

死ぬ気でやらなきゃ強くなれてなれないじゃないですか！！！」

なのはにくっつくかかるとティアナ。

そんな二人の間にシグナムの腕が割込む。

その腕はティアナの胸ぐらを掴み寄せ、一気に殴り飛ばした。

ティアナの体は呆気なく吹き飛び、スバルは駆け寄り助けようとする。

「だだをこねるだけの馬鹿はなまじ付き合ってやるからつけ上がる」

早く行けとシグナムはなのはたちを促し、ヴィータに引きずられないのはもストームレイダーへと乗り込んだ。

ヘリが飛び立つのを見送ってからシグナムが言う。

「目障りだ、いつまでも甘ったれてないでさっさと部屋に戻れ」

倒れているティアナを見据えながら言い放つシグナム。

そのストレートな物言いにエリオとキャロはフォローを入れようと

する。

「シグナム副隊長」

スバルがシグナムを見据えながら名前を呼ぶ。

「命令違反は絶対ダメだし、さっきのティアの物言いとか、それを止められなかった私は、確かにダメだったとおもいます」

スバルの言葉に顔をあげ、反応するティアナ。

「だけど・・・自分なりに強くなろうとするのとか！きつい状況でも、何とかしようと頑張るのって、そんなにいけない事なんですよか！！」

スバルの言葉を黙って聴くシグナム。

「努力や強くなろうとすること事態は別に悪いことじゃない…」

しかし代わりに答えたのはシグナムではなく今まで黙って光景を見ていた式であった。

「だけど、ティアナに関しては別だ。

こいつの行動は努力でも何でもない、ただの破れかぶれな行動だ」

式のストレートな物言いに黙り込むスバル達。

「なっ…なにもそんな言いかたしなくても「事実……」」

スバルの言葉を遮り式は続ける。

「ティアナ、お前はあの時魔力刃を受け止められた後、なのはに目掛けてそれなりの威力がある攻撃をやろうとしてただろう？隣にスバルがいるのを分かった筈なのにな…」

その言葉にハツとするティアナ。

「もし、本当に仲間を失いたくなくて、今まで鍛練や努力を続けてきたならあんな行動はとる筈もないしできる筈もない。我を忘れて、感情に流されるままの行動、それがお前の努力の結果なのか…？」

あの時の状況を思い出すティアナ。

（そうだ…あの時…もし撃ってたら…スバルも…）

現に、あの時のスバルはなのはのバインドの影響で反応しきれていなかった。

もし放ったらスバルも一緒に、下手をしたらスバルだけ巻き込まれていたに違いない。

そう考えると、急に恐怖感がティアナを支配する。

「確かに、戦術の幅を広げるというお前の考えも理解できる。

これからの予測できない状況に対処するためにいずれやることだし必要なことだからな。

だけど、お前の得意分野の中距離での精密射撃も満足に出来ない内から、そんなことをしてもロクな成果は出ないと思うぜ？」

式の言葉に、ヴァイスに言われたことを思い出す。

『無理な詰め込みで、変なクセをつけるのも良くねえぞ』と。

「式の言う通りだよティアナ……？」

突然の声に振り向くと、そこにはシャーリーが立っていた。

「皆、ロビーに集まって、私が説明するから…。

なのはさんのことと、なのはさんの教導の意味を…。」

機動六課隊舎ロビー

シャーリーはロビーについてからずっとキーボードを叩き続ける。

その横にはシャマル、シグナムが座り、向かい側にスバル、ティアナ、キャロ、エリオ、式が座っている。

沈黙続く中、シャーリーが口を開いた。

「昔ね、一人の女の子がいたの」

モニターに映るその女の子は9歳の頃の高町なのはだった。

魔法も何も知らず、普通に学校に行き、家族と幸せな日々を過ごす筈であった一人の少女。

今では想像すらつかないなのはの姿。

そしてシャーリーは説明をし始めた。

P.T事件によりなのはの人生は大きく変わったこと。

闇の書事件の時のなのはの敗北。

そして勝つために選んだ、当時は安全性の危うかったカートリッジ

システムの使用と体にかかる負担を無視し、限界を突破した出力を出そうとするエクセリオンモード。

「だれかを救うため、自分の思いを通す無茶をなのはは続けた」

映像を懐かしむように見ながら言うシグナム。

「だが、そんなことを繰り返して、体に負担が生じない筈もなかった」

「事故が起きたのは…入局2年目の冬」

悲しそうな顔で話し始めるシャマル。

「異世界での捜査任務での帰り、不意に現れた未確認体。

いつもののはちゃんなら何の問題もなく、仲間を守って何事もなく終わる筈だった。

だけど…溜まっていた疲労、今まで続けてきた無茶が、なのはちゃんの動きをほんのちよつとだけ鈍らせちゃった。

その結果が…これ…」

そう言い、キーボードのボタンを押すシャマル。

すると体全体を包帯に包まれ、ベッドに寝かされたなのはの姿が映し出された。

その光景に啞然とするスバル、ティアナ、エリオ、キャロ。

映像を見て式も微かに眉を潜めた。

「もう飛べなくなる、立って歩けなくなる…そんなことを聞かされてどんな気持ちだったか…」

シャルが目を臥せる。

「無茶をしても、命をかけてでも譲れぬ場は、確かにある。だが、ティアナ。」

お前がミスショットをした場面は仲間の安全や、命をかけてでも、どうしても撃たねばならない状況だったか？」

シグナムの言葉にハツとするティアナ。

「訓練中のあの技は一体誰のための、なんのための技だ？」

顔を伏せ無言で唇を噛み締める。

「なのはさん…、自分と同じ思い…させたくないんだよ…。だから、無茶なんてしないでいいように、絶対絶対、皆が元気に帰ってこられるようになって…。」

本当に丁寧に…一生懸命考えて教えてくれるんだよ？」

震えているシャーリーの声に皆がただただ沈黙していた。

訓練所周辺

なのはの過去と教導の意味を教えられた後、ティアナは一人で色々と考え込んでいた。

シャーリーが言いたかったこと、無茶をし過ぎればいずれその負担

が体に現れ大きな失敗をすることになる。

それは自分の頭の中では分かっているのだが、やはり自分が周りより劣っていると言う考えは捨て切れずにいた。

「何一人で考え込んでるんだティアナ……」

突然声を掛けられ、おもわずその方向に顔を向ける。

そこにいたのは、相変わらず着物に赤い革ジャンという出で立ちの式が立っていた。

「別に……今日色々なことがあったから頭を整理してるだけよ……」

シグナムに殴られた時に言われた言葉を思い出し、ティアナは式の顔を見れずそう言った。

「そうか……」

式はそう一言呟いた後、ティアナから少し離れた位置に座った。少しの沈黙が流れた後、式が口を開いて質問をした。

「前から気になってたんだが……お前は何で自分の事をいちいち凡人と決め付けるんだ？」

質問を聞いた後、ティアナはポツリポツリと少しずつ自分の気持ちを話し始めた。

一通り話を聞き終えた後、式は少し呆れた顔でこう言い放った。

「お前バカか？」

突然の罵倒にティアナは怒るのを乗り越して、あっけらかんとして

いた。

「普通に考えてみる。

もし本当にお前が凡人で、才能がなくて、何の突出した才能が無かったりしたら、エース揃いの機動六課に誘われたりしたか？
誘われないだろ？

それに、お前は今は射撃と幻術しか能が無いって言ったよな。
なら、その射撃や幻術を今は余計なことを考えずにひたすらに磨いていけば良い話しだろうが。

そうすればお前は強くなるし、次のことを学ぶ土台がしっかりできるから、更に上を目指すこともできる。

何時ものお前なら到底考えられることだと思ったんだけどな」

式の言葉を黙って聞くティアナ。

「それにオレの世界じゃ、凡人でも時間と経験で強くなった奴はいる。

オレだって最初からあんなに強いわけじゃない。

だから、お前も焦らずにそうしていけば良いんじゃないか…？

さてと…：オレの話しは終わりだ。

後は、そこにいる教導官にでも聞いてくれ」

そう言って二人が後ろを振り返ると、任務を終えたのはが微笑みながら立っていた。

「それじゃあオレは帰「ま、まって…！」」

帰ろうとする式を引き止めるティアナ。

「あ…あの…ありがとう」

俯きながらお礼を言うティアナ。

「別に礼を言われるような事はした覚えはないぜ」

相変わらずぶっきらぼうな返事をしながら隊舎へと戻る式。

その姿を茂みに隠れていた4人はクスクスと笑いながら見ていた。

早朝の訓練所

「しかし、教官つてのも因果な役職だよな」。

面倒な時期に手をかけて育ててやっても、教導が終れば、皆勝手な道に行っちまうんだから」

「まあ、一緒にいる期間があまり長くないのはちょっと寂しいけどね」

キーボードを捜査する手を止め、ヴィータの方を向き答えるのは。

「まあ、そのあまり長くない期間にできる限りの多くのことを教えるのがお前たちの仕事だろ」

シグナムの言葉に微笑みながら頷くのは達。

「「「おはようございます!!!」」」」

大きな声で挨拶をしながらスバル達が走ってくる。

式は相変わらず眠そうな顔をしているが。
そんなスバル達の姿を見て、なのはは誓う。

【何があっても、誰が来ても、この子達は落させない。
私の目の届く間は勿論、いつか一人で、それぞれの空を飛ぶように
なっても】

第九話；絆へ（後書き）

ども、毎度お馴染み蒼眼の死神の作者闇帝です。ええ、今回は☆祝☆一万ヒット☆を記念して、皆様から式の使用魔法を募集したいと思います。♪どなたでも構いません、アイデアが良ければ即採用！ってこともあるので宜しく願います。それと私の小説とコラボしてくれる作家さん大募集です！こちらからお伺いすることもあります。その逆も勿論OKです！また、こちらのキャラを出演させてくれる方も大募集です。皆様お待ちしております！

第十話；機動六課のある休日・・・の少し前から（前書き）

何気ない平和な日常。それは多分・・・戦いに赴く私達からすればとてもとても、大切な一時。そんな日常を守り抜く為に・・・今日も皆頑張っています。魔法少女リリカルなのはstriker蒼眼の死神、始まります。

第十話：機動六課のある休日・・・の少し前から

機動六課模擬演習場

時刻はちょうど午後三時。

本来ならばこの時間帯には誰も居ない筈の演習場。

だが、今は廃墟を再現したフィールドが展開され、周りには幾つもの爆発音が響きわたる。

そしてまるで一陣の疾風のように地面を駆け抜ける一人の少女、両儀式。

死神の眼を持ち、太極を二分するという意味の名を持つ時空漂流者。

正式な管理局の職員ではない式はスバル達フォワードメンバーがデスクワークをしている時間帯を自主練に当てている。

本格的にデバイスを使えるようになってから日課になっている事だ。一通りのメニューを終えた式は一旦フィールドの外へ出て休憩を取り始める。

その姿には疲れを感じさせるような振る舞いはなく、このまま直ぐにでも再開できる、と言った感じだ。

「まだまだだな……」

先程の自身の訓練を映したモニターを見ながら、式は軽く舌打ちをした。

デバイスを手にしてから既に一カ月、未だに魔法を使った戦闘が満足のいく仕上がりにならない事に軽く苛立ちを覚えていた。

確かに初期の頃に比べたら魔法の質や習得した数、それを組み込んだ戦闘方法は周りから見れば異常と言って良い速さで上達している。なのはやフェイトが驚く程のスピードでだ。

式も頭では十分な能力に達していると分かっはているのだが、どうしても納得ができなかった。

『master、I feel that I hurry something, training of a while ago.』

Is not there a way very much even if eager?』

(マスター、先程の訓練から何かを急いでるように感じられます。あまり焦っても仕方ありませんよ?)

「なんだ……。」

お前にはオレが焦っているように見えたのか?」

『yes』

「………そうかもな……。」

もしかしたらオレは焦っているのかもしれない……」

静かに呟きながら式は空を見上げる。

自分が焦っている………その原因を探そうと一人で模索していたが、結局は何も分からなかった。

「式」

自分の名を呼ぶ声と、頬に突然感じた冷たい感触に思わず振り返る。そこには飲み物の缶を持ちながら、屈託の無い笑顔を浮かべるスバルが立っていた。

隣りには軽い笑みを浮かべてティアナもいる。

あの模擬戦の一件があつてから既に二週間。

式とティアナは少しずつではあるがお互いに話すような間柄になつてきていた。

とは言つても式は元々口数が多い方ではないし、ティアナも気恥ずかしさからたまにしか喋らなかつた。
ついでに後半の話しはスバル談である。

「お疲れ様式。

良かったら飲む？」

「ああ、悪いな」

スバルから缶を受け取り、蓋を開け一口飲む。

スバルとティアナも持っていた缶の蓋を開け、グビグビと飲み始めた。

「ぷはあ〜〜！」

やっぱり仕事を終えた一杯は格別だね〜」

「な〜に、親父臭い事言ってるのよ。

だいたい仕事の大半は私が手伝ってる事、アンタ分かってるの？」

「あう…。」

だってデスクワーク苦手なんだもん」

「苦手じゃ済まないのよ！」

アンタのお陰で私の量が倍に増えるんだからね！」

そんな漫才が隣りで繰り広げられており、その光景を見ながら式は軽く呆れていた。

「全く……あ、そう言えば式。

自主練の後で良いからオフィスに来てくれって部隊長が言ってたわよ?」

「はやての奴がか?

いったいオレに何の用なんだか……」

缶に残っている中身を一気に飲み干しながら、式は怪訝そうな顔で言った。

「わざわざ呼び出すような事なんだから、結構大切な事何じゃないの?」

「それかお説教かもしれないね」

「「お前・アンタじゃないんだから違うだろ・わね」

「あう……2人同時に言わなくても」

ツンデレ2人によるダブルツツコミに思わずガツクリと肩を落とすスバル。

まあ、お気の毒としか言い様が無い。

「まあ、取り敢えずこの後にでもはやてのところに行ってくるさ」

「それが良いわね。

それじゃあ私達は着替えて訓練の準備でもするわ。スバル行くわよ」

「了解。」

また後でね式」

「ああ、後でな」

部隊長オフィス

軽くシャワーを浴びて汗を流した後、何時もの蒼い着物に着替えた式は、はやての元に訪れていた。

別にそのまま直接行っても良かったのだが、大量の汗でベタベタのままでは流石に気持ち悪かった。

ドアを開けて中に入ると3人の人影があった。

目の前にデスクに座っている式を呼んだ張本人のはやてとその隣りでフヨフヨと浮いているリイン。

もう一人はソファアに座わりながらコーヒーを飲んでいるフェイトだ。

式が入って来たのに気付くとはやては軽く微笑む。

「なんだ、フェイトも来てたのか。

お前もはやてに呼ばれたのか？」

「ううん、ちょっと別の用事で来てたんだ」

フェイトがにこやかに話す。

式がフェイトの正面に座ったのを確認すると、はやては早速本題に入った。

「それで今日わざわざをここに来てもらった要件やけど……。
実は式に魔導師ランクの試験を受けてもらいたいからなんや」

リンが危なげに運んできたお茶を受けとりながら、式は聞き慣れない単語に眉を潜めた。

「魔導師ランクの試験……って何なんだ？」

「まあ、簡単に言えば魔導師としての実力がどのくらいのレベルに達しているかを確かめるテストやね。

式もデバイスや魔法を使用した戦闘に慣れてきたやし、力を試すには丁度良いと思ったんよ。

先色々な任務をする上では、式のパロメーターを他の部隊に渡すこともあるから必要な物やしね。

ついでに式が受けるのはA＋ランクの試験や」

はやてがデスクのキーボードを操作すると、目の前に概要を記したモニターが現れ、式はそれを興味深げに読んでいた。

「けどはやて、この前なのはと話し合った時はA A＋の試験を受けさせるって言ってなかった？」

フェイトが首を傾げながら質問すると、はやては顔を苦笑しながら答えた。

「最初は私もそうするつもりやったけど……。
ほら、部隊が所有する事のできる魔導師ランクって民間人にも適用されるやろ？」

それを考慮するのをすっかり忘れてたんや」

「ああ、なるほど…。
確かに式がA A+を受けて合格したら上から色々と文句を言われるもんね」

「そうゆう事やね。」

只でさえうちの部隊はツツコミ所が満載やからなあゝ」

はやてが机に俯せながら愚痴る。

その姿を見てフェイトと式は苦笑していた。

「まあ取り敢えず受けてみようと思ったなら何時でも言ってな？
手配すれば一週間ぐらいで直ぐにできるやしね」

「ああ、取り敢えずそうする。」

それではやて…：隠してるのかどうかは知らないけど、これとは別にもう一つ用件があるんじゃないのか？

まさかこれを話す為だけに呼んだわけじゃないだろ？

フェイトが来ているのがその証拠だしな。

差し当たり…：オレがこっちに來た原因が分かった事、ってところか？」

お茶を啜りながら話す式の言葉を聞いて2人は驚きの表情を浮かべる。

「ふふふ、流石に式にはかなわないね」

「全くやで。」

こうもあっさりバレちゃどうにもならんで」

お互いに顔を見合わせながら、苦笑する2人。

式はそれを見て心外とばかりに軽くそっぽを向いた。

「それじゃ早速話しに入るけど、先ずこちらの世界に飛ばされた原因からわかったから説明するね」

フェイトが何枚かの資料を取り出しながら、説明を始める。

「先ず式がミッドチルダに一番最初に転移してきた場所……首都クラナガンB・23の路地裏を調べてみたんだけど……」

そこには微かな量だけど魔力反応が計測された。

それをシャーリーに頼んで分析してもらったら、私となのはが以前に関わった事があるロストロギアと同じ波長の魔力だったの。

それがこれ……」

そう言って目の前のモニターに映し出されたのは、青く輝く一つの宝石。

フェイトはその映像を見て軽く表情を曇らせるのを式は見逃さなかった。

「これは……ジュエルシードってやつだな？」

式が画面を見つめながら静かに呟く。

以前に軽く読んだロストロギア関係の資料にその名があったのを覚えていたからだ。

「そう、手に入れた者の願いを叶えると言う力を持つロストロギア、ジュエルシード……」

今回式がこっちの世界に来た原因はこれだと私は考えてる」

その言葉を聞いて、式は一つの疑問が浮かび上がる。

「だけどおかしくないか？

確か九つのジュエルシードはP・T事件……だったか？

その時に消失。

残りの12個も、管理局が封印して今は管理してるんだろ？

なら、オレをこっちに飛ばしたのはその消失した物って事になるぞ？」

「別におかしな事じゃないんだ。

資料には消失したって書いてあるけど、次元震に巻き込まれた、って言った方が良いから。

だから次元を彷徨っていたジュエルシードが、何らかの形で式の世界に辿り着いて力を発動したと言う可能性は十分に高いんだ」

「なるほど……。

ところで肝心の発動した原因は分かっているのか？」

その言葉を聞くとフェイトは微かに表情を曇らせながら、説明を続けた。

「ごめん、そこまでは調べられなかった。

何しろ他の世界での発動だから原因は様々だし、実物を見つけて調べないとどうにもならないんだ……」

その答えを聞いて式は内心肩を竦めていた。

原因が少しでも解明されて、元の世界に帰れる確率が高くなるのを望んでいたからだ。

飛ばされて来たあの日、はやてにはあんな事を言ったものの、やはり自分の居場所に帰れないと宣告されたのは流石の式でも多少のショックは受けていた。

だから、今回のフェイトの報告には少しばかりの期待を感じずにはいられなかった。
その気持ちを感じ取ったのかフェイトの中では罪悪感が渦巻いていた。

「まあ、ウジウジしても何も始まらへん！

まだ完全に希望がないわけじゃあらへんし、もし帰れなかったとしても私の部隊で一生面倒見てあげるから心配せんでええよ？」

はやてが暗くなった空気を明るくさせようと、笑いながら若干の本音を含んだ冗談を言う。

フェイトは友人の気遣いがありがたく思いながら、式は多少の呆れを感じながら苦笑していた。

その後一通りの試験の概要をはやてから聞いた式は訓練に戻る為に演習場に戻って行った。

「それではやて、これからの事はどう考えてるの？」

三人だけになった部隊長オフィス。

コーヒーを飲みながらフェイトは今まで感じていた疑問を口に出した。

「これからの事って言うത്？」

「式の事だよ」

その言葉を聞いてはやてはフェイトが言いたい事が理解できた。

これからの事……それはこの機動六課の実働期間中に式の元の世界が発見できなかった時の為の事だ。

「私はなフェイトちゃん……。
式にはいざという時には管理局本部に入局してもらった方がええと
考えてる」

はやての考えにフェイトは同意であるように頷いた。

管理局に入局する事は本人にも自分達にもメリットがあると思った
からだ。

管理局はそこらの一般的な企業に入るよりは圧倒的に給料が良い
上に……まあぶっちゃけクロノやリンディ提督頼りになるのだが元
の世界の探索を打ち切られる可能性が低くなることもある。

それに式ならばなのはやフェイトのようにエースと呼ばれる魔導師
になるだけの素質を秘めている。

それは本局にとってもメリットはあるし、そういう人材を自分やゲ
ンヤなど知り合いの部隊に配属する事が容易になるのは本人には悪
いがチャンスとしか言えない。

「私もはやてと同じ意見だよ。

だけど……できればそうゆう事にはなって欲しくないよね……」

「確かにね……。

私やなのはちゃんも式と同じように何も知らないままこの世界と関
わりを持ってしまったけど、私達にはちゃんと帰るべき場所や仲間
が居たから此所までこれた。

だけど、式にはそれが無い……。

そんなの……悲し過ぎるやんか……。

私だったら絶対に耐えられない……」

はやてが自分が同じ立場だったと言う想像をしながら話す。
フェイトもはやてと同じ気持ちだった。

「そんな事にならない為にも私達が頑張らなきゃね」

「そうやね……。」

それが……この世界に巻き込んでしまった私達の責任や」

元の世界を絶対に見つける……それが駄目だったとしても自分達が式の居る場所になってあげる。

その決意を新たに誓いながら、フェイトとはやてはそれぞれの仕事に戻っていった。

模擬演習場

部隊長オフィスから戻り、式はそのまま午後の訓練に参加しようとして演習場に移動していた。

が、そこには何時ものようになのはの姿はなく、代わりにフォワードメンバーが自主練をしていた。

話を聞くと、どうやらヴィータと共に地上部隊の教習に行っているらしかった。

「それで、部隊長からの話して何だったの式？」

「別にたいした用事じゃなかった。

何か魔導師ランクの試験の説明と受けるかどうかを聞かれただけだったし」

式はフェイトからの話を省きながらスバル達にあらかた聞かせる。ここで先程の話を聞かせれば、スバル達がいらぬ心配やお節介を

かくのが目に見えていたからだ。

「凄いじゃないですか式さん！
いきなりA＋ランクの試験を受けることができるなんて！」

「確かにそうですよね。」

「普通は最高でもBランク試験からしか受けられない筈ですから」

「だけど式の魔力や実力を考えると妥当な処置じゃない？
なのはさんやフェイトさんだって特例でA A Aランクの試験受けて
いたんだしさ」

「確かにスバルの言う通りよね。
こっちの世界に来て直ぐの戦闘やこの前の任務では結構な結果を出
してるし」

などと話題の本人をそっちのけで話すフォワードメンバー。
このままでは延々と話しが続きそうなので、式は一旦ストップを
かけ自主練をやれと促す。

「それで式は今日の自主練はどうするの？
試験に向けてのやつでもやるの？」

「どうだろうな……。
この一カ月の間に基本的な事はなのはやフェイトに叩き込んでもら
ったから、取り敢えずはそれを踏まえた上で鍛練するつもりだ」

「ならさ式。
砲撃系統の魔法でも練習しない？
今まで全然やんなかったしさ」

スバルがそう提案すると、式は少し考え始めた。確かにこれまでは基本的な事を積み込むのを中心に鍛練をしてきたから砲撃系は一度もやらなかった。

自分の戦闘スタイルの件や余計な事を詰め込んで変なクセをつけたくなかったからだ。

だが、今はそれをできる程の知識や能力、余裕もある。別に過信をして言っているわけではない。

そうゆう事も必要だと思っているし、戦闘で行き詰まっている今なら何かしらのヒントを得られるとも考えているからだ。ならば考える事は自ずと絞られて来る……。

「そうだな、この際だから砲撃系もやってみるか。多分この先あまり必要ないと思うけど、一応な。オレも少し試してみたい事があるし」

「さっすが式！

ティアより話しが分かってる」

「ちょっとスバル……それどういう意味かしら？」

スバルがしまった、と言った表情を浮かべるが時既に遅しだ。

ティアナがクロスミラーージュでの早撃ちのごとくの勢いでスバルに文句を浴びせる。

それをエリオの仲裁で一旦中断した後、式は砲撃系魔法のコツや指導を受け始めた。

流石に初日から上手くはいかなかったがだいたいの感じを掴むことができる、あっと言う間に午後の時間は過ぎて行った。

翌日

午前中の訓練を何事もなく終えたフォワードメンバー十遊撃部隊の式は急に休暇になった午後の準備をしていた。

休暇になった理由は扱く簡単で、いわゆる労いというやつだ。

今までの訓練を頑張ってきた、これからも頑張っただけという気持ちを持ちを込めたのは達からのささやかなご褒美なのだ。

スバルとティアナは早速私服に着替えてクラナガンに遊びに行く準備を、エリオとキャロも2人そろっていわゆるデートと言うやつだ。式の方はまだどうやって過ごすか考えておらず、取り敢えず昼食を取ろうとなのは達と共に食堂に来ていた。

『以上、芸能ニュースでした。
続いて政治経済……』

お昼のニュースが流れる中、なのは達は楽しくおしゃべりをしながらそれぞれの昼食を食べていた。

式の方はシグナムの隣りに座りお互いに気が合うのか戦略について話しをしながら食事を取っている。

『昨日、ミッドチルダ管理局地上中央本部において来年度の予算会議が行われました。』

当日は首都防衛隊代表、レジアス・ゲイズ中將による管理局の防衛思想についての表明も行われました――』

レジアスの名前が出た途端会話は一旦止み、式以外の一行の視線はモニターへと向けられる。

それにつられて式も画面の方に顔を向けると丁度映像が切り替わり、

管理局の高官と思われる男の演説が始まった。

その男は首都防衛隊代表、事実上の地上本部トップ、レジラス・ゲイズであった。

「このおっさんまだこんな事言ってるのか……」

一通りの演説の内容を聞いてから、ヴィータは眉を潜めながら口を開いた。

「なあ、シグナム。

このおっさん誰なんだ？」

食後のお茶をゆっくりと飲んでいた式がモニターを見ながら質問をする。

「レジラス・ゲイズ中将、先程も紹介していたが首都防衛隊の代表をしている人物だ。

古くからの武闘派で演説をしていた通り、地上の武力強化を訴えている。

豪快な政治手腕や、黒い噂が多々流れていてそれを非難するものもいるが、多くの実績を残している為、最高評議会からの信頼も厚いのだ」

「ふーん……なるほどね……」

確かに演説の内容も豪快だな。

武力強化をただで一カ月に35%の犯罪低下が実現するなんて言ってるぐらいだからな」

茶を啜りながら毒舌を吐く式に一同は苦笑していた。

「あ、ミゼット提督」

「ミゼット婆ちゃん？」

レジアス中将の後ろに座っている人物を見てなのはとヴィータが呟く。

ミゼット・クローベル、ラルゴ・キース、レオーネ・フィルス。
管理局の中では伝説の三提督と呼ばれて有名な人物達だ。

「キール元帥やフィルス相談役もいるんだね」

「伝説の三提督揃いぶみやね」

フェイトとはやてもモニターの人物に気付いて呟く。

「伝説の三提督ね……」。

そんな偉い奴には見えないけどな。
どう見ても気の良い老人だ」

「だろ？」

いつ見ても普通の老人会だ」

「駄目だよ、二人共？」

偉大な方達なんだから」

フェイトが軽く注意をしながら食事を口に運ぶ。

「うん、管理局の惚明期から今の形を整えた功労者さん達だもんね」
なのはが説明をするが、当の式は興味無しと言った雰囲気茶をお
かわりしている。

その態度に多少ムツとするのはを見てフェイトとシグナムはお互いに苦笑していた。

食堂での食事を終えた式は午後の時間をスバル達と共にクラナガンへ遊びに行くことに決めた。

と言っても、部屋で横になりながら考えていた時スバルに「今日は折角の休みだからパァーとやろう！」と半ば無理矢理引っ張り出されたのだ。

「全く……その強引さはどうかした方が良くと心から思うぞスバル……」

ヴァイスと知り合いの整備員に移動する為のバイクを借りに格納庫に来ていた三人。

そこでは笑顔を浮かべながらせつせとティアナの後ろに乗り始めるスバルを見ながら式は今までの中で盛大のため息を吐いていた。

「諦めなさい式……」

あいつの諦めの悪さと強引さは最悪の部類に入るから」

「お前の言う通りだな……」

それに純粹であるがゆえに質が悪い」

2人そろってため息吐く。

それに気付いていないのか相変わらずの笑顔を浮かべながらスバルがこちらを呼んでいる。

それを軽く一瞥し、苦笑しながらバイクに乗り込む。

隊舎前まで移動すると見送りに来ていたなのはの姿があった。

「あれ、式もスバル達と一緒に出かけなんだ。
珍しいね」

「半ば無理矢理みたいなものなんだけどな……。
まあ、たまにはこうゆうのも良いさ」

肩を竦めながら答える式を見てなのはは微笑みを浮かべていた。

「お土産に美味しいクッキーか何か買ってきますね」

「うん、気持ちは嬉しいけど気にしないで良いから。
今日は3人でゆっくりと楽しんでおいでね？」

スバルの申し出をやんわりと断るなのは。

その言葉を聞いた後、三人が乗ったバイクはクラナガンに向けて移動を開始した。

その丁度直ぐ後にエリオとキャロが、二人を見送りに来たフェイトが玄関口に現われた。

「あ、ライトニング隊も一緒にお出かけ？」

「「はい、行って来ます!!」」

元気に挨拶をする二人を見てなのはは笑顔を浮かべる。

「はい、気をつけてね」

「あんまり遅くならないうちに帰るんだよ？
夜の街は危ないからね」

腰を屈め、エリオとキャロの肩をポンと手を置いたフェイトが言う。

「はい！」

「それじゃあいつてらっしゃい」

エリオとキャロは二人に見送られながらスバル達の後続くように
徒歩で街へと向かうため歩き出す。

フェイトはそんな二人に手を振りながら、姿が見えなくなるまでそ
の場にいた。

「それじゃあ、私達も中に入ろうかフェイトちゃん」

「うん、そうだね」

なのはとフェイトは自分達の仕事に移る為、隊舎の中へと戻って行
った。

だが……この時はまだ何も知らなかった……。

この平和な時間が静かに終わりへと近付いていくことに……。

第十話；機動六課のある休日・・・の少し前から（後書き）

はーい、最近原作の式より思考を柔らかくしすぎてるかな？、などと心配している闇帝です。毎度毎度蒼眼の死神を読んでもくださる方々ありがとうございます。前回にもお伝えしましたが、ただいま式の新使用魔法とクロスオーバーの受付を行っております。我こそは！と思う方は是非投稿お願いします。

第十話；ナンバーズ

首都クラナガン地下道

本来ならば常に薄暗い筈の地下道。

その場所を複数の車両に取り付けられたサイレンが周り赤く照らし
ている。

車道の周りには侵入禁止を告げる黄色いテープが張り巡らされ、そ
の内側では何人かの警官が現場検証を行っている。

スバル達フォワードメンバーがクラナガンに到着したのと同じ頃、
ここでトラックの横転事故が起こった。

横転した車体の所々が凹んでおり、その周りには積んであったであ
ろう荷物が散らばっている。

その場所へ静かに足音を響かせながら近付いていく人物がいた。
管理局の制服を身に纏い、長い紫の髪が印象的な一人の少女。

「陸士108部隊ギンガ・ナカジマ陸曹です。

現場検証のお手伝いに参りました」

敬礼をしながら自身の所属を告げたギンガに現場の責任者と思われ
る男が同じように敬礼をし礼を言った。

今回の横転事故の応援を頼まれ派遣されてきたのだ。早速、今回の
事故の状況説明を聞き始めるとギンガはその内容に微かに眉を潜め
た。

トラックの運転手の話しによればこの地下道を走っている最中に突
然積み荷が爆発し、その影響で横転したと言うのだ。

辺りを見渡してみるとトラックに積んでいたと思われる物が散らば
っている。

缶詰に飲料ボトル、食料品etc…。

どれも爆発するような代物ではなく、その事に疑問を感じていた。更に警官に話を聞くと妙な遺留品があると言う。トラックの車体がある少し先へと足を運ぶギンガ。そこにはあったのはカプセル型の機械の残骸と幼い子供一人が入れるくらいの空のポッド。

「ガジェットドローン？型の残骸……。それに……これは生体ポッド……。？」

首都クラナガン中央公園

午後の休暇を満喫していたスバル達一行は、休憩がてらにこの中央公園に訪れていた。

式は一人でベンチに座っており、スバルとティアナは目の前の露店でアイスを買っている。

二人が戻ってくるのを待ちながら式はゆっくりと周りを見渡していると何故か懐かしい気持ちが浮かんでいた。

この場所は自分がスバルとティアナに初めて出会った場所。

その事がほんの一カ月程前のことなのに妙に昔のように感じられていた。

式はそんな事を考えている自分に苦笑していた。

あの時の……二年間という長い昏睡状態から目覚め、生きている実感がなく空っぽだった自分自身がいた事を考えれば随分と変わったものだと思ったからだ。

「おまたせ、式の分のアイスも買ってきたよ」

そんな事を考えていると、上機嫌な顔をしたスバルが両手に四段重ねのアイスを持ちながら戻ってきていた。ティアナの方は片手に二段重ねのアイスとカップアイスを持っている。

「おいスバル……オレは冷たい物が苦手だから買ってこなくていいって言ったよな？」

「あれ、そうだったっけ？」

ただどせつかく買ってきたんだから式も食べようよ。

ここのアイスって美味しいから結構有名なんだよ？」

とか言いながら既に自身のアイスにかぶりつくスバル。

その表情はまさに幸せと言った感じで、式は少々呆れていた。

「取り敢えず受け取っておきなさい式。」

スバルの言う通り、ここのは美味しいから食べてみる価値はあるわよ？

もしいらないんだったら私が食べてもいいんだけど？」

仏頂面をしながらアイスを目の前に差し出すティアナ。

始めは断ろうと思っていた式だがアイスを見て、唐突にティアナに幹也の姿を重ねてしまいその気も失せてしまった。

「いや……やっぱりもらう。」

悪いなティアナ」

「さ、最初から素直に受け取ってれば良いのよ」

式に素直に礼を言われまんざらでもないティアナの姿を見てスバル

は笑みをこぼしていた。

「あはは、ティアのツンデレ！」

「うっさいバカスバル！！」

「あいたあ！？」

余計な一言を言うスバルに問答無用でゲンコツを入れるティアナ。そんな二人の漫才を呆れ顔で見ながら、式は黙々とアイスを食べ始めていた。

そんなほのぼのとした空気が流れる中、突然に鳴り響いた電子音。それはスバル達の各デバイスから流れでていて、緊急の要件を告げるためのものであった。

内容はレリックを所持していた女の子を保護したというものであった。

サードアベニュー・F・23

エリオとキャロの連絡を受け、スバル達三人は合流地点である路地裏に集合していた。

既にレリックの封印処理はキャロが済ませており、女の子の方は途中で合流したシャルが応急処置をしている最中である。

「それにしても……この女の子どうして下水道なんかを歩いていたんだろう……」

「そうね……。」

普通に考えれば何処からか誘拐されて、その犯人から逃げたしたと言うのが一番妥当な線だろうけど……。

レリックを持っていたことを考えるとそう簡単に説明がつく事でもないわね」

「そうだな……。」

レリックはロストログアの中でもかなり危険なものだ。

金目当てのちゃんな誘拐犯が持っているような代物でもないしな……」

静かに眠る少女の横顔を見ながらフォワードメンバーはそれぞれの疑問や推測を口にしていった。

その周りでは合流した陸士部隊がなのはやフェイトと共に現場検証を行っている。

「うん、バイタルデータを見る限り特に異常はない、怪我の方もかすり傷だけだし深刻な問題はないから安心していいわ」

シャマルの言葉を聞いてそれぞれが安堵の表情を浮かべるが、式だけは違っていた。

（何だ……この妙な気配は……？）

ほんの一瞬ではあるが確かに感じた微かな気配。

それは自分が過去に、元の世界で感じたことのあるものと同じであった。

「それじゃあ皆はこのまま此所で現場捜査。」

式は念の為に私と一緒にへりで待機だから、みんなよろしくね」

なのはの言葉に軽く返事をしながらも、式は感じた気配が気になっていた。

その気配の持ち主は自分が死闘を繰り広げた敵であり、本来ならばこの世にはいない筈の人物であるからだ。

だが自身の直感が、そいつがここにいることを明確に告げている。そんなことは到底有り得ない筈。

自身の思い違いであって欲しいと思いながらも式はデバイスに手を伸ばしながら警戒し始めた。

「それじゃあなのはちゃん、悪いけどその女の子をへりまで運んでいってもらえるかしら？」

「あ、はい」

シャマルの頼みで静かに眠る少女を抱き抱える移動するのは。フォワード陣はその場から離れ、式も周りに注意を向けながらフェイト達の後に続くようにへりへと向かった。

数十分後

機動六課指令室

巨大モニターに映し出される地下水路の地図。

そこにはフォワードの位置を示す青色の点が四つ、そして敵の存在を現す赤色の点が三つ表示されている。

小形のモニターが目の前に開き、地下水路を移動する機影の姿が映し出された。

「ガジェット来ました!」

映し出されたのは三機一組で移動するガジェット? 型改。
進路は真直ぐにヘリへと向かってきており、狙いはレリックで間違いという結論になった。

「他に数機ずつのグループで移動するガジェットを確認!
総数……約二十です!」

「更に海上方面にてガジェット? 型を補足……数六十です!」

その報告にはやては眉を潜めた。

上空のガジェット部隊はなのは達隊長陣を投入すれば問題はないだろう。

だか、いかんせん数が多いからある程度時間が掛かるだろうし、フォワードメンバーへの援軍もどうかしないといけない……。さつきシグナムからはこちらに向かっているとの連絡があったが間に合うかどうかは微妙な距離だ……。

そう思案していた時に入ってきた一本の通信。

はやては一時思考を中断し回線を開き、モニターを展開させる。そこに映し出されたのはスターズ分隊副隊長ヴィータだった。

『スターズ02からロングアーチへ。』

こちらスターズ02、海上で演習中だったんだけどナカジマ三佐が許可をくれた。

今現場に向かっている。

それからもう一人』

ヴィータの通信の後に割って入ってきた音声のみの通信。

『108陸士部隊ギンガ・ナカジマです。

別件捜査の途中だったのですが、そちらの事例とも関係がありそうなんです。

参加しても宜しいでしょうか？』

「うん、お願いや」

はやてはギンガとの回線を開きながら、各隊長陣との回線を開き指示を出し始める。

ヴィータはリインと共に海上の南西方向、なのはとフェイトは北西部上空を制圧。

ヘリはシャマル、式に護衛を任せ、ギンガはスバル達フォワードメンバー達と合流し地下水路の迎撃へと向かわせた。

市街地

廃墟の屋上に佇む一つの人影。

屋上から伸びている一本の鉄塔、その頂上で悠然と佇む紫の髪が印象的な少女。

名はルーテシア・アルピーノ。

強風が吹きながらも足場の小さい鉄塔の上をバランスを崩すことなくジツとしている。

そこに入った一本の通信。

無言でモニターを展開すると、そこには一人の女性が映っていた。ウェーブが掛かった薄紫色の長髪が特長のナンバーズが長女、ウーノ。

『へりに確保されたケースとマテリアルは妹達が回収します。お嬢様は地下の方に』

微かに頷きながら承諾の意識を示すルーテシア。

『騎士ゼストとアギト様は？』

「別行動……」

『お一人ですか？』

「一人じゃない……」

そう言うところルーテシアは右手を前に掲げる。

キャロのケリュケイオンと同型のブーストデバイスであるアスクレピオスが静かに輝く。

手の甲に紫炎が燈り、そこから六角形の形をした黒い物体が出現する。

それを手で優しく包み込み頬に寄せる。

「私にはガリユーがいる……」

『失礼しました。』

強力が必要でしたらお申し付けください。
最優先で実行します』

ルーテシアは頷き、その言葉の後ウーノからの通信は切れた。

「行こうか……ガリユー……。」

探し物を見つけたために……」

彼女の足元に紫色のベルカ式魔法陣が出現する。

その直後、魔法陣と共に彼女の姿は消えたのだった。

場所を移し、ルーテシアがいた所から数キロ離れた廃墟群。

その一角にある廃墟の屋上に佇む一人の人物。

黒い袈裟のようなコートを羽織り、まるで僧侶のような出で立ちをした壮年の男。

目の前にはモニターが開いており、そこに流れている映像を静かに見つめている。

そこには隊長陣達と共にへりに向かう式が映し出されていた。

「まさか貴様までこちらに流れついていようとはな……。」

これは好都合だ……」

そう言うモニターを閉じ、常に曇っていた表情が微かに綻ぶ。

「この地にて『根源』へと至る道を開く為に……貴様には再び糧となってもらおうぞ両儀式……」

ストームレイダー内部

『スターズ01、ライトニング01、現場に進行。
あと一分程でエンゲージです』

『スターズ02、リイン曹長と合流』

『フォワード陣、ガジェットの目標点に進行中。
このペースなら先行できます』

『スターズ01、ライトニング01エンゲージ』

上空にて飛行を続けているストームレイダー。

その中で通信機から流れてくる現場状況を聞きながら私は内部で待機していた。

今回、自身の出番がないとは思いながらも、先程の気配が気になつてか一応警戒はしていた。

敵は数が多いとはいえ所詮ガジェット。

その程度の奴等に機動六課のメンバーが遅れを取ることは先ずないと確信はしていたがどうしても嫌な感覚は拭い切れなかった。

その事を頭の片隅に置いておきながら、先程から管制室と見知らぬ陸士……確かギンガ・ナカジマとか言ってたな……との間で続けられている通信に耳を傾けた。

『私が呼ばれた事故現場にあったのは、ガジェットの残骸と壊れた生体ポッドなんです。

ちょうど五、六歳の子供が入るくらいの。

その近くに何か……思い物を引きずったような跡があつて……それを辿って行こうとしたした最中、連絡を受けた次第です』

多分こいつの言う生体ポッドの中に入っていた奴が、私達が保護したあの子供なのだろう。

引きずったような跡と言うのも十中八九、鎖で繋がれていたあのレリックケースの事で間違いない。

『それから……この生体ポッド、少し前の事件で似た物を見た覚えがあるんです』

『私もな……』

『人造魔導士計画の素材培養機……』

その言葉が聞こえた時、少女を看護していたシャルが動揺した表情を浮かべるのが見えた。

人造魔導士計画……。

詳しくは知らないが優秀な遺伝子を使って人工的に生み出した子供に薬や機械やらを使って強い魔導士を作りだそう、みたいな計画らしい。

この話を聞いたとき、何処の世界でも人は結局同じような事を考えるものだと思直呆れを感じていたりした。

この世界の魔導士と言うのはトウコ達みたいな魔術士とは違って遺伝や血筋など一切関係なく、完全に先天性の能力らしいからそういう技術が生まれたのだろう。

実際、なのはやはやては元々魔法とは一切関係のない世界の住人であるし、私も退魔の家系であるとはいえこの世界の魔法技術とは無関係の人間だ。

だが、この計画も論理的な問題や技術、コストに見合った結果が得られないなどの問題が色々あるらしく、今では禁忌とされているらしい。

多分、あの子供もどっかのイカれた奴が実験の為に作り……いや、生み出した素体なのだろう。

『スターズ01、ライトニング01、共に二グループ目をクリア。順調です!』

『スターズ02とリイン曹長も一グループ目撃破です』

どうやら空の方は順調らしい。

このまま特に何ごともなくいけば直に戦闘は終わるだろう。

だが、そうは問屋が下ろさないらしい。

『航空反応増大！

これ……嘘でしょう!?!』

すっ頓狂な声を出しながらアルトが報告している。

どうやら面倒な事になったらしい。

「ディレクティ、管制室のコンピュータとデータリンクしてこっちに空の状況を映し出されるか?」

『No problem master.
Little waiting...』

数秒後、管制室で見ているのと同じモニターが目の前に展開した。

見てみるとガジェットの数がさっきまで確認されていた数の倍以上にまで増加している。

どうなってんだ……?」

「ディレクティ、この敵が誤認の可能性はないのか?」

『There is not the possibility. A report from Ms' fate seems to be the formation where that consisted of it by an actual machine and a vision if I get together.』

（その可能性はないです。

ミスフェイトからの報告によれば、あれは実機と幻影によって構成された編隊です）』

……こっちの連中に大量に増援が来たように見せつけたと言うことか？

そういう派手なひきつけをしたと言うことは……目的は別にあるのは間違いな。

『ロングアーチからウイング01へ。

式聞こえる？』

『どうしたシャーリー？』

『もう気付いてると思うけど、多分敵はヘリを狙ってくると思うの。

今なのはさんがそっちに向かってるけど、いざという時はお願いできる？』

「別に問題ない。

そろそろ体を動かしたい時間だったしな。

……ん？

なのはがこっちに向かってくるってことは空のガジェットはどうするんだ？」

『今八神部隊長が限定解除して、超長距離砲撃で一気に殲滅できるから問題は無しだから心配しないで』

「……了解」

シャーリーとの通信を終え、私は立ち上がり軽く体を伸ばしながらバリアジャケットを装備する。

「さてと……そろそろ何が目的か確かめさせてもらうぜ……」

フォワード陣＋ギンガがヴィータとリインの援護を受け被疑者を確保した頃、廃墟都市の屋上では二人の少女が静かに待機していた。大きなメガネを掛け白いマントを羽織るナンバーズのNO. 4、クアットロ。

もう一人は長髪の手髪を薄黄色のリボンで結んだNO. 10、ディエチ。

彼女らはボディースーツ系の衣服を着用し、ディエチの方は布で巻かれた巨大な物体を持っていた。

「ディエチちゃん、ちゃんと見えてる？」

「ああ……遮蔽物もないし、空気も澄んでる。

良く見える」

彼女達の目には、約数km先で飛行するヘリが映し出されていた。

普通人間の肉眼ではこんなに離れた場所を視認することはまずできない。

しかし、彼女達はそれを平然とやってのけていた。

その理由は瞳に埋め込まれた機械であり、これによって彼女達は優れた望遠能力を有していたのだ。

「でも良いのかクアットロ……撃っちゃって。

ケースは残せるだろうけど、マテリアルは破壊しちゃうことになる」

「うふふ…。

ドクターとウーノ姉様曰く、あのマテリアルが当たりなら、本当に“聖王の器”なら砲撃くらいでは死んだりしないから大丈夫だよ」

ディエチの質問を微笑みながら甘ったるい口調で返答するクアットロ。

その答えに興味がないのか無表情で返し、抱えている巨大な物体の布を外した。

そこから出てきたのは大型のライフル。

ディエチの固有武装であるイノメースカノンだった。

「?」

その時、クアットロの元に一本の通信が入る。

モニターを開いてみると、そこにはナンバーズのNO. 1ウーノが映し出されていた。

『クアットロ、ルーテシアお嬢様とアギト様が捕まったわ』

「あゝら。

「そう言えば例のチビ騎士に捕まってましたね」

『今はセインが様子を伺っているけど……』

「フォローします？」

先程の愛想良い振る舞いと打って変わり、悪意ある表情を浮かべながら問い掛ける。

『お願い』

その一言のあとウーノとの通信は切れ、クアットロはクイツと眼鏡を持ち上げた。

『セインちゃん？』

『あいよくクア姉』

クアットロが念話を繋げると陽気な声が帰って来た。
相手はナンバーズのNo. 6、セイン。

『こっちから指示を出すわ。』

お姉様の言う通りに動いてね？』

『うーん、了解』

次にクアットロは念話の相手を拘束されているルーテシアへと繋げる。

『はーい、ルーお嬢様』

『クアットロ……』

『何やらピンチのようで？』

お邪魔でなければクアットロがお手伝い致します』

『……お願い』

『はーい、ではお嬢様……？』

クアットロの言う通りの言葉を……その赤い騎士に……』

そう指示を飛ばすクアットロ。

その表情は口元を歪め怪しげな笑みを浮かべていた。

戦闘区域から全速力でヘリの元へと駆け付けたなのは達は肉眼でその姿を確認できるまでの位置にまで接近していた。

「見えた！」

「良かった……」

ヘリは無事」

まだ無事な状態を見て安堵したのも束の間、市街地にて高エネルギーが確認された。

それは管制室やなのはとフェイト、ガジェット？型を掃討していた

はやて、そしてへりに乗っている式も気付いていた。

一方ビルの屋上、イノメースカノンを構えながらへりへと照準を定めるデイエチ。

そのカノンの銃口には七色に光り輝くエネルギー弾が生成されていた。

「ISヘヴィバレル発動……」

インヒュレントスキル
IS。

戦闘機人である彼女達が魔力以外のエネルギーを動力源とした特殊技能のことを言う。

この技能はナンバーズのメンバーそれぞれが異なるものが与えられており、特定の分野に特化されている先天固有技能である。

デイエチのISヘヴィバレルは固有武装であるイノメースカノンにエネルギーを送り込み砲撃弾を生成、それを撃ち出す技能である。

彼女の足元にはテンプレートと呼ばれる何重もの円が回転しながら、不規則に動き回る特殊な魔法陣とは異なる陣形が展開されている。

それと同時期、ルーテシアは先程から自身に尋問をしているヴィータに対して、クアットロから言われた台詞を口にしていった。

「逮捕は…良いけど…：…大事なへりは放っておいていいの…：…？」

「お前…：…どうゆう事だ？」

その言葉に訝しげな表情を浮かべながらルーテシアに詰め寄るヴィータ。

フォワード陣もルーテシアの突然の言葉に眉を潜める。

「あと十二秒…。

十一…十…」

ディエチもイノメースカノンの照準をへりへと向けながら、カウン
トダウンを開始する。

「……あなたは…また……守れないかもね……」

「ッー!!」

ルーテシアのその一言がヴィータにある光景を思い出させる。

ボロボロになったレイジングハートに血で真っ赤に染まったバリア
ジャケット、そして傷だらけになりながらも自分を心配させまいと
声を掛けるのは。

そして

「発射……!!」

刹那、イノメースカノンから砲撃魔法に匹敵する程のエネルギー弾
が放たれた。

廃墟都市を破壊しながら、轟音と共に物凄い速度で目標であるヘリへと真直ぐに向かっていく。

ロングアーチをはじめ、肉眼で視認することのできたのは達やヘリにいたヴァイスやシャル、式も向かってくるエネルギー弾を目にしていた。

あと少しでエネルギー弾がヘリに着弾しようとした時、その光景を見ていた誰もが“撃墜”という最悪なイメージを思い浮かべ背筋を凍らせた。

『ある一人』を覗いて。

ドヒュン！！

「あら？」

「へ？」

その音が鳴った直後、エネルギー弾がヘリから放たれた何かによって貫かれ、跡形もなく消滅した。

打ち消したのではなく完全に『消滅』させたのだ。

その光景にクアットロとディエチはただ啞然とし、ポカンと口を開けることしかできなかった。

「砲撃が……消滅した？」

「そ、そんな馬鹿な…。」

跳ね返される未だしも、消滅するなんて本来なら有り得ない……」

先程の衝撃から回復したディエチが慌てて瞳に仕込まれたカメラでヘリを確認する。

そこには……。

「ギリギリ間に合ったか……」

そう呟き、式は構えていた物を下げながら安堵の息を漏らした。

目の位置には照準器と思われる赤いバイザーが展開され、手に握られているのは一振りの弓。

レヴァンティンのボーゲンフォームと酷似しているが、あちらは全体的な色合いが赤なのに対してこちらは蒼、他にも所々の装飾品などが異なっているのが見て取れる。

この弓はディレクティ、セカンドモード『アーチャーフォーム』。

ディレクティの中で唯一、遠距離戦に対応しているフォームである。レヴァンティンのように刀身の一部を矢とし、それに魔力付加を施して放つのは違い、こちらは純粋に魔力オンリーの矢を放つタイプである。

先程式は咄嗟にこのフォームへとチェンジさせ、エネルギー弾の『点』にカートリッジ二発分の矢を放ったのだ。

「ディレクティ、モードリリース」

『yes master』

デバイスを元のナイフに戻しながら、式はエネルギー弾が発射されたと思われる位置を睨み付け、次の瞬間にはその場から消えてしまった。

砲撃が消滅した原因を探ろうとヘリを見ていたディエチは突然姿を消した式を見て、嫌な予感が頭を駆け巡っていた。

「ねえクアットロ……何かヤバそうな奴がこっちに向かってくる予感がビンビンにするんだけど……」

「分かってるわよディエチちゃん。

あの教導官や執務官の事だから直ぐにこっちの場所に気付くだろうし」

「いや……そっちの事じゃないんだけど……」

ディエチの呟きを軽くスルーしたクアットロは状況が分からないゼインへと念話を繋げる。

『セインちゃん聞こえる？

そっちの方はどうだった？』

『ギリギリだったけどお嬢様もケースも無事回収したよ。

それにしても何なのアイツ？

ディエチの砲撃をかけすなんてさ』

『それは私が聞きたいわよ。

取り敢えずセインちゃんはそのまま撤収。

私達も今から帰るからドクターに連絡宜しくね』

『了解クア姉』

セインとの念話を切った直後、二人の頭上に黄色い魔力弾が大量に降り注いだ。

咄嗟に気付いたクアットロは惚けているディエチの首根っこを掴みながら屋上から一気に離脱する。

「見つけた！」

「こっちも！？」

「早い……！」

背後からかかるフェイトの声。

いつの間に背後を取られたのか、と驚きながらもクアットロはディエチを抱えながら全速力で空中へと退避する。

が、その直後今度は真上から無数の白銀の魔力弾が降り注ぎ、気付くのに遅れたクアットロとディエチは直撃はしなかったものの何発か体を霞めた。

「逃がすかよ……」

霞めた傷口を押さえながら、上から聞こえた声の方に顔を向ける二人。

そこには空中に質量化した魔力を展開し、その上に乗りながらから静かに二人を見下ろす式が立っていた。

心なしかいつもより殺気の度合いが20%増しになっている。

「うっそ〜ん。」

あの距離をこんな短時間で？」

「マジで……？」

補助魔法「エアライド」。

式がアクセルフィンの代わりとして組み込んだ空戦用の魔法である。と言っても質量化した魔力を足元に展開しながら移動していくという、至ってシンプルな物なのだが。

「市街地での危険魔法使用及び殺人未遂の現行犯で…逮捕します！」

「こっちは殺されかけたんだ。

無傷で逃げられると思うなよ……！」

前方には怒り状態の式、後方には魔力スフィアを展開したフェイト。まさに絶体絶命と言える状態ではあるが、それでむざむざ諦めるクアットロではない。

「IS発動…シルバーカーテン」

クアットロの手甲が淡く輝く。

それに呼応するかのように二人の姿が突如として、式とフェイトの視界から消え去った。

これがクアットロの持つ先天固有技能、ISシルバーカーテン。幻影を操り、対象の知覚を騙すことを目的としたものでその対象は人のみならず、レーダーや電子システムにも及ぶ。

先程のガジェットII型の大編隊はこのISを使用した結果なのだ。姿を消した事を確認するとクアットロは再び全速力で逃げ出す。

「逃がさないと云ったろ……」

が、残念なことにこのISは直死の魔眼との相性は最悪だった。
クアットロとディエチの「線」が見えている式はエアライドを次々と展開しながら一瞬で近付き、情け無用の斬撃を放つ。

「シルバーカーテンが見破られてる!？」

「アイツ……化け物？」

式の一撃を間一髪で避けながら、シルバーカーテンを見破った相手を見据える。

これには流石のクアットロも驚きを隠せなかった。

「さあ…どうする？」

このまま捕まるならそれで良し、逃げると言うなら……少しばかり痛いめを見てもらうぜ？」

少しじゃ済まさないけどな、と言う心の声が聞こえたのは気のせいだろう。

式は未だに姿を消したままの二人を見つめながらも相手の位置情報をなのはやフェイトに送る。

シルバーカーテンが通用しないのを改めて確認したクアットロはISを解除するが、投降する意思がない事を伝える。

「あゝら、こんな事で管理局の馬鹿者供に負けを認める私達ではありませんわ♪」

「右に同じ…」

相手を挑発するような態度をとりながらもクアットロは必死にこの状況を打開する案を模索するが良い案が浮かばない。

自身は元々後方指揮仕様であるから接近戦はからつきし、ディエチは見て分かるように完全に遠距離戦仕様であるからどうしようもない。

まさにうつ手無しだ。

「そうか…。」

なら…宣言通りに痛いめを見てもらうか…」

デバイスのカートリッジを一発ロードし、風牙一閃を放つ準備をする。

それと同時に離れて待機しているのはとフェイトも何時でも砲撃を放てるようスタンバイを始める。

「風牙一閃…」

静かに己の技を呟いた後、式の体のはぜた。

数メートル離れていた距離を一瞬で詰め、寸分の狂いなくクアットロの胴体目掛けて切り付けた。

クアットロの殺られるという予感と式の決まったという予感が交錯する。

だが、そこへ一人の乱入者が入る。

なんだ——！？

突如感じた、自身に向けられる殺気。

咄嗟に刃を収め、エアライドを発動しながら急制動掛けて踏みとど

まる。

ヒュンッ、と刃が空を切る音が聞こえた。

そのまま突っ込んでいればそれは自身の頸動脈を確実に切り裂いていた一撃。

危なかった、と冷や汗を流しながら式は突然の乱入者へと視線を移す。

クアットロとディエチより長身、紫色の髪をショートカットにした少女、ナンバーズのNo. 3トーレ。

腿と足首、手首付近からエネルギー翼・インパルスブレードを発生させており、先程の刃の正体はこれである。

「ほお…あの一撃をかわすとは…。
なかなか面白みがありそうな奴だ」

「トーレ姉様く助かりました」

「マジで感謝…」

後ろで安堵の息を漏らす二人にトーレは鋭く眼光を光らせる。

「馬鹿者供め、あれ程油断するなど念を押したのにこの有様だ。
監視目的で来て良かった。

お嬢様が転送の準備をしてくださっている。
直ぐに撤退するぞ」

そう言うのとトーレは二人を抱え込んで離脱しようとする。
その刹那、白銀の刃がトーレに向かって放たれた。

ガキインッ!!

トーレのインパルスブレードと式のディレクティが激しくぶつかり合う。

「このまま逃がすと思ったのか？」

突然の乱入者を睨み付けながら、式は徐々にディレクティに込める力を上げていきそのまま横薙ぎに振った。

トーレは刃を受け流しながら、左手のインパルスブレードを突き出す。

相手の刃が自身に向かってくるのを見ながら、式は左手に何時ものナイフを握り、そのまま弾き返した。

『式、直ぐそこから離れて!』

『砲撃で昏倒させて、そのまま捕まえる』

『了解…』

なのはとフェイトの念話を聞いた式は反転しその場から離脱する。追撃がこないことに違和感を覚えた三人。

その答えは直ぐに分かった。

「トライデント…スマッシャー!」

「エクセリオン…バスター!」

バルディッシュとレイジングハート、それぞれからカートリッジが一発消費される。

フェイトの左手に展開された魔法陣から金色の三つ又状の砲撃魔法が、レイジングハートから桃色の砲撃魔法が放たれる。

二つの砲撃は空気を切り裂くように真直ぐに目標へと向かっていき、誰もが直撃したと確信した。

しかし二度ある事は三度ある。

又もや予想外の出来事が起こった。

「え!？」

「嘘!？」

確実に着弾すると思われた砲撃が目標を変えたかのように、地上へと曲がり始めたのだ。

その曲がり方は直角に近い角度であり、突然の出来事になのはとフエイトは驚きを隠せなかった。

その隙にトーレ達の足元には紫色のベルカ式魔法陣が展開し、超長距離転移魔法によりその場から姿を消した。

「しまった!」

「逃げられた!」

被疑者に逃げられた事を失念しながら、なのは達はロングアーチに連絡をいれ離脱していく。

だが、式だけはその場に止まり全く別の方角を見つめていた。

先程の：砲撃が突然曲がった異変が起こった時、廃墟群の方に一人の人影がいるのが見えたからだ。

一瞬ではあるが、確かに確認できた姿は一人のある人物を思い出さ

せた。

その事実は一サードアベニューで感じたあの気配や直感と確かに一致する。

「まさか…アイツがここにいても言うのか…？」

廃墟都市群

式が見つめていた場所から少し離れた廃墟群。
そこに鎮座する一人の男。

「ふむ…まだ本調子ではないか…。
しかし…あやつもこの地の『魔術』を身に付けていたか…。
これで少しは面白みが出て来たと言う事か…」

そう言うと男は…：荒谷宗蓮は顔を上げながら笑みを浮かべていた。

第十話；ナンバーズ（後書き）

どもども、毎度読んでいただき感謝感激な闇帝でございます。前回、前々回の告知のおかげかうちのツンギレを出演させてくださった作者様がおりました。改めてお礼を述べさせていただきますm（――）m。さくて・・・それは別に良いのですが・・・新魔法の件についてのお便りが全然こにゃい！wwww。つうわけでお便り待ってます。

番外編；蒼眼の死神VS烈火の将（前書き）

待ちに待った式とシグナム副隊長の模擬戦！

前回はティアの一件で駄目になったけど、今回はそんな心配は全然なし。

さてはて結果はどうなるのやら・・・？

魔法少々リリカルなのはstriker蒼眼の死神始まります！

番外編；蒼眼の死神VS烈火の将

模擬演習場

機動六課フォワードメンバーが休暇をもらう三日前。

午後の訓練の総まとめとしてフォワードメンバー対隊長陣達による模擬戦が行われていた。

最初はエリオ&mp;キャロのライトニング分隊VSスターズ分隊隊長なのは行われ、結果は当然ながらなのはの勝利。

今はスバル&mp;ティアナのスターズ分隊VSライトニング分隊長のフェイトの戦闘が行われ、模擬戦も大詰めに向かい始めている。

「はあああああ、リボルバーシュート!!」

ウイングロードを足元に展開し、愛機リボルバーナックルのカートリッジをロードするスバル。

向かう先は空中にてこちらを見つめているフェイト。

デバイスから空葉莢が排出され、ナックルスピナーによって発生した衝撃波が勢い良く打ち出される。

それを軽々と避け自身の周囲に金色の魔力スフィアを展開するフェイト。

その全照準をこちらに突撃してくるスバルに向ける。

「クロスファイヤー、シュート!!」

そうはさせまいと廃ビル郡の中に潜んだティアナが、カモフラージュを施し周りに展開していた魔力弾を一斉掃射した。

フェイトの逃げ場を奪うかのように発射されたそれは並の魔導師で

あればチェックメイト確定の一手。
だがフェイトも本局では指折りの実力に入る歴戦の魔導師。

『sonic move』

自身に向かってくる魔力弾全てを軽く一瞥し、神速の名を持つ加速魔法で弾丸の雨を潜り抜ける。

その最中、先程スバルを迎撃する為に展開していたスフィアの半分をティアナへと向ける。

「プラズマランサー、シュート!!」

雷の矢と化した五つの高速直射弾がティアナへと降り注ぐ。

先程の攻撃に残り全ての魔力を消費し、長時間の戦闘によって体力が皆無だったティアナは避ける暇も無くランサーの雨に吞まれた。

相棒の倒れる姿を横目で見ながらも、決死の攻撃によって作り出された隙を無駄にしない為スバルは駆け抜けるスピードを一層上げる。狙うは死角からの一撃必殺。

ウイングロードをフェイトの下方に展開し、それを駆け抜けながらカートリッジを二発ロードする。

「はあああああああ!!」

リボルバーナックルに高圧縮された魔力を付加、更に加速によって生じたエネルギーを上乗せし、こちらの接近に気付いていないフェイトへと叩き込む。

だが咄嗟に接近を察知し、即座にバルディッシュで真正面から迎える。

バチバチバチッ!!

魔力と金属が激しくぶつかり合う音が演習場中に響き渡る。
その光景を固唾を飲んで見守るエリオ、キャロ。

「ぐっ………!!」

その最中徐々にパワー負けし始めたのか、徐々に後ろに押され始めるスバル。

本人もかなりキツイのか苦悶の表情を浮かべていた。

バキンッ!!

まるで鉄の棒がへし折れたような音が周りに鳴り響く。

その直撃、フェイトによって弾き飛ばされたスバルがウインググロ―ドから落下する。

「うわああああ………つてあれ？」

悲鳴を上げながら落下するスバルを優しく抱き留めるフェイト。

「大丈夫スバル？」

「あっ………はい。」

ありがとうございますフェイト隊長」

地上に降り立ちスバルを降ろすとフェイトはにこやかに模擬戦の終了を告げる。

それを聞きガツクリと肩を落とすスバルであった。

ランサーの直撃を受け気絶し、タンカで医務室へと運ばれるティアナ。

それを見送った後、自身の相棒であるデバイスを掴み演習場へと向かっているシグナムがいた。

「なんか嬉しそうに見えますねシグナム副隊長」

「まあ、当然なんじゃない？」

シグナム副隊長は戦闘マニアだし、式との模擬戦楽しみにしてたしさ」

「そう言えば前回の時はティアナさんの一件で中止になりましたもののね」

そんな感じで屋上に上がって来たスバルと話す、エリオ、キャロ。彼女らは前々から今回の模擬戦を見るのを楽しみにしていた輩だ。六課の中で近接戦の実力はフェイトと一、二を争うレベルのシグナムと式の対戦なのだ。

これを見るのを楽しみにしないで他に何を楽しみにすれば良いと言うのだ？

シャーリーやフェイトも屋上に上がって来て観戦しようと適当に座る。

「副隊長と一対一の模擬戦だけど緊張とかしてない式？」

近くにて軽く準備運動している式に心配そうな顔で声を掛けるスバル。

「何でこんなことで緊張しなきゃいけないんだ。本当の殺し合いをするならまだしも、たかが模擬戦だろ？」

「それはそうだけど……」

軽く呆れるような顔で話す式にスバルは少し困ったような声で答える。

そんなスバルの肩を叩きながらいつの間にか復活していたティアナが苦笑ぎみに「何を言っても無駄よ」と話す。

と言うか回復するの早いなオイ……

そんな二人を無視しながら式は模擬戦場へと向かう。それと入れ替わるように入って来たなのはがモニターを展開しながら準備をする。

「ねえ、なのは。」

今回の模擬戦、なのははどちらが勝つと思う？」

フェイトがフィールドの設定をしているなのはに近寄りながら話す。

「うーん……私は五分五分の戦いになると思うな。」

シグナムさんと式はどちらもガチガチの近接戦タイプ。

となると勝負の決めどころは読み合いと純粋な技量の差だからね。

両者ともそのレベルは殆ど同じだから難しいところだよ……」

「そっか……」

なのはが苦笑しながら話すのを、お互いに対峙するシグナム達を見ながらフェイトは短い返事を返した。

「フィールド修復、及び再設定完了……」。

二人とも、何時でも始めてOKだよ」

その言葉を聞き、お互いに向き合って待機していた式とシグナムが
各々のデバイスを発動させる。

シグナムは何時もの赤い甲冑を身に纏いレヴァンティンを鞘から抜
き構える。

式も自身のバリアジャケットを装備し、ディレクティを逆手に構え
ながらシグナムを見据える。

「どこまでやれるか見せてもらうぞ両儀……」

「ハッ……それはこっちの台詞だ。

悪いけど勝たせてもらうぜシグナム……」

自身の体を静かに戦闘のものへと切り換えて行く両者。

お互いに考えるのは模擬戦などと言う生易しいものではなく、限り
無く殺し合いに近い真剣勝負。

その雰囲気は両者の周辺の空気と浸透していき、周りで見学してい
るなのは達隊長陣やフォワードメンバーにも感じ取れる程となっ
ている。

「それではレディー………ゴー!!」

模擬戦開始の合図。

それと同時に式は地面を疾走し、先手必勝とばかりにシグナムへと
向かう。

両者の間を埋めていた距離は一瞬で縮まり、右手に持たれたナイフ
が胴体を袈裟斬りにしようと放たれる。

だが振り抜かれたそれはシグナムへと届かず、金属同士がぶつかり

あうとき特有の音を響かせながらレヴァンティンによって防がれる。

「ほう……流石はと言ったところか……」

「その余裕が何時まで続くか……なっ!!」

式は鏢競り合いの状態から力任せに振り抜き、そこから右、左と鋭い斬撃を次々と繰り出していき、それを回避していくシグナム。そのお互いの動きは激しさがあがりながらも滑らかさや華麗さがあり、一切の無駄がない。

式の武器はナイフ、それにたいしてシグナムの武器は両刃剣。

普通に考えればそれぞれの武器の特製や威力、リーチなどの点で式はシグナムよりかなり部が悪い。

それに今回は模擬戦と言う事もあり化け物レアスキルである「直死の魔眼」は魔法にたいしての使用以外は禁止されている。

これだけの要因が揃えば「普通」の人間ならば、ヴォルケンリッターの将であるシグナムに勝つのはまず不可能だろう。

だが、式はその「普通」には到底当てはまらない。

「……………っ!!」

自身の首目掛けて放たれたディレクティをレヴァンティンで受け止めたシグナムは微かに驚きの声を漏らした。

式の腕から放たれた一撃が予想以上に重いのだ。

本来ナイフという武器はその性質上、西洋剣のような重さを乗せた一撃を放つのは困難に近い。

なので大抵の場合、その軽さを生かし相手の急所や死角に素早く、かつ連続で攻撃を当て仕留めるのがセオリーとなっている。

だが式の場合は技量の高さもあいまって攻撃の一つ一つに異様なキレがある上に、ナイフとは思えないような重さの一撃を放ってくる。

そのせいかシグナムは最初に自分が思い浮かべたリズムが組めず、式のペースに徐々に吞まれてきていた。

「くっ………！」

式の斬撃を弾き返し、一度体制を立て直す為に空へと上昇した。

自分のリーチから逃れられ式は舌打ちをした。

アクセルフィンを使えば直ぐに追撃はできる。

だが以前使用した時に感じた、あのフワフワした感触が薄気味悪くて使う気にはなれなかった。

もう一つ手はあるのだが「アレ」はまだ不安定な状態なのでいざという時にしか使わないと決めていた。

「なかなかだな両儀。

正直始めから押されるとは考えていなかったぞ……」

「お前の強さは自分の目で充分に分かっているからな。そんな奴に本気を出さないのは失礼だろ？」

その言葉にシグナムは微かに笑った。

「なるほど……ならば私も本気を出すでしょう。

先程のようなにはいかなくなるぞ？」

「上等だ。

御託を並べてないでさっさと来い……」

シグナムを挑発しながら、再び構えを取る式。

その直後、レヴァンティンを構えたシグナムが一気に降下をし始める。

『ダガーバレット』

式の周囲に六つの白銀の魔力スフィアが展開する。
それがナイフの形へと変化し、一斉に目標へと放たれた。

ダガーバレット

フェイトのフォトンランサーを式流にアレンジを加えた高速直射弾だ。

それを軽々と回避し、更にスピードを上げながらシグナムは式へと接近していく。

『ダガーバレット、アサルトシフト』

再び白銀の魔力弾が放たれるが、今度は数が十と多いうえに速度が早い。

シグナムはそれすらも軽々と避けるが、一つだけ直撃コースの物が迫る。

その弾を正面から真っ二つに切り裂く。

が、その直後シグナムの体を覆う程の爆発がおこった。

「えっ……今のなに!？」

スバルが驚きの声を上げる。

エリオやキャロも何がおこったのか分からないと言った表情を浮かべている。

ティアナは何か心当たりがあるのか、微かに納得したような表情を浮かべている。

「今のは近距離迎撃用の弾だね。」

元々展開してから放つまでの時間が短いバレットダガーに、速度上昇と炸裂効果を付加したタイプ。
その分威力と射程距離が少し犠牲になってるけどね」

なのはが今の魔法について説明する。

人目見ただけで看破するとは流石はエースオブエース、魔王なのはさまだ。

「な、何だろう……。」

今一瞬なのはさんからどす黒いオーラが……」

スバルが少し怯えた表情で静かに呟く。

ちっ……作者の語りを無意識に感じるとは流石なのはだ。

模擬戦の方に視線を戻すとシグナムの周辺は煙が立ち込めていた。

式はあの程度の攻撃でダメージを与えたとは思っていない。

さっきの弾はシグナムの足を少しでも止める為に放った物だ。

いくら式とはいえあの高さからの斬撃を防げば少なからず腕が痺れて戦闘に支障をきたすだろうし、防御魔法を展開したとしても割られる可能性があったからだ。

なのでその目的は果たした。

あとはどうやってシグナムを上空から引きずり下ろすか……。

そう思い空を見上げる。

すると立ち込める煙から赤い『何か』が飛び出して来た。

いや、『何か』ではない。

それは紛れもなくレヴァンティンを構えながら突っ込んで来るシグナムだ。

「チッ……!？」

咄嗟にディレクティで斬撃を受け止めるがその衝撃の強さにおもわず顔をしかめた。

「あの程度の攻撃で止められると思ったのか？
私も甘く見られたものだな！！」

シグナムの容赦ない連撃が次々と放たれる。

必死にディレクティで受け流すが、捌ききれないのか微かに焦りの表情を浮かべている。

先程のお返しとばかりに繰り出される剣は予想していたといえ、生半可な対応ではとても耐えられない。

もしこれが実戦であり、直撃なんてすれば確実にあの世行きだ。だが式とて剣の技術を磨き上げてきたプライドがある。

このまま終わるつもりはないし、負ける気なんてサラサラない。

（だったら……やる事は一つだ！）

シグナムの一撃を弾き返し、バックステップで一度距離をとる。

着地と同時にカートリッジをロード、ディレクティの刃が白銀に輝くのを確認するとシグナムに向けて一気に振り抜いた。

「ルフトメッサー……」

二発の風の刃が目標に向かって放たれる。

式の習得している魔法の中でも特にスピードと威力に秀でているルフトメッサーは一瞬でシグナムを捉える。

が、それとてシグナムの驚異的な反射神経の前では役に立たず、剣の一振りで弾き返される。

だが、それで良い。

「ディレクティ、カートリッジロード!!」

「yes master」

弾き返された直後、再びカートリッジをロードする式。

ディレクティの刃に高密度に圧縮された魔力、更にその上に同じように圧縮された大気を付加させる。

それにより日本刀と同じ長さ程の白銀の刃が現われた。

大気を圧縮させた刃の影響か式の周囲にはカマイタチが出現し、廃墟が次々と切り裂かれていく。

シグナムはそれを遠目で確認し、式が何をしようとしているのか直ぐさまに察知する。

「レヴァンティン!!」

「just wol!!」

カートリッジがロードされ、レヴァンティンの刃に灼熱の炎を纏う。

「紫電……」

「風牙……」

お互いに構えをとり、放とするのは必殺の一撃。

この一撃で勝負が決まる、それを無意識に感じ取ったのかなのは達も固唾を飲んで見守る。

「「一閃!!」」

両者同じタイミングで地面を駆け、甲高い音を発しながらほぼ一瞬

で相手と剣を交じあわせる。

レヴァンティンの炎が式の頬を焼き、同じようにディレクティの刃から発した風がシグナムの体を傷付けていく。

二人の魔力を乗せた熱風がフォワードメンバー達のいる場所まで届き、攻防の激しさを物語る。

そして……

「終わりだ……！」

式が鏢競り合いの状態から投擲用の小刀を即座に取り出す。

それにディレクティと同じ要領で魔力付加を施し、シグナムへ刃を向け切り裂く。

「ぐっ……！？」

予想外の攻撃によりシグナムは体制を崩し、これ以上のダメージを防ぐ為にディレクティを切り払い咄嗟にバックステップで回避するが、それを逃がす式ではなく空いた間合いを一瞬で詰め、ディレクティの刃をシグナムの首へ突き付けた。

「…………っ！」

「チェックメイトだ……」

静かに自身の勝利を相手に告げる。

シグナムも負けを認めたのかレヴァンティンの刃を下げ、戦闘体制を解く。

「私の負けだ両儀」

食堂

午後の模擬戦を終えたシグナムとヴィータ意外の隊長陣とフォーワードメンバーは夕飯を食べていた。

因みに今日の夕飯は豪華でバイキング形式となっている。

「それにしても今日の模擬戦は凄かったよ式〜。

シグナム副隊長と互角に闘うし、おまけに勝っちゃうなんてさ♪」

スバルが皿に大量……と言えるかどうかすら怪しい程の量の料理を乗せ、嬉しそうに呟く。

その言葉を先程から何回も聞いている式は半ば諦め顔の表情で半分聞き流している。

さっさと自分の分の料理を皿に乗せた後、席に座り食べ始めた。

「だけどこれは本当に凄いことだよ式？」

「そうだよ。

まだ魔法を使い始めて一カ月しか立っていないのにシグナムに勝つなんて普通なら考えられないことなんだから」

なのはとフェイトが次々と褒めるが式は謙遜でなく本心からの言葉を述べた。

「だけど実際は結構危なかったんだぜ？」

シグナムが一回空中に退避した時、あのまま空から攻撃されてたら対応しようがなかったし、斬り合いの時だって正直ヒヤヒヤしたぜ」

「あれ？」

「だけど式さんって空戦適性ありましたし、飛行魔法も習得してましたよね？」

エリオが先程の会話から感じた疑問を投げ掛け、式の事情を知っているティアナが代わりに説明をした。

その理由を聞き納得したような顔でエリオは頷いていた。

「だけど式、これからは色々と覚悟した方がええで？」

なんてたってあのバトルマニアのシグナムを負かしたんや。

絶対に合うたびに模擬戦をやろうと言うやろうしね」

はやてがニヤニヤした顔で話すが当の式は無関心な顔で言い返す。

「だったらそのたんびに返り討ちにしてやるさ。

やるからにはこっちだって負ける気はサラサラないんだからな」

「お、流石は式。

言う事が違うやね〜」

はやてが茶化すように言うのをなのは達は苦笑しながら聞いていた。だが式はこの言葉を言ったのを後で後悔する事になるのはまた別の物語である。

後日談パート2

「そうそう式、明日の午後の模擬戦は私とやるからね宜しくね」

「別に構わないけど……。」

明日は確かオレとフェイトでやるんじゃないのか？」

何故か特大の笑顔を浮かべながら言うのはに多少の不気味さを感じた式である。

「フェイトちゃんはライトニングの二人とやる事になったんだ。だから式は私とだよ」

「……取り敢えず分かった。」

それじゃオレはそろそろ休ませてもらうぜ」

なのはの言葉を聞いた後、その場から逃げるように部屋に戻っていた。

その姿をフォワードメンバーは首を傾げながら見ていた。

因みに翌日の模擬戦は以前の禁句発言のお返しとばかりに、

「あはははは、スターライトブレイカーなの!!」

「幾ら何でも無理があるだろ!!」

などの、ひたすら逃げ回る式を何かしらを吹っ切ったのはがスターライトブレイカーで狙い打つという苛め状態であった。

余談ではあるが、この模擬戦をみた全員が口を揃えて「破壊神なのは」という新たな異名を言ったそうだ。

番外編；蒼眼の死神VS烈火の将（後書き）

はい、どもどもこんばんわ闇帝です。

毎度のごとく読んで頂きありがとうございます。

さて・・・今回は感想の件で少しばかりお願いが。

私はまだこの作者様方と違ってまだ未熟な部分も多いです。

なのでもし宜しければ文章の書き方などで何かアドバイスがありましたら、そちらの方も頂きたいと思っています。

なので・・・皆さん感想お願いしま〜す！（結局そっちなか・・・）

第十一話；「聖王教会での一時」（前書き）

いや、前回から1ヶ月近くも立ってしまいました。
今まで待つてくださっていた方々、誠にすみませんでした。
それではどうぞ。

第十一話；「聖王教会での一時」

私達機動六課と謎の少女達とのレリック争奪戦が繰り広げられた日の翌日。

カタカタとキーを叩く音が無数に響く部屋の中に彼女達はいた。六課隊舎内のオフィスではスバル達フォワードメンバーと副隊長であるヴィータが昨日の戦闘のデータを纏めるのにおわれている。モニターに映し出される画像データや、現場調査した陸士部隊の報告書、更に自分達のデバイスに記録されている映像などを見比べながら必至にキーボードを叩いている。

「あら、式じゃない。

どうしたのよ、こんな所に来たりして？」

ちょうど一仕事を終えてたのか、オレが入ってきたのに気付いたティアナが声を掛けてきた。

目の前のモニターには先程まで纏めていたのであろう報告書のデータがあり、今し方終えた事を物語っている。

隣りではモニターと睨めっこしながら作業するスバルもいた。

「少し気になる件があったな。

昨日の戦闘の映像データを見せてもらおうと思ってこっちに来てみたんだ」

そう、私が普段ならば訪れことのないオフィスにいる理由はそれだ。昨日の：なのはとフェイトが最後に放った砲撃がねじ曲がった直後に見えた一つの影。

あれの存在がどうも気になり、わざわざここに訪れていたのだ。

「ああ、なるほどね。

それならアルトが記録してたデータがあるけれど…見る？」

「悪い、頼む」

「ちょっと待って…。

よし、それで何処ら辺の映像が見たいのよ？」

一言礼を言った後に、ティアナは直ぐにデータ検索の準備をした。
コイツは毎度やる事が早くて正直助かる。

「時間はなのは達が砲撃を撃った一分前後、場所は…だいたいこの
辺りだな」

モニターに映し出される地図を指差しながら、だいたいの場所を伝える。

この辺りはちょうど廃墟都市群になっていて、私達が戦闘をしている
た区域から約一キロ半程離れている。

普通の人間ならば誰かがここにいたとしても、平坦な場所でない限り、
視認する事はできないと思う。

と言うか、先ず不可能だろう。

だからなのか、ティアナは私が指差した場所のデータを出しながら
も、あからさまに疑問の表情を浮かべている。

「ちょっと式、幾ら化け物じみてるアンタでもこんなに距離が離れて
る場所を見る事なんてできるの？」

「流石のオレだって補助も無しに見ることなんてできねえよ。

ただ…確かに何かがある、そう感じただけだ。

それと化け物じみてるは余計だぞ」

「ふくん…そうゆうものかもね」

「オレの言葉はスルーかよ…」

まあ、それは良いとして…」

さっきから私に向けられてるこの嫌な視線…

その大元の発信源である場所に視線を向ける…

「先に言っておくが…オレは絶対に手伝わないからスバル？」

何かを言われる前に予め釘を刺しておく。

こうしておかないとスバルの場合はしつこく手伝いを要求してくる事が多い。

今までこいつと付き合ってくればおのずと分かってくる事だ。

まあ、情報源の半分は隣りで作業をしているティアナのお陰なのだが。

「あ、あははは…やっぱり？」

「当たり前だ…」

それ以前にオレに手伝わそうとするな。

仕事量が倍になるぞ？」

因みにこれは冗談などではない。

私はこの世界のPCの操作方法など一切知らないのだ。そんな私が報告書の作成を手伝おうとすれば…答えは明白だ。

「諦めなさいスバル。」

そもそも他人に手伝ってもらおうなんて魂胆が甘いのよ」

「あうゝ…。」

自重します…。」

手伝ってもらうのを諦めたのか、スバルはノロノロとモニターに向き直り再びキーを叩き始めた。

「スバル…その画像データって…」

スバルが別のモニターに資料用として映し出した画像。

そこにはボディースーツ系の衣服を着用した数人の少女達——後にナンバーズと言う名前である事がわかる——が映っていた。

「ああ、これもアルトが記録してたデータの一部なんだ。

あれだけの事をしでかして、使っていたのは魔力じゃなくて別系統のエネルギー…。」

そんなものを体に内包している彼女達って一体…。」

スバルが神妙な面持ちでモニターを見つめる。

確かにスバルが言った事も気になるが、個人的にはもう一つ気になる事柄がある。

戦闘中、魔眼で少女達の体を視た時、『線』が全体的に視えにくかった事だ。

私の魔眼は有機物、つまり人体などの『線』については問題なく見えるが無機物、金属系の物の『線』は視えにくい事が分かっている。ならば、『線』が視えにくいと言う事になると少女達の体が無機物で構成されているか、骨格が金属で成り立っているのどちらかに当てはまると言う事。

それはまだ良い。

問題はそれと同じような体を持つ人物がこの場にいる。

あまり考えたくはない事柄ではあるが、無視できないのも事実だ。

：まあ、それは後々考えれば良いか。

私の経験と勘が外れていなければ、別に問題が起こるような気配はしない。

ならば、今はその事を考えずに目の前の事に集中すれば良いだけだ。

「確かにな…。

だがそれを考えるのはオレ達の仕事じゃない。

判断するのは、はやて達ロングアーチやなのは達の仕事だ。

そうだろう？」

「うん…そうだね」

「なら、お前はとっととその報告書を書き上げるんだな」

は…いい、と言う返事のあとスバルは再び作業に戻り始めてた。

「…はい、できたわ。

こちら辺の画像データはそんなに多くないから、目的のものがあるかは分からないわよ？」

「ああ、感謝するティアナ」

目の前にモニターが開き、指定した区域一帯のデータが一覧に映し出されるていた。

ティアナの言う通り、表示されているデータの数は二桁にも満たな

いでいる。

これじゃあ、お目当てのものが見つかるかは正直微妙に思いながらも最初の一枚を表示する。

…いや、その必要はないらしい。

どうやら私の直感もまだまだ捨てたものじゃないな。

「…ドンピシャだ」

「はあ？」

一体何を言ってるのよ」

私の言葉に訳が分からない、と言った表情をするティアナにデータを表示しているモニターを向ける。

そこには廃墟の屋上に佇む黒い袈裟のようなコートを来た男が映し出されていた。



機動六課部隊長室

「なるほど…つまりこの黒コートの男…アラヤが式の世界から流れてきた人物である可能性が高いと…？」

部隊長室の中ではやたとフェイトが隣り合って、その向かい側では式が座っており先程提出した報告書について話していた。

内容は勿論、画像データに映っていた黒コートの男についてだ。先程まで自分の知っている情報はあらかた二人には話しており、根源の渦や起源について軽い説明、自分が殺したという部分を除いてその人物が既に死んでいる事も伝えてある。

理由は簡単で今この場で余計な混乱を引き起こしたくなかったし、二人との…いや六課全体との関係を崩したくなかったからだ。

普通の人間の思考持っていれば殺人者と共に生活をしたくはないと思うのが普通だろうし、一緒に戦うなんてもってのほかだ。

そんな事になれば、他世界の人間である自分が孤立するのは目に見えている。

それだけは何としても避けたかった。

「ただ、これはあくまでオレが直感的に感じた事だから明確な確証はない。

一応頭の隅にでも置いといてほしいぐらいだ」

その一言後、式はテーブルの上のコーヒーを手に取り静かに啜った。はやてとフェイトの方は最初は困惑した表情を浮かべていたものの、理解が早いのか直ぐに普段の調子に戻っていた。

「了解や。

それじゃあ早速明日からにでも、レリックを狙ってきた少女達のことと一緒に調べてみるわ」

「私も明日は本局に出向くから、情報がないか探してみるよ」

「悪い、そうしてくれると助かる」

式の素直な礼を聞いた二人は、これぐらい当然、と言った感じで笑

みを浮かべていた。

「そう言えばはやて。」

ちよつと小耳に挟んだんだけど、今度地上本部から六課に査察が入るって話し、本当なの？」

フェイトが唐突に訪ねた質問を聞いて、はやてはあからさまに嫌そうな表情を浮かべた。

式の方は何を言ってるのか分からないのか、なにも口を挟まずにラインにコーヒーのおかわりを貰っていた。

「そうなんよ。」

私も急にそんな命令を受けたからびっくりしたわ。

まあ：確かにうちの部隊は色々とツツコミ所が多い所やからなあ。

査察が入るのも無理はないで：」

あうゝ、と言う呻き声の後にテーブルに突伏していた。

その姿をフェイトは苦笑しながら、式は呆れた表情で見ていた。

「確かにね。」

だけど、今人事異動なんかされたら致命的だよ？」

「ううゝ、そこは何とかして乗り切らないあかんなあ」

「まあ、そこはお前の部隊長としての腕の見せ所だな。」

普段は全然隊長らしくないんだから、逆に良いじゃないか？」

「余計なお世話や！」

式の余計な一言に反応したはやてに二人はお互いに苦笑していた。

「それで：これは査察対策とも関係があるんだけど…。
そろそろ教えてくれないかな、機動六課設立の本当の理由…」

フェイトがテーブルの上の紅茶を手に取りながら、神妙な面持ちで尋ねた。

式の方は興味無しと言った表情でコーヒーを啜っている。

「そうやね：まあここらがええタイミングかな。

それやったら、今日聖王教会でカリムとクロノ君と会う予定やから、フェイトちゃんとなのはちゃんにも話そうか。

まあ、本当は式もこの件に関して無関係とは言えないかもしれないから、来てくれると有り難いんやけどね…」

「ちょっと待て、何で他の世界の出身であるオレがそんなことに関係あるんだよ？」

はやての言葉に反論を返す式の顔には疑問の表情が浮かんでいる。
フェイトもその事を初めて聞いたのか、頭の上に？が浮かんでいるような感じである。

「まあ、その事も一緒にあっちで追い追い話させてもらうから今は聞かんといて。

それで一緒に来てくれるか式？

別に強制はせえへんけど？」

「・・・分かった、一緒に行ってやる。

何も知らないでこの先ここでやっていくのも気味が悪いからな」

はやての言葉を少々考えて後、式は聖王教会に共に行くことを決め

た。

「それじゃ決まりやね。

なのはちゃんもそろそろ戻って来てる頃やし、良い時間帯やね」

「そうだね。

ちよっと待って、今呼び出してみるから」

そう言いながら、いそいそ空間モニターを展開したのはへと連絡を取るために回線を繋ぐ。

回線が繋がりフェイトが話そうとした次の瞬間・・・。

『いっちゃやあだああああ！！』

ふええええええええ！！』

画面から聞こえてきたのは、けたたましい泣き言と叫び声であった。突然の出来事に訳が分らず目が点になる三人。

三人がモニターを覗いてみると、なのはが連れて来た金髪にオッドアイの少女が彼女のスカートの裾を掴みながら泣き叫んでいた。

端っこの方にはそんな状況におろおろしながらも必至にあやしているフォワードメンバーも映っていた。



部屋に入ってきた三人はなのはの困っている表情を見て苦笑していた。

「不屈のエースオブエースにも勝てない相手はおるんやね」

「まったくだな。」

それでこの状況は一体何なんだなの？」

式がなのはの側に歩み寄り、しがみついている少女を一瞥しながら尋ねていた。

当の少女は普段から無愛想な顔をしている式に見られたせいなのか、ビクッ、と体を震わした後なのはの後ろに隠れてしまった。

「それがね…これからまた出掛けないといけないから、ヴィヴィオのことをフォワードメンバーにお願いしようと思ったんだけど…」

「すみません・・・、と呟き隅の方ではスバル、ティアナ、エリオ、キャロが小さくなっていた。

そんな彼女達を見兼ねたフェイトが側に落ちていた兎の人形を拾いながらヴィヴィオに歩み寄る。

「こんにちは」

床にあった兎の人形を拾い上げ、フェイトが優しく話しかけるとヴィヴィオから気が抜けた声が返ってきた。

「この子はあなたのお友達？」

「ヴィヴィオ？」

こちらフェイトさん。

なのはさんの大事なお友達」

「ヴィヴィオ、どうしたの？」

ゆっくりとヴィヴィオの目の高さにまでしゃがんだフェイトが笑顔を浮かべながら優しく問い掛ける。

すると先程までビクビクしていたヴィヴィオが安心したのかおずおずとなのは後ろから出て来ていた。

「ねっ？」

ヴィヴィオはなのはさんと一緒にいたいのに？」

そう問いかけるフェイトにヴィヴィオは、なのはの制服の裾を掴んでいた手がぎゅっと力を増すと小さく頷いた。

「でもなのはさん、大事な御用でお出かけしなきゃいけないのに、ヴィヴィオが我が儘言うから困っちゃってるよ？
この子もほら」

「ううっ……」

「ヴィヴィオはなのはさんを困らせたいわけじゃないんだよね？」

その成り行きを見守っていたフォワード陣と式。

手慣れたるとばかりな光景にはスバルも吃驚もので、さすがはフェイト隊長……とフォワード陣は感嘆の声を上げた。

傍から見たその光景は、まるで子を宥める母親にも見える。

「あいつ子供の扱いが随分と慣れてるんだな」

「まあ、フェイトちゃんにはまだ小さい甥っ子と姪っ子がいるから

なく。

それのお陰かもしれないやね」

「なんだ、あいつ兄でもいるのか？」

「そうやで？」

義理のお兄さんになるんやけどな。

これから会いに行く人がその一人やしね」

「ふん…」

フェイトの意外な特技を見て、式は少し感心していた。

「だから良い子で待ってよ？」

「うん…」

「ありがとうね、ヴィヴィオ。

ちよっとお出かけしてくるだけだから」

そんなこんなでフェイトの参入もあって、苦戦を強いられたなのは達だったが、なんとかヴィヴィオを落ち着かせ、頷いた。

今にもまた泣いてしまうではと思うほど涙目ではあるが、あとのことはフォワードメンバー達に任せる事にして、なのは、式、フェイト達は聖王教会に向かう事にした。



聖王教会本部

静かに扉をノックする音が響き、その部屋の主であるカリムは、どうぞ、と入ってくるように促した。

ドアが開かれ、入って来たのはカリムが良く知るはやてと、今回が初対面となるのは、フェイト、式であった。

「失礼いたします。

高町なのは一等空尉であります」

「フェイト・テストロッサ・ハラオウン執務官であります」

「両儀式二等空士であります」

敬礼する二人に習いながら、式も礼園女学院の時のように猫を被りながら敬礼をする。

因みに階級の方ははやてがこちらの世界にいる間の為に用意した本物である。

「初めまして、聖王教会・騎士団騎士、カリム・グラシムと申します。

どうぞ、こちらへ」

そう言い、なのは達を窓側のテーブルに案内する。

それぞれ断りを入れて椅子に座る。

式の方は先に座っている見慣れぬ男性が気になっていた。

「あ、そっか式は初めてだったよね。

この人は・・・」

「初めましてクロノ・ハラOWN提督だ。
君の噂は耳に届いてるよ両儀式、かなり見どころのある魔導師と聞
いてる」

なのはの言葉を遮ってクロノが自ら名乗りをあげながら、手を差し
出す。

「初めましてクロノ提督。両儀式と申します、以後お見知りおきを」
それが握手の為のものだと理解した式が普段ならば絶対に浮かべる
事のない笑顔で握手をり返す。

『はやてコイツってまさか・・・』

『あはは、流石に気付いたかな。』

そ、この人がさっき話しとったフェイトちゃんのお兄さんやで』

式がなるほどと納得したあと、カリムの好意によりなのは達は普段
通りに話す事になった。

なので式の方も猫を被っていた時の清楚な女性から、いっぺんして
元の無愛想な姿に戻っていた。

式のあまりの変わりように驚いたカリムとクロノと軽く雑談した後、
部屋のカーテンが閉まり、機動六課設立の真実についての話しが始
まった。

「六課設立の表向きの理由は、ロストログア・レリックの対策と独
立性の高い少数部隊の実験例だ。」

知っての通り六課の後継人は僕と騎士カリム、僕とフェイトの母親であるリンディ・ハラウン。

それに加え、非公式ではあるが三提督も設立を認め、協力の約束をしてくれている」

それぞれの映像のパネルが映し出され、三提督の映像が出た瞬間なのはとフェイトは驚きの表情をみせた。

ただ式は…。

（フェイトの母親って・・・いったい歳幾つなんだ？

とても子持ちのようには見えない若さなんだが・・・）

などと別の部分で驚いていた。

「その理由は私の能力と関係があります」

そう言って立ち上がったカリムは手に持っていた古紙のようにしか見えない束の紐を解いた。

「私の能力『プロエーティン・シュリフテン』。

これは最短で半年、最長で数年先の未来、それを詩文形式で書き出した預言緒の作成を行う事ができます。

二つの月の魔力がうまく揃わないと発動できませんから、ページの作成は年に一度しかできません」

紙の束は一枚一枚が淡く輝き、カリムの周りを囲むようにして周りだし、その内の三枚がなのは、フェイト、式の前に送られる。

「預言の中身は古代ベルカ語で、しかも解釈によっては意味が変わ

る事もある難解な文章。

世界に起こる事件や事柄をランダムに書き出すだけで、解釈ミスを含めれば的中率や実用性は割と良く当たる占い程度。
つまりあまり便利な能力ではないのです」

古代ベルカ語などミッドの話しに疎い式は途中で念話によるはやての説明を受けながら静かに話を聞いていた。

「だが、いくらデメリットがあるとはいえ、無視できるものではない。
るまい。

根拠の無い占いとは違って『割と良く当たる』のだからな。
騎士カリムの預言は聖王教会は勿論、次元航行部隊のトップも有識者の予想情報の一つとして目に通す。
信用するかどうかは別としてな」

「因みに地上部隊はこの預言がお嫌いや。
事実上のトップ、レジアス・ゲイズ中將がこののレアスキルがお嫌いやからな」

「そんな騎士カリムの預言に数年前から少しづつある事件が書き出されている」

クロノの言葉に続いて、カリムは一枚の紙を手に取り静かにその文面を読み上げる。

『古い結晶と無限の欲望が集い、交わる地。
死せる王の下、聖地より彼の翼が蘇る。
死者達が踊り、中都大地の法の塔は虚しく焼け落ち、それに先駆け
数多の海を守る法の船も焼け落ちる』

「それって……」

「まさか……」

カリムの預言内容にピンと来たのはとフェイトは直ぐさまに反応する。

「ロストログアを切っ掛けに始まる管理局地上本部の壊滅と管理局システムの崩壊……」

カリムの口から出た預言の解釈。

そのあまりの事の大きさに一堂に沈黙が走る。

「……少し良いか？」

その沈黙を破り、式は先程まで自身が感じていた疑問を口に出し始めた。

「これはあくまでオレの考えだから別に聞き流してくれて構わない。言い方は悪いが騎士カリムの預言は完璧じゃない。

オレの聞く限りじゃ管理局ってのはかなりの数の次元世界を管理してるんだろう？」

そんな巨大な組織が崩壊するなんてのは異世界の人間であるオレからしてみれば到底考えられない」

式の言葉に耳を静かに傾ける一堂。

「それに地上本部が攻撃されて壊滅的なダメージを受けたとしても、それが切っ掛けで管理局全体が崩壊するのはどうかと思うのだが……」

「確かに君からしてみればそうかもしれないだろうな・・・」

そんな式の疑問に答えたクロノであった。

「確かに管理局は次元世界を守護している巨大な組織だ。

だがその分、それが崩壊した時の世界にたいする影響はかなりの大ききになる。つまり・・・」

「なるほど・・・もし地上本部が壊滅することになれば管理局を邪魔に思う連中が動きだし、それによって少なからず全体が崩壊する可能性が出てくると言う事か」

式の言葉に頷いたはやてはそれに続くように説明を始めた。

「本局と地上本部の仲が悪いのは前々からなんやけど、流石に今回は事の大きさからどうにかせないけない。

だけど、クロノ君達本局が協力を申し出ても強制介入ということになりかねない、無用な確執を生むだけや。

そこで地上で自由に行動でき、尚且つ本局が直接指示ができる部隊が必要となった、それが機動六課なんや」

「今回の事件も預言が外れてレリック絡みだけで終わればそれが一番だ。

だけどそこから更なる非常事態、地上本部が壊滅するまでに発展した場合、本局が本格的な介入があるまでの時間を稼ぐ。

またはなのは達リミッターを解除して事態の収拾を行わせる。

これが機動六課を設立した本当の理由だ」

はやてとクロノの二人によって話された真実。

その事の大きさを実感したなのとはフェイトは改めて協力を要請した騎士カリムの申し出を快く受け入れた。

式の方も、どうしてもはやてが身元も証明できない自分をああも簡単に機動六課に誘った理由が理解できた。

「機動六課の設立の裏表は分かった。

それで肝心のオレが呼ばれた理由ってのは何なんだはやて？」

「それは私から説明致します両儀さん」

はやての代わりに式の疑問に答えたのカリムだった。

「実は今回皆さんにお話しした物とはまた別に、気になる予言がありまして、それが両儀さんに関係あるのではないかと思ひ来てもらったのです」

「気になる予言・・・？」

なのはの言葉に頷きながら、カリムはテーブルの上に並べられたプロフェーティン・シュリフテンの中から一枚取り出す。

それを目の前に掲げ、書かれている文面を静かに読み上げ始めた。

『死神の瞳を持ちし少女。

停止の起源を宿し、根源の渦へと目指す者と合間みえる』

死神の瞳、起源、根源の渦。

どれもこれも自分にとっては馴染みのある言葉が並べられており、式は直ぐさまにこの予言が自身に関係があると悟った。

なのは達も薄々ながら式に関係していると感じたのか一斉にその瞳が本人へと向けられる。

「『死神の瞳を持ちし少女』って……確か……」

「ああ、多分オレの事だ。」

『直死の魔眼』はケルト神話の『バロールの魔眼』と酷似しているから『死神の瞳』とも呼ばれているからな」

式の言葉に納得しながら一堂は再び預言の内容の解釈に戻った。

「これって……式が何かの敵と対決するって解釈できるんやけども……」

「だが……これは一個人を予言している。」

そんな事はあるのですか騎士カリム？」

クロノの言葉にカリムは考え込むような態度を示した。

「私の記憶が正しければ、このプロフェーティン・シュリフテンで一個人を予言した事はありません。」

ですが……先程の予言の解説を優先したため、この予言が本当に一個人を指しているのかどうかはまだ分かりません」

カリムが後半の申し訳なさそうに話しをしていた。

確かに自身が書いた予言について明確な説明を行う事ができないのは心苦しいであろう。

「それで騎士カリム、この他には解説できている部分はないのか？」

一方の式はカリムを見据えながら尋ねていた。

「今分かっているのは『不屈の心を継ぎし者達』『帰還せし場所』
と言う言葉しか・・・」

カリムの言葉に心当たりがないのか式を始め一同は首を傾げる。

「私の方でも引き続きこちらの翻訳を優先してやってみます」

「お願いします騎士カリム」

翻訳に力を尽くしてくれると約束してくれたカリムになのは達は礼を言い、クロノと分かれを告げ聖王教会を後にした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6702h/>

魔法少女リリカルなのはstrikers～蒼眼の死神～

2010年10月8日23時32分発行